

之に準じた發育をする。その後の二年間も可なり發育の盛なときであるが、それ以後は漸次その勢を減じ、男子に在つては八歳乃至十一歳に至つて、その勢少しく弱く、十一歳に於ては、最も微弱にして身長増加僅に三、八センチである。十三歳は發育の最も盛なときであつて、六、三センチを増し、十四歳は少しく衰へて四、八センチを増す。十三歳に於て身長發育率の極限を示すのは、主として脚部の長さの生長によるのであつて、之について軀幹の主として増大する時期が来る。随つて、體重が最も優勢に増加するのは、身長増加の最も優勢であつた十三歳の翌年即ち十四歳であつて、この一年間に五、一キログラムを増す。故に日本男兒の發育の最も旺盛なる時期は十四歳であると推定される。

之を女兒について見るに、六歳より九歳に至る身長成長する割合は男兒に劣り、八、九の兩歳における身長増加は最も微弱であつて、共に四、二センチであるけれども、男兒の十一歳におけるほど微弱にはならない。十歳に至れば、身長發育急に旺盛となり、五、五センチの増加をなし、次年は更に多くして六、四センチとなり、十二歳に至りて最盛の時に達し、六、七センチの増加をなすに至る。然るに十三歳には大に勢を減じて四、二となり、十四歳に至れば更に激減して僅に一、五の増加を示すのみとなる。

體重増加の割合について見るに、女兒が男兒に劣るのは、六歳から九歳に至る三年間であつて、十歳に至れば既に増加の趨勢を現じ、身長發育の強盛となり始める十歳の翌年十一歳頃から急に體重を増加し始め、この年に三、四キログラムを増し、十二歳に於て三、六キログラムを増す。就中身長發育の最も盛なのは十二歳であるから、その翌年の十三歳は最も體重の増加するときであつて、一年間に五、一キログラムを増すやうになる。この數字は男兒の十四歳に於ける體重の増加に相應してゐる。故に日本女兒の發育の最も旺盛なる時期は三歳であると推定される。

以上によつて本邦の女兒は十一歳より十四歳に至る四個年間に於て眞の發情期發育をなし、男兒に先つこと一二年にしてこの期間を終了するのである。随つて女兒の身體各部の發育も、十歳までは分娩以來常に男兒の下に位してゐたのであるが、十一歳になると男兒を凌駕し始め、十四歳に至るまでは、體重は勿論、身長・頭圍・胸圍等も亦男兒の上に在ることになる。この關係は、精神發達に於ても屢見るところの現象であるから、尙念のため體重・身長發育の模様を曲線にして示しておく。(第十六圖)

發育の最も急激なる時期は、細胞の量的増加の最も盛なる時期であつて、活力の最も増加する時であるから、教育上からいつても極めて大切な時である。又この時代は最も疲勞を招き易い

時で危険も多い譯である。

發情期の遅速は、生殖腺の發育によることは無論であるが、發育と關係を有するものは必ずしも生殖腺のみではない。甲状腺の如きは、特に發育と關係をもつてゐるものゝ一つである。甲状腺は喉部を構成してゐる甲状腺軟骨の兩側にある腺で、そこに故障があつたり、疾病にかゝつたりすると、骨の發達が停止し精神の發達も阻害せられ、いはゆるクレチン病といふものになる。之を治癒するには、この腺から分泌せらるゝ成分と同じものを食物に加へて與へるとよいといはれてゐる。

氣候及び季節が成長と至大の關係をもつてゐることは、温帯に住む人が一體に身長の高いこと、又春と夏とは身長が増加が著しく、八月から十二月にかけては體重の増加が著しいことに徴して明らかであらう。又日中は體重を増へて身長を減じ、夜間は之に反するといふ事實もある。その他この方面について研究すべきことは澤山あるであらう。發達動搖といふのは、これ等の事實を總稱したものである。

三、身體各部の生長及び發達 身體各部の生長は同じ程度で進行する者ではなく、各部分が別に相續いて生長發達するものである。種々の器官は各自の率とリズムとによつて發達を遂げる

のであつて、他の器官とは殆ど關係をもつてゐない。例へばフィロルト又はビショップによれば、初生兒の腦量に三八〇グラムであつて、最初の一年間に二倍以上に増加して八八五グラムとなるが、第二年目に於ては、僅に三〇%又は一〇%をまして、九〇八乃至一〇〇〇グラムとなるに過ぎない。六歳までは精々一〇〇乃至一五〇グラムを増すに過ぎないが、その絶対量は約一三〇〇グラムに達し、ほぼ大人の壘を摩するやうになる。七歳及び九歳の間に於ては、著しく腦髓の聯合纖維の數を増す、即ち發育は著しくないが、大なる發達を示す時期に屬するのである。引つゞき發情期までは、徐々に發育し、その後三十歳までは幾らかの發育はあるが、十二歳乃至十四歳の頃に至れば、腦量の發達は事實上停止してしまふのである。之に反し發情期に於ては、生殖器と共に、心臓と肺臓とが急激に發育する。

次に筋肉及び腸の最大なのは五十年代であつて、心臓と血管が最大に達するのは、八十年代である。十五歳の男兒の四肢は十一歳兒童又は大人のに比べて見ると、割合に長い。六歳の兒童はその重量からいふと、大人に比して二倍の酸素を要することも明らかである。又兒童の骨は多量の可塑性を有するものであるから、不良なる姿勢のために畸形を惹起し易い。肺活量と握力とに於ては、各年齢を通じて男兒は女兒に優つてゐる。又兒童は身體を維持するばかりでなく、之を

發育せしめなければならぬから、三歳兒は大人の五分の一の大きさしかなくとも、食物は四〇%だけ多くを要する。栄養過多よりは寧ろ栄養不足又は栄養不良の方が危険である。これ等の例によつて兒童身體各部の發達は決して均齊に發達するものでなくして、極めて不規則のものであることが知られる。左表はフィロルトの作つたもので、生れたときの大きさを一〇〇として、身體各部の生長の割合を示したものである。

	二十一個月の終	七歳と一箇月半	大人
頭の長さ	一五〇	一九七	二〇〇
頭の上	二二四	一五〇	一五七
顔の長さ	一〇〇	一五〇	二六〇
顎から胸骨の上端まで	五〇〇	七〇〇	九〇〇
胸骨	一八六	二〇〇	三三四
腹	一六〇	二四〇	二六〇
脚	二〇〇	四七五	四七二
足の高さ	一六〇	二〇〇	四五〇
上膊	一八三	三六	三〇
前膊	一八二	三三	三五〇

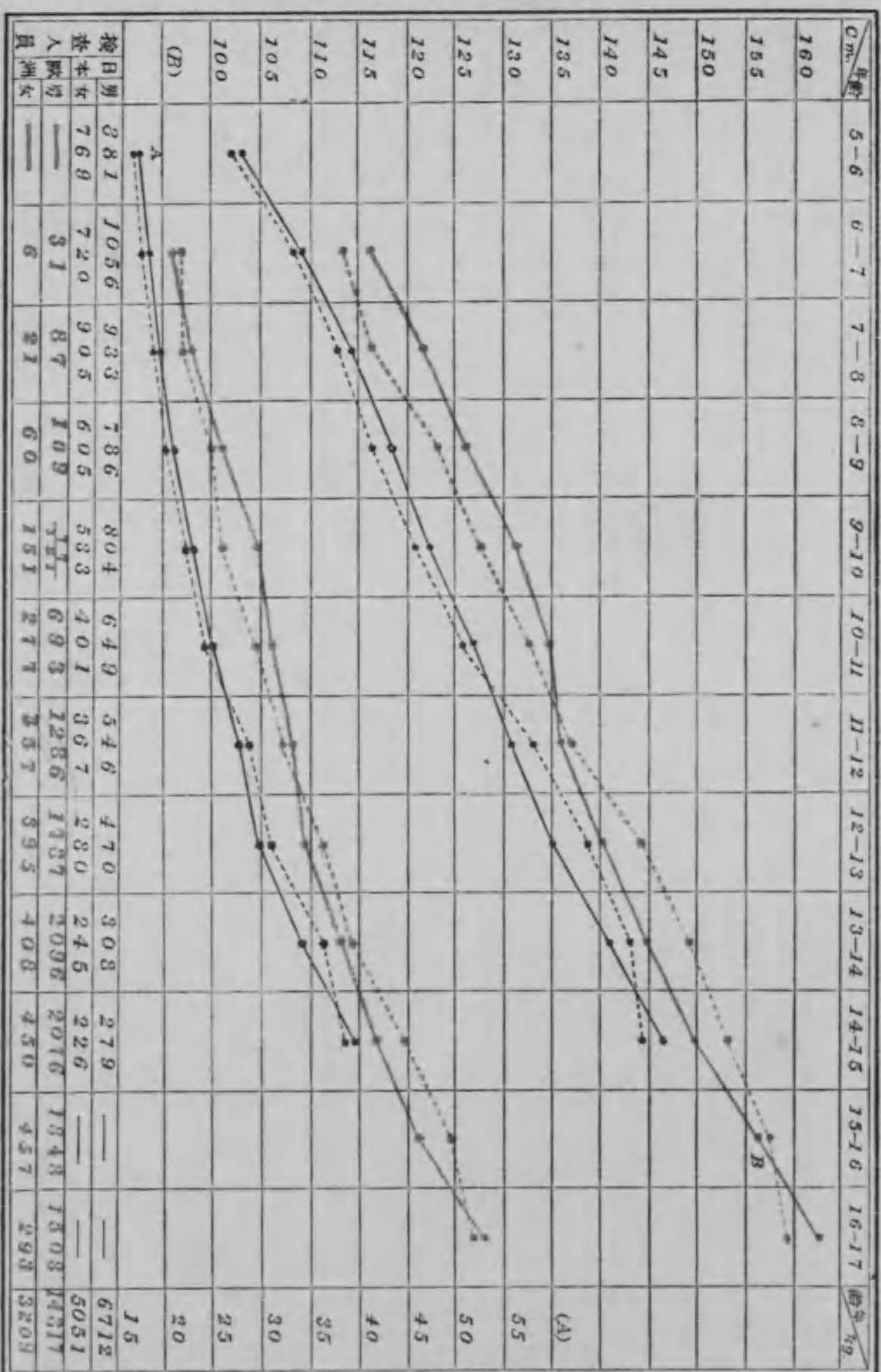
四、生理年齢と暦年齢 身體の各器官・骨格及び神経系の發育が各その率を異にすることは、極めて重要な事柄であるが、更に個々の兒童について調べて見ると、一年間に於ける發達の平均率と著しく異なるものが尠くない。随つて兒童が分娩後に經過した年数だけでは、果してどれだけの身體發達を遂げたかを知ることが出来ない。例へば十四歳の男兒の中には、未だ發情期に達せぬものもあらうし、經過中のものも、經過後のものもあらう。クラムプトンは曾て「學業に及ぼす生理的年齢の影響」と題する論文の中に、ニューヨーク市のハイスクール入學の年齢に達したもののうち、發情期前のものと、中のものと、後のものとは、ほぼ同數であつたことを報告してゐる。かくの如く、發情期前後に於ては、暦年齢と成熟の程度との一致しないことが多いのであるが、發情期に於ても兩者の一致しないことが多い。例へば五歳になる男兒と女兒があつて、女兒は生理的年齢に於て男兒よりも一年進んでゐるとすれば、女兒は生理的に入學の資格をもつてゐるが、男兒の方は今一個年待たなければならぬ。今日、教育上の施設はすべて暦年齢を土臺にしてゐるが、暦年齢と生理的年齢とは必ずしも一致してをらぬし、生理的に成熟の程度が違へば、精神作用の程度も違ふであらう。如何にして生理的成熟の程度を計るべきかは、研究を要することであるが、成熟が進んで居れば、精神作用も進んでゐるといつて差支ない。

かりに成熟と精神との關係を別にして考へて見ても、曆年齢と生理年齢とを區別することは極めて大切である。曆の上では同じ年でも、物質的には同じでないかも知れぬ。随つて精神的にも同一のものであるとはいはれない。して見ると、曆年齢が同じであるからといつて、それを同じ學級に編制し、同じ質、同じ量の課業を課し、同じ筋肉作業を行はしめるといふことは、當を得たものではない。肉體的に成熟すれば、別に學校教育は施さずとも、何等かの觀念・理想・態度の發達することは明らかである。たゞ十四歳になつたといふだけでは、工場その他で必要とするだけの體力と知力とをもつてゐるか否かは保證が出来ない。日本語を知らぬ十二歳の兒童は、普通の小學校に入れて一緒に教育する譯には行かぬ。十八歳にして、十歳の智能しかもたぬものもあるが、さりとてすべての點が十歳並であるといふ譯ではない。かういふ風の事實を考へて見ると、教育の實際上考へなければならぬことが澤山出て來るであらう。

第二節 發情期に於ける身體的變化

三島博士の統計的研究によれば、本邦女兒發情期の中心は凡そ十二歳であつて、その全期間は十一歳より十四歳に涉る四個年間である。而して男兒の發情期は之より遅れること一歳乃至二歳

第十六圖 體重身長曲線 (六才より十七才まで) 三島及A.Key.



A體重 B身長 ————男……………女 (黒日本 紅歐洲)

醫學博士三島通良著日本健康小兒の發育論所載

である。この期は第二回の誕生と稱せらるゝ程であつて、兒童の心身が一大變化を起す時期である。今その身體的變化の著しきものを掲げると、次の如くである。

一、最も著しい變化は前に述べた如く、身長の急激に増加することであつて、それについて體重の増加を來たす。無論それにつれて、骨格も筋肉も内臟諸器官も發育する。それに伴つて各器官の働きにも變化を來たし、自然その活動に伴なうて生ずる感情・感覺にも變化を來す。

二、血行系統特に心臟と血管との量的關係に變化を來たす。この事は尙後で詳述するが、この時期に於ては、血管の割合に、心臟の方が急に發育するから、發情期に於ては、著しく血壓が高まり、同時に體溫も少しく昂上する。血液の量も體重に伴なうて増加し、比重も増加する。この事は男子よりも女子に於て著しい。又血液の成分も男女共に變化して來る。心臟の鼓動數は減少するが、強さは増すであらうといはれてゐる。

三、肺臟・胸腔及び開張度も著しく増加する。而してこれは血行の變化と密接に關係してゐる。

四、腦の重量は殆どその極限に達してゐるが、腦の中層の纖維は急に長い間の生長を始める。

この纖維は皮質の各部分相互の聯絡を司るものであつて、知能の發達はこの部分の發育に俟つものである。

五、皮膚に終つてゐる神経末端の数は、子供と大人との間に相違はない。併しながら身體の表面積は發育と共に著しく増大するものであるから、一定の面積内に於ける神経末端分布の密度は子供の方が著しく大である。随つて發情期に達すると共に、皮膚感覺は幾分か鈍くなることは確かである。他の感覺器官も果してその辨別力が増進するや否やは疑はしい。併しながらこれ等の感覺やその美的意義に對して著しく注意するやうになつたことは明らかである。この意味に於て皮膚に對して敏感である。又食物や芳香や色・形・音に對して好惡の念の著しいことも本期の特徴である。

六、筋力に關して種々の検査を行つたところによると、握力・エルゴグラフの仕事・叩き方の速さ・反應時間などは、この期に於て著しく進歩するが、確度の進歩は見えないやうである。

七、聲が著しく變化する。男子に在つては、發情期に入ると共に、喉頭軟骨著しく發達して聲帯は長く且厚くなるが故に、聲の調子が低くなつて、いはゆる「聲變り」をする。女子にあつても喉頭は一般に長くなり、随つて聲音に變調を來たす。

八、以上は兩性に共通した變化であるが、兩性に特有なる變化も少くない。まづ發情期に入れば、内外の生殖器及びその副器は増大し且充血する。女子の骨盤は固有の形狀を呈し、乳腺が發

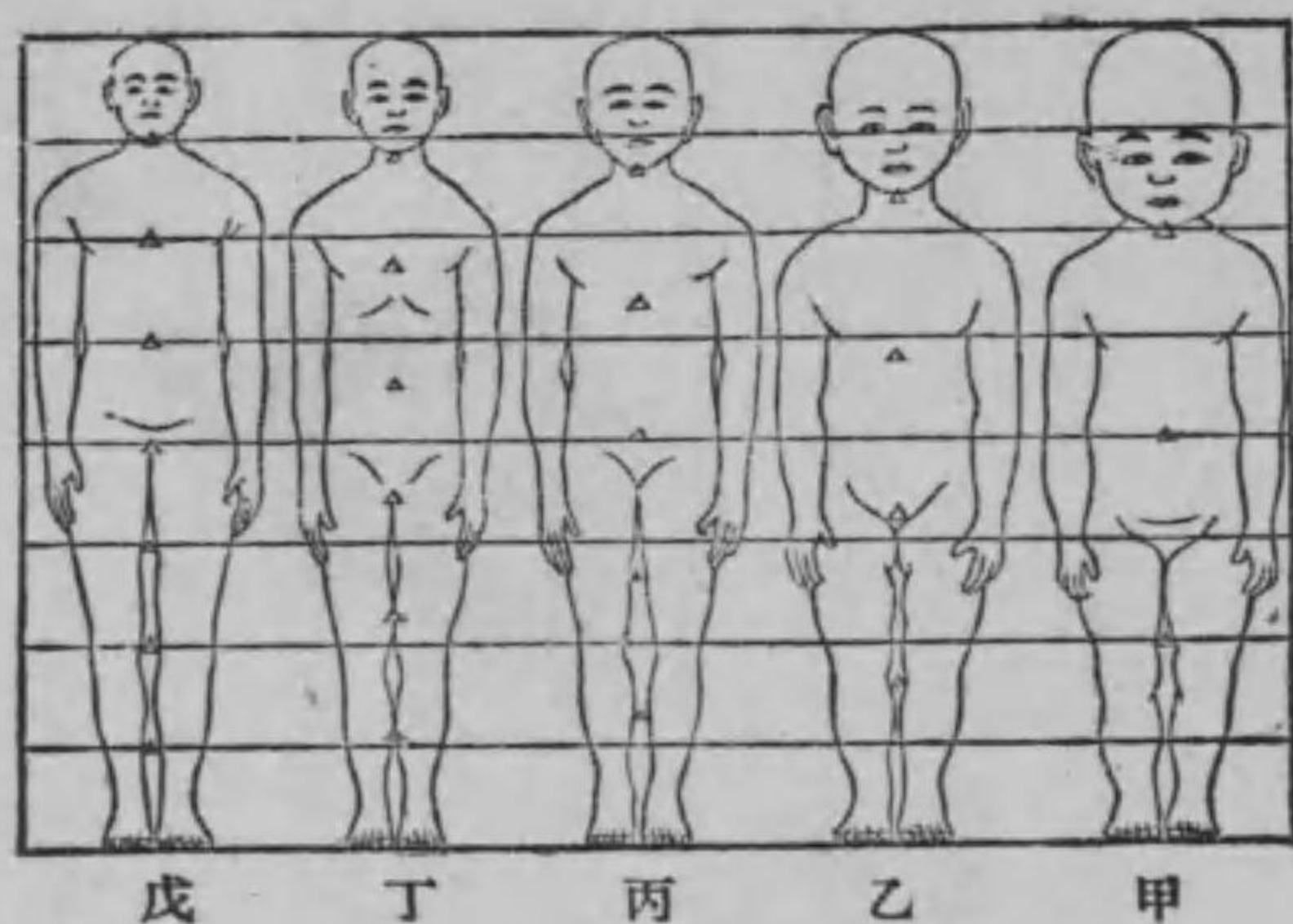
達して乳房が膨大する。陰毛及び腋窩毛の増生することは男女共通であるが、男子には鬚髯の發育がある。又男子に在つては筋肉發達して筋肉固有の形狀を呈するに至るが、女子に在つては、皮下脂肪多量に貯へられ、全身圓みを帯びるやうになる。男子が精子を含む精液を分泌するに至るのは十五歳乃至二十歳の間であり、女子は十四歳半にして初めて月經の初潮あり、同時に卵を生成する。

第三節 大人と子供との生理的相違

大人と子供とは、知力に於ても、感情に於ても互に異なるところが多いが、身體上に於ても互に異なるところが少くない。子供は大人を小さくしたものだと思つてはならぬ。大人の心理學では、子供の精神作用に關する問題を解決することが出来ないのと同じく、大人の衛生を以て直に子供の場合に適用することは出来ない。單に生理上のみから見ても、子供と大人との相違は決して少くない。子供と大人とは、毛蟲と蝶位違ふといつた人もあるが、それは決して過言ではないと思ふ。兒童について精細に研究を遂げて見ると、如何に大人との間に著しい差異をもつてゐるかどわかる。テルマンもいつてゐる通り、子供と大人とは、一本の纖維から、一粒の血球・骨細胞、

身體各部の割合に至るまで違つてゐる。外圍と食物の及ぶ影響も子供と大人によつて一々違ふ。又タイラーもいつてゐる通り、各器官の大きさの割合及び釣合の如きも、子供と大人によつて一様でない。大體についていへば、分娩後成熟するまでに、筋肉の重さは約三十七倍に達するものである。肺は十八倍、肝臓・心臓及び腎臓は十二三倍になる。随つて各一貫匁の重量について要するところの榮養と酸素は、大人に比して遙に大であるし、又排出するところの二酸化炭素とエネルギーと老廢物も大人に比して遙に大である。各年齢の大人と子供とは、死亡率を異にし、罹病率を異にし、各器官の釣合を異にし、榮養攝取の割合と消費の仕方を異にし、全然同化作用と習慣とを異にしてゐる以上、兩者はその成立を異にし、別個の生活を送つてゐるといつて差支ない。故に大人と子供とはその取扱に於ても、亦その教養に於ても、全く別個のものでなければならぬ。大人について研究したことを直に子供に適用することは出来ない。大人にとつては有利なことも、子供にとつては有害なることもあるであらう。

こゝに掲げた圖は身體各部分の割合を大人と子供とについて比較したもので、子供は手足の長さ比べて胸が馬鹿に長い。なぜかといへば、生れたての子供はあまり手足を動かさな。手足を動かすよりも囁の方が餘計に活動する。乳をのんで消化する所は胸である。又子供の生活の大



第七十圖

身體各部の割合の變化するを示す

部分は泣くといふことであるが、泣くことも胸の働きを要する。故に手足よりも胸の方がさきに發達して、後で手足が發達する。即ち初生兒は手足よりも胸の方が長いのであるが、生長するに随つてその割合が違つて来る。又子供は身體の割に頭が大きい。手の割に足が短い、それが大人になると、足の方がずつと長くなる。この關係は圖を見ると明らかである。即ち(甲)生れたての子供は頭の長さが全體の四分の一である。(乙)の二歳に於ては五分の一になり、(丙)六歳では六分の一になり、(丁)十五歳では七分の一になり、(戊)十分に成長して二十歳になると、頭が全長の八分の一になる。次に新生兒の手を動かすのを見ると、初めは肘の關節の働くことが少く、多くは肩の關節が働く。従つて割

に肘と肩との間が先きに發達する。三歳から六歳位になると、腕と胸とがほぼ同じになる。それから段々發達していつて大人になると、胸よりも手の方が長くなる。これはつまり手を使ふため

にそれだけ手の發達を來すのである。

筋肉の發達も大人と子供とによつて著しく違ふ。分娩後一年間は筋は全體重の二一%を占めるに過ぎないが、大人になると、全體重の五割を占めるやうになる。然るに體重は男子に在つては十二三歳までに十八倍し、女子は十九歳乃至二十歳にして十六倍するのであるから、十八貫以上もある人は、筋が三十五倍乃至四十倍に達する譯である。即ち筋は他の器官に比べて見ると、他器官に抜で、特に著しい發達を遂げるもので、しかもその發達の如何は筋を使用する程度に正比するものである。且生れてからの一年間は、各の筋が一つ一つ別に隆起して見えるやうなことはない。子供の手や腕を見ると、どこからどこまでも、筒のやうな形をしてゐて、筋そのものゝ形は少しも現れてゐない。即ち大體に於て女子に近い。それが段々發達して三四歳頃になると、第一に肩の所に丸みをつける三角形が認められるやうになり、更に大人になると、皮膚に近いところの筋肉は非常に隆起して、筋の形が外に現れて來る。これ等の變化も大人と子供との間に見らる著しい相違である。

尙心臟の容積と血管の太さとの關係も、大人と子供とによつて著しく違ふ。ベネケによれば、人の身長一〇〇センチメートルに對する心臟の比容積及び大動脈の比周圍は左の如くである。

後年	生齡	心臟の比較的容積	大動脈の比較的周圍
第一年後	後	四〇—五〇	四〇
第三年後	後	四六—五〇	四三
第七年後	後	五三—六〇	四六
第一三—四年後	後	六三—七〇	五〇
發育完了後	後	七〇—七八	五三・五
成熟期	後	一五〇—一八〇	四〇

この表によると、成人の心臟の容積は兒童期より成熟期に達するまでに、大なる變化をなすに拘らず、大動脈の周圍と身長との比は、さほどに大なる變化を認めない。之を發育の絶對量についていへば、心臟の大きさは、兒童期より成熟期に達する間に、約十二倍大に生長するのに對して、大動脈周圍は僅に三倍大に生長するに過ぎない。つまり兒童の血管は大人に比して割合に太いから、血壓も亦隨つて低い、血管太くして血壓が低ければ、心臟の鼓動は其だ樂な譯である。故に兒童は大人に比して急速の運動に堪へ得るのである。これも大人と子供との相異點の一つである。

以上によつて、大人と子供とは生理上種々の點に於て相違してゐることがわかつた。して見る

と、兒童は衣食住を始めとしてすべての生活様式が子供の本質と一致したものでなくては、その健康を維持することが出来ないのである。尙この事については、最後の章に於て、言及するつもりである。

第七章 兒童研究の心理學的基礎

第四・五章においては兒童を純生物學の見地から見て、進化論と遺傳學との大要を述べ、前章に於ては、單に生理學的發育の事實を摘記したが、本章に於ては、心理學の見地から見て、人間行動學の大要を述べようとするのである。換言すれば、以上に於て、兒童研究に必要な生物學的の豫備知識を與へたが、本章に於ては、同じく兒童研究に必要な心理學的の豫備知識を供給しようといふのである。併しながらこゝに心理學といふのは、前章の生物學といふのと全く異つた見地を指すのでもなければ、無論相反する見地をもつてゐるでもない。人間も一個の生物である以上、心理學的といつても、やはり生物學的の考察をすてゐることは出来ない、寧ろ生物學的考察の延長であると考え方がいゝのである。前々章に於ては遺傳を負つてゐるところの生殖細胞が互に結合して新しい生命を作る生物學的の過程を述べたのであるが、その新生物が生長發

達して成熟するまでの過程を研究するためには、前章の人身測定學上の事實の外に、どうしても人間の行動といふものゝ概念を明らかにしておかなければならない。本章はつまり生物の行動を心理的に觀察した結果の概略を述べようと思ふのである。

第一節 生物の行動

一、行動の意味 すべての有機體は外圍の中に住んでゐる。この外圍から來るところの刺激に對して有機體が種々の反應を營む、その反應の總計を名づけて行動といふのである。比較生物學者や心理學者がこの頃盛に用ひるやうになつた語である。この語の中には、物理的及び生理的行動は勿論、精神的の活動も含まれてゐる。今まで二言目には物質と精神とを對立させてゐたのに對して、すべての生活過程を統一的に見るためには、どうしても行動といふ語をさういふ意味に解釋する必要がある。心身の關係如何の問題は昔から色々と研究されてゐるが、我々の立場からいふと、關係を明らかにせねばならぬやうな二つの別物ではなくして、寧ろ同じ生活活動に屬するものである。身體も生活を營めば精神も生活を營む、生活者としては同じものである、これを概念の上で區別して、さてその關係如何と尋ねるのは、殊更問題を起すやうなものである。人間

を生物學的の統一體と見たときに、始めて身體の問題も精神の問題も本當に了解されるであらう。

生物が行動を營むのは何故であるか。進化論の教へるところによると、生物は非常に澤山生れるけれども、氣候に適しなかつたり、敵に食はれたりして死ぬものも甚だ多い。かくの如き生存競争の結果、残つたものは適者で、適者は生存するのである。つまり死ぬものは外圍に順應が出來なかつたのであるし、生存したものは外圍に對する順應を全うしたのである。生物が色々な行動を營むのは、この外圍から加へられる種々の刺激に對して順應を全うせんがためである。換言すれば、生物が外圍に順應せんとする努力が種々の行動となつて現れて來るのである。その行動が生活を全うする上に都合のよいやうに發達したものは益々榮えて行くし、然らざるものは滅びて行くの外はないのである。

そこで生物の行動を生物學の見地から研究しようとする、行動の理化學的基礎、その解剖生理的基礎、その發生等を明らかにしなければならぬし、一步心理學といふ領域にはひつて來ると、生物の營む行動の種類、その人間生活上における機能如何といふやうな問題が起つて來る。

二、行動の理化學的基礎 前述の如く、すべての有機的生活は外來の影響に對して反應する性質をもつてゐる。ジンニンクスやその他の學者の觀察したところによると、アミーバのやうな



動移のパーミア 圖八十第

(氏グンニエジ)示を序順る

アミーバは十分にその偽足を水中に延ばしてゐるから、その本體は僅に偽足を連絡するだけのものに過ぎない。この階段に於ては、丁度偽足の一つが固體の表面と觸れたところである。即ち、外圍から刺激を受けたのである。Bに於ては、この刺激に順應して、他の偽足中の原形質は、刺激を受けたる偽足の中に流入し始める。Cになると、アミーバは更にまとまつた形となり、固體の表面をはつて行く。この際原形質は太い部分から細い部分に流れて行き、上方の表面が前進することになる。丁度半流動體を充たした袋の上前端を引いて轉がして行くやうな運動の仕方をする。これ等の運動は決して無意味な亂雜運動ではなくして、その時々境遇に適當したものであることは明らかである。かくの如き下等動物が運動を営むのは、

恐らくその有機體自身が極めて動き易く可型的であるためであらう。然らば有機體は何故に外來の刺激に對して反應すべし性質をもつてゐるか。それを明かにするには、細胞の化學的物理的性

質を詳論しなければならなくなるが、とにかくさういふ性質があるために、有機體の進化も行はれるし、色々の行動も営まれるのである。それがなかつたならば、何等石塊と選ぶところはないのである。

發生的に溯つて考へて見ると、行動の形式として最も簡單なものは有機體が或種の刺激に對して、大まかなる理化學的の反應を行ふことである。あらゆる行動は皆これを先驅として發達して來る。生物學者は之を向動と名づけた。有機體が外來の刺激を受けたとき、その刺激の方に動いて行つたり、それを遠ざかつたりして、自分の位置をかへる、若しくは定着した生物に於ては、自體の一部をその刺激に對して運動せしめる。簡單な動物に於てはその反應が純機械的に行はれる、それを名づけて向動といつたのである。かくの如き反應を營むためには、特別の構造があるではなし、まして神經要素が存在する譯でもない。たゞ全有機體を構成してゐる物質が、興奮性を具へてゐるために、さういふ行動を營むのである。生物學者が廣く實驗を試みた結果、かくの如き反應を起さしめる外界の力の種類をほと明らかにすることが出來た。即ちその主なるものを挙げると左の如くである。

(一)化學的刺激

(二)重力

(三)水

(四)水流

(五)酸素

(六)電氣

(七)光

(八)熱

これ等の刺激の異なるに随つて、向動を數種にわけける。例へば化學的刺激に對して身體の全部又は一部を運動するのを名づけて化學的向動といひ、地球の重力に對して運動するのを重力向動といひ、太陽の光に對して運動するのを日光向動、溫度の差に對する運動を溫度向動といふが如きである。そして、これ等の向動性にも、それらの刺激に對して近づかんとするものと、遠ざからんとするものとの區別があるから、各之を積極的と消極的とにわけることが出来る。

向動は tropism の譯であるが、嚴密な意味に於ては、動物又は植物が如上の刺激に對して、自體の一部を屈曲せしめることをいふので、單細胞有機體がこれ等の刺激に對して、自體の全部を動かす場合は、別に taxis といふ名がついてゐる。かくの如き區別をつける時には前者を屈動と譯し、後者を走動と譯すと、その區別が明らかになる。併し本書に於ては前者を廣い意味に解し、兩者を含む意味に用ひた。

有機體が他の無生物とは異なつて、かくの如き刺激に反應するのは何故であるか。蓋し有機體構成の單位であるところの細胞體は、原始的の感受性と興奮性とを有するがためである。單細胞體の營む反應も、人間の營む複雑なる行動も、その本質に於ては同じものであつて、如何に複雑な

る高等の行動でも、段々之を分解して行けば、結局は走動の如き簡單なる行動に歸してしまふのである。

三、行動、生理解剖的基礎 前に述べたやうな色々の刺激に對して適當なる反應を營むためには、生活體に特殊の構造を發生するのが利益であることはいふまでもない。随つて生物學的進化の進むにつれて、有機體の構造も機能も、すべて反應を行ふのに都合のよいやうに、次第に變化して來たであらうと思はれる。現存する動物の形式を研究して見ると、同化・呼吸・血行・分泌・排泄及び生殖の如き有機的過程は、これを營む特殊の構造と共に、第一着に進化して來たものであるといふことがわかる。その進化が如何に行はれたかは、第四章に述べた以上に詳論することは出来ぬ。たゞ單細胞有機體は構造上機能上分化したところの細胞を増殖し添加して行つて、遂に複細胞有機體に進化したといへばそれで十分である。理化學的の向動的反應しか出來なかつた無器官の有機體が段々進化して、分化した器官・構造及び局部を有する動物となり、益々細かな反應を營み得るやうになつた。かくて反應上の能率經濟を高めるために、器官及び構造の有する機能は益々分業的となり、他の局部とは連絡はもつてゐるが、或一種の刺激しか受けないうやうに、又或一種の刺激に對しては働かないやうになつて來た。眼の神經は光にしか反應せず、

耳の神経は音にしか反應しない、これなどは分化の最も著しい例である。

特に高級なる行動に關して、構造と機能との最も著しく分化したものは、神経系である。生活機能の中には、高等動物に於てすら、或程度までは、神経系とは關係なく、獨立して行はれるものもあるが、高級の有機體特に人類の行動に至つては、明らかに神経系によつて左右されるやうになつた。その生活機能すなわち神経系によつて集成せられ、統一せられ、相呼應せられてゐるものである。例へば血行といふ生活機能がある。血行といふ目的を達するためには、心臓・動脈・靜脈及び毛細管の如き構造がそれに順應して分化して來た。この血行過程も神経系の活動によつて有機體の状態に應じて直接左右されて行くものである。他の生活過程についても同じことで、若しその機能上に何かの變化が起れば、有機體全體の状態の變化した爲であると見て差支ない。この關係は皆神経系が媒介をしてゐるのである。その他高級なる活動系統は皆神経系の構造をまつて始めて了解して行くことが出来る。神経系の構造は三種、神経原から成り、各自に別々の機能を營んでゐる。第一は外來の刺激を受けるための末梢器官とそれを内部に送る求心性の纖維——即ち受容機制。第二は感覺的刺激を相互に連絡せしめ、運動性神経原を興奮せしめるための中樞細胞と連合纖維——即ち中樞機制。第三は中樞神経原から發せられる衝動を筋肉へ移送す

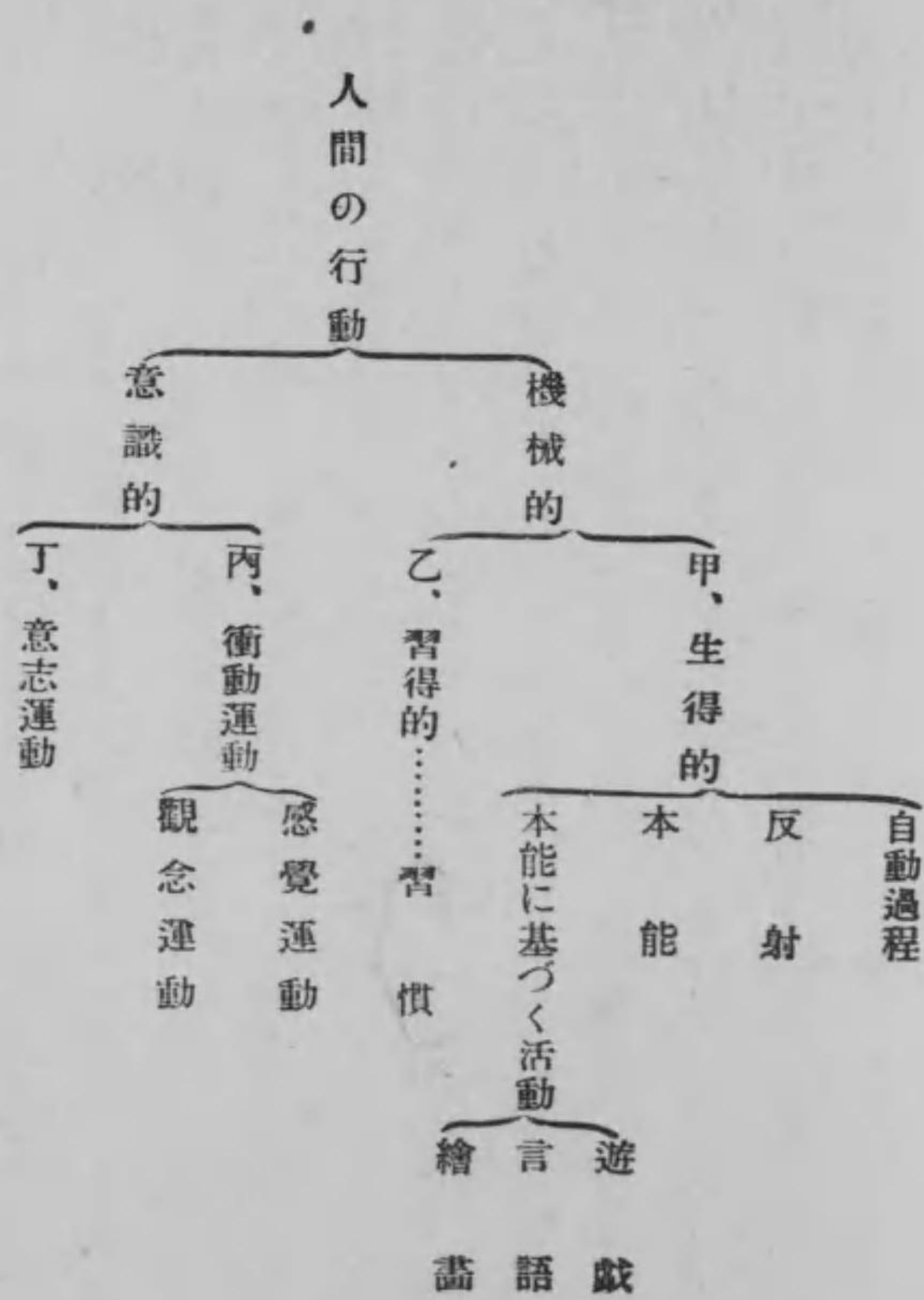
るために、筋肉の中に存する遠心性纖維と末端運動性神経原又は軸索突起とで、目に見える行動を營むための特殊の器官——即ち運動機制である。

これ等の神経原の相會する場所を接觸部と名づける。すべての神経系は三つの特色を具へてゐる。第一は刺激に感ずる感覺性、第二はその刺激を他へ傳へる傳導性、第三はそのために何等かの變化を残す變化性である。我々が或行爲を營んだり、或感情又は知力を働かしたりする場合に、少くとも二箇の神経原の働くことが必要である。而して人間の活動の大部分は多數の神経原の働くことを必要とするものである。その神経原が相會して作るところの接觸部に或連絡が出來なければ、行爲も知能も働くものではない。即ち生れつきといふのは、この神経原の間に遺傳上或連絡があつて、神経流が接觸部を通過するに當つて一定の通路の出來てゐる場合をいふのである。

神経系を有する動物にあつては、行動の種類によつて神経系の關與する程度を異にするけれども、外界の刺激は皆この三つの要素を通じて筋肉運動に現はれようとする傾向をもつてゐる。特に本能的の反應にあつては、生活過程も亦その影響を受ける。つまり生理的・神經的過程がどの位の程度までどういふ風に關與してゐるかによつて、行動の種類が分化して來るのである。

第二節 人間行動の種類

人間が時々刻々に營んでゐる行動の中には、機械的に行はれるものと然らざるものがある。また、きの如き、慣れた職人が他と話をしながら手先を動かしてゐる如きは、その動作が何等の思慮を要せずして機械的に行はれつゝあることが明らかである。然るに他からの來信に對して返書を認める場合の如きは、その行動が機械的でなくして思慮的である。故に前の機械的行動に對して之を意識的行動と名づける。次にこの機械的の行動の中にも、別に練習を要せずして上手に出来るものと、熟達までに可なりの長い時間を要するものがある。子供は生れるや否や呼吸を營み、食物を消化し、血液が心臓の鼓動に促されて血管を通過する時には脈搏を打つことも知つてゐる。併しこれ等は子供の意志でさうしてゐるのではない、又さうすまいとしても出来ることではない。生れると殆ど同時に他から教へられないでも、乳を吸ふことを知つて居り、手を開いたり閉ぢたりすることも知つて居り、或は手足を動かす、或はまぶしければ目を閉ぢることも出来る。けれども何故さうするのか、どうしてさうするのかは知らない。その後何週か経つと、また、きを始める。これ等は皆習はずして生れながら出来る行動である。之に反して職工の手



先の仕事の如きは、今でこそ多年練習の結果、他人と談話を交へつゝ、機械的に出来るやうになつてはゐるが、元來は努力して習得した行動に屬するのである。之を名づけて習慣といふ。

一、**生得的機械的行動** 生得的機械的行動の中には更に四種を區別することが出来る。

(甲)自動活動又は有機的反射 呼吸・血行・消化・分泌・排泄の如き過程は一度その作用を開始すれば、一生涯休まずに繼續するものであつて、多少の動搖は免れないけれども、有機體全體の健康状態に關係せざる以上、他の影響に對しては大した關係をもたずに進行するものである。これ等の有機的過程は之を習得する必要がないのみならず、初めから比較的完全して居り、隨つて實際の役に立ち、さし當り有機體の必要に應ずることが出来るから、之を名づけて有機的反射といひ、時としては自動活動といふのである。この種の活動は概ね律動的のもので、有機體自身の中に刺激を藏し、有機體全體の健康を計るものである。

(乙)反射 くさめ・またゝき・せき・膝蓋腱反射・瞳孔の伸縮・眼の毛様筋の順應・その他有機體の局部が外來の簡單なる刺激に對して行ふ簡單なる反應の如きも、やはり習得を要せぬ反應であつて、初めから實際の役に立ち一生を通じて同じやうに行はれる。之を名づけて反射といふ。故に反射とは意識の媒介を俟たず、外界の刺激に對して、直に簡單な反應を營むものをいふのである。

(丙)本能又は本能的行動 啼泣・逃走・争鬭・飲食・好奇などの如き複雑なる活動も、前の二種と同じく全く生後の經驗を俟たずして行はれるものである。たゞこの種の行動は前者に比べて構造

的の基礎を異にし、刺激の性質を異にしてゐる。殊に複雑の程度に於ても前者と區別するを要する。通常之を本能と稱し、或は本能運動といふ。

(丁)本能的の基礎を有する諸活動 歩行・言語・取得性・遊戲・繪畫・建設性・破壊性の如きは、前項の本能と一緒にしても差支ないのであるが、多くは二以上の本能の同時に働いてゐる複合體であり、また本能と習慣との複合體であるから、單に本能といはず、本能に基づく活動といふのである。例へば遊戲の如きは單に本能と稱しても差支はないが、その中には競争・好奇・狩獵等、その他色々の本能が混交してゐる。また歩行の如きも根は本能的で習得のものではないが、完全に歩行するまでにはかなりの練習時間を要し、完成までには習慣の加はることが多いものである。

以上機械的生得性の行動に四種を區別したけれども、すべてかういふ區別は便宜上のもので絶對のものではない。例へば動物と植物とは一見してその區別が明らかかやうであるけれども、兩者の境界線のところに行くと、決して判然してゐない。これと同じく、反射と本能といつても、その間に劃然たる區別はない、いづれも元は同じところから發生して來たものであるから、區別のない方が當然なのであつて、それに反射とか本能とか名をつけるのは、便宜上のことに過ぎな

いのである。學者によつては、概念を明瞭にし定義を確立し、類似の概念との區別を明らかにすることを以て學問の主要の仕事である如くに考へ、それにのみ全力を盡してゐるものもあるが、著者はさうは考へない。反射といひ本能といふも、本質に於ては同じものである。たゞその著しき特色をとつて反射といひ本能といふのみである。その區別にあくせくしてゐることは學問の本領を逸するものといつてよい。それよりは活動そのものを詳しく研究して人生に於ける機能を究めるがよいと思ふ。併しながら一方からいふと、人間の行動に關する知識の一部は讀書によつて初めて得られるものであるし、又言語がなければ考へることも出来ないものであるから、用語の意味を一定しておくことは無論必要である。たゞその區別に拘泥してはならぬといふのである。この本能なる語も、極めて區々たる意味に用ひられてゐるから、初めからその意味をはつきりときめておかなければならぬ。それ等に關しては本論に行つてから詳しく述べようと思ふ。

二、習得的機械的行動 以上は人間の行動中、生得的のものに屬するが、生後習得したもので而も機械的のものがある。いはゆる習慣と稱するものがそれである。有機體は外來の刺激に對して、何等かの反應を試みて以て外界に順應して行くのであるが、生得的の反應方法では順應を全うし得ぬやうな新しい境地に立つたときには、自然新しい反應の仕方を學ばなければならぬ。そ

の新しい反應の學び方には種々の方法があるが、それは今こゝで説明することは略することにして、とにかくその新しい反應を試みて、それが甘く行つたとする、即ちそれで外界に對する順應を全うし得たとする、そしてその後度々その反應を必要とするやうな境地に立つたとすると、その都度その反應の仕方が繰返されて遂には反射や本能などと同様に機械的に行はれるやうになつてしまふ。これが即ち習慣である。故に習慣の機能とするところは、反射や本能では間に合はず、といつてあまり度々現れて來るので、一々思慮を費やしては不經濟であるといふやうな場合に、その行動を機械化して、生得的の反射や本能と同様の役を營ましめるにあるといつてよい。例へば樂器を弾するにしても、反射や本能のやうに生得的に弾くことは無論出来ない、従つて初めは一々思慮を費やして手指の運動を行つてゐるが、それでは甚だ不經濟であるから、反復の結果として機械的に行ふやうになるのである。要するに習慣といふ機械的の行動が發達する御蔭で、人間はその餘力を他の重要なことに用ひて行くことが出来るのである。

機械的に對する意識的の行動は更に之を二つに分ける。

三、衝動運動 有機體が外から刺激を受けたときに、それに對して何等かの反應を試みなければ、外界に對する順應を全うすることが出来ないのであるが、その反應を機械的に營むだけの準

備がなかつたときは、どうしてもその境遇に適當した行動を新に選まなければならぬ。いはゆる精神活動なるものは、機械的の反應では役に立たぬ新しい境地にたつたときに、如何なる行動を營むべきかを決定し指導する參謀の役をなすものである。刺激と行動との間に、かやうな精神活動が介在し、その管理によつて行動が營まれたときはその行動を意識的の行動といふのである。

意識的行動の中を、更に衝動的と意志的とに分けることが出来る。刺激と運動との間に介在した精神作用が感覺とか觀念とかの如く單一であつて、その精神作用が現れると、そのまゝ何等の故障なく運動に現れて行く場合に即ち衝動運動で、花を見て何氣なく摘みとるやうなのは感覺運動、三角形を熱心に觀念したために、身體又はその一部が三角の形に動かうとする傾向を示すのは、觀念運動の場合である。

四、意志運動 花を見て何氣なく摘みとる行動は、可なり簡單である。精神作用は加はつてはゐるけれども、その精神作用はそのまゝ活動に現れて来る。然るにその際他の思想が現れて来る。と、さう單一に行動となつて現れることが出来なくなる。例へばこれは隣家の花であるといふ思想が出て来ると、それでもかまはずに摘みとるか、若しくは遠慮して摘みとる。とをやめるか、二つの中、一方に極めなければならぬ。かくの如く二以上の思想があつて、その中で選擇の行はれる場合を名づけて意志運動又は選擇動作といふのである。

る場合を名づけて意志運動又は選擇動作といふのである。

以上人類の行動の分類表に従つて、各種の行動に一々略説を加へたが、これを詳論することは普通心理学の任務であるから、こゝではこれ以上の説明を加へることは出来ない。之を引つくるめていへば、人間の行動の中、機械的のものには、反射・本能・習慣の三つがあり、意識的のものには、衝動運動と意志運動との二つがあるといふことになる。然らば人間は一生の中、如何なる行動を最も多く營むかといへば、之を大人の日常生活についていつても、大部分は機械的の生活を營んで居り、意識的に考へてからでなければ、行動に移らぬといふ場合は、分量において極めて少い。換言すれば人間は他の動物と違つて知慧がある、知能があるといふことが特色になつてゐるけれども、その特色を出して知能生活を営まなければならぬ機會は、機械的行動に比べて見ると、極めて少いといふことが出来る。一日の大半は反射と本能と習慣とで暮してゐるのであつて、知能を働かして新しい順應を試みるといふことは少いのである。故に價値の點からいふと、人間の人間たる所以は、意志的の行爲を營む點に存するといへるが、分量の點からいふと、機械的行動の生活の方が多いのである。故に教育上からいつても、本能や習慣の研究はその根底をなすべきもので、知能の生活はその上に築かるべきものである。

第三節 動物の行動と人間の行動

一、動物の子と人間の子との比較 人間の行動は動物の行動よりも遙に複雑である。ジュームスは人間の本能は他の動物よりも遙に數が多いといふことを發表し、その説は一般にも認められてゐるが、本能といふ生得的傾向を豊富にもつてゐるといふことは、やがてその生活が複雑であるといふことを意味してゐる。けれども單に本能の數が多いといふことが、動物と人間とを區別する主要なる點ではない。今一つ大切な相違の點がある。それは動物の子と人間の子とを比較して見るとわかる。動物の子は概して出生の時から生活上に種々の準備が出来てゐるが、人間の子の出生當時は、生活上の準備が甚だ不完全である。又動物は殆ど本能だけを使いにして行けるが、人間は動物のやうに本能のみに依頼しない。メージャー、ボーエルが『野蠻より文明へ』の中にいつてゐるやうに、大人は動物のもつてゐないものをもつてゐるが、子供はそんなものを少しももたずに生れて来る。生れた子供には技術なく、法律なく言語なく、意見もなければ思想もない。けれども子供が大人になるに従つて、技能も法律も言語も思想も發達して来る。この點から考へて見ると、人間の新生兒はとて動物の新生兒と肩を比べることが出来ないほどに憐なものであ

る。けれども年月を閱するに従つて、人間の子は次第に優越の地位を占め、動物とは遙に距つたものとなり、全く別個の世界に住むやうになる。即ち初め生れたまゝの助けなき状態に於ては、到底動物の新生兒に及ばず、萬事に母親の保護を受けなければ、生命を維持して行けないのであるけれども、偉大なる可能性を蔵する人間の子は、次第にその偉大さを示し來り、本能を以てしては順應を全うし得ざる場合には、頻りに意識を働かして、新なる順應を試み、度々同様な順應をなせば、その結果は之を習慣の手に委ねて、精神活動の經濟を計るやうになり、遂に動物とは全く趣きを異にした生活を營むに至るのである。

ジョン、フィスクの著『宇宙哲學概論』(二七四年)は舊い出版ではあるが、その中に面白いことをいつてゐる。人間の子は生れた當時動物の子に比して頼りない状態にゐるからこそ、將來發達して人間といふものになれるのである。子供のもつて生れた本能だけでは間に合はないから、両親はそれを補うて保護するために自分の本能を餘分に働かさなければならぬ。動物のやうに、生れた子供に對して大した世話をしなくてすむものは、親子が長く一緒にゐる必要がない。然るに人間にあつては、長く子供を育てる必要上、同じ處で久しく一緒に生活する風習を生じ、それが元となつて家庭も出來、その他の社會的秩序も生ずるやうになつた。子供として本能の足らざる

ものは、親のもつてゐる本能で補ふけれども、それでも尙間に合はない場合には、習慣を利用し、知能を働かし、理性を活動させなくてはならぬ。人間の知慧が発達したのは、本能だけで生活することが出来なかつたからであるといつてもよいのである。人間の本能が幸にも不適當であり、不定であり、變化し易く、可型的であつたがために、人類の進歩も行はれたのである。若し動物の本能が絶対的に不變で固定して居り、出生當時から全部揃つてゐて、十分生活上の必要に應ずることが出来たならば、それ以上習慣を作る必要もなく、知能を動かして意志運動を營む必要もなく、教育は行はれず、進歩もしないであらう。最近本能の研究によれば、それほど極端に固定したもののばかりもないやうであるが、本能の如き生れつきの傾向が、可型的であればあるほど、練習・教育・進歩の行はれる餘地が存するのである。人生を取圍む外圍は常に急激なる變化をなすつのであるから、それに對しては常に新しい順應を試みるだけの準備が必要である。人生至要の問題は既に本能のみを以てしては解決が出来ない。知能の働きによる意志運動に俟たなければならぬ。

かくの如く人間の本能だけを以てしては外界に對する順應を全うすることは出来ないが、それと同時に、人間の營むあらゆる行動の基礎には強大なる生得的傾向の潜んでゐることも忘れては

ならぬ。この本能的の傾向をとり去つてしまへば、力ある衝動も随つてなくなつてしまふから、有機體は如何なる活動をも行ふ事が出来なくなる。恰もぜんまいの切れた時計、火の消えた蒸汽機關のやうに、動かなくなつてしまふであらう。本能的衝動といふ精神上的の動力があればこそ、個人及び社會の生命を維持形成して行くことが出来る。生命と精神と意志との中心秘密もこの衝動によつて解釋される。人類が生命を維持し、上へ上へと進化して行くためには、本能がなければならぬ。併しこの本能の或ものは之を除き或は之を改造し、或は知能を働かして之を左右して行くにあらざれば、將來の進歩は期し難いといふべきである。

二、人間の、子供時代が特に長い所以、かくの如く人間の子供は親から特に保護を受ける必要があると共に、將來大なる發達をしようと思へば、新しい境地に適當するやうに、生得的の本能を除去し改造し左右しなければならぬ。それだけの準備をする必要上、人間の子供時代は動物に比して遙に長く、又文明が進んで社會状態が複雑になればなるほど、この上更に長くならうといつたつある。この現象は兒童心理を研究する上に極めて大切な事柄である。

原：動物のやうに、極簡單な動物になると、人間などに比べて見て、餘程趣きが違ふ。生れるといつても、母細胞が分裂して二つになると、その二つが各獨立した生物になるに過ぎない。且

生物として存在して居る間に、少しも進歩とか發達とかいふ現象を見ることが出来ない。やゝ發達して簡單なる神経系を有するものでも、生れるとすぐに、自分のことだけは自分で世話をして、死に至るまで大した發達をしない。生れると同時に、種々の能力を具へて居るのであるから、始めから可なり成熟したものと生れるのである。随つて子供といふ時代がない。先祖のやつて來たことを、反射的自動的にやつて行けるやうに、ちやんと神経系の方に準備が出来て居るのである。

併し今迄になかつた新しい境遇に順應して行くには、先祖の遺傳だけでは足りない。そこで個體の進歩といふことが必要になつて來る。今迄は祖先の遺傳を保存して行くための神経系であつたが、今度は新しい境遇に對して順應を営むための中樞が必要になつて來る。勿論この生後の發達といふ事も、極めて徐々たるもので、鳥類位になつても、大部分は遺傳に基づいて行動して居るのである。新しい事件に對して、一々相當の裁量を與へて行かなければならぬ一國の宰相などの仕事に比べて見ると、鳥類の生活などは極めて簡單なものである。人間の胎兒としての生活は約十月であるが、かやうな短日月に於ては、到底複雑なる行動をするだけの用意は出来るものではない。そこで下等動物は生れると直ぐに親のなし得ることは殆どすべてなし得るに反して、人間

に於てはその中の幾分を繼承するのみで、その他は生後の経験を俟つて次第々々に成熟して來るのである。この時期が謂はゆる「子供」と稱する時期である。

動物が進化するに従つて、身體の構造は複雑になり、之に平行して精神作用も複雑になつて行くが、一方に於てはこの謂はゆる子供の時代が次第に長くなつて來る。鶏の雛の如き、生れてから當分に親鳥の保護を必要とするといふものゝ、生活に必要な行動は、大部分は既に出生當時に出來上つて居る。犬の子でも猫の子でも、生後當分は随分他の保護を必要とするが、それかといつて、その後経験によつて新たに覺える事柄は極僅である。人間以外で子供時代の一番長いのは恐らく類人猿であらう。オラングの如きは、一個月位獨りで起つことが出来ない。色々のものに握まりながら、立つことの御稽古をする様は丁度人間の子供そのまゝである。アフリカや、印度諸島に居る尾なし猿の如きは、生後二三個月間は、歩くことも出來ず、自分で物を食べることも、精密に物を握ることも出來ないとのことである。然るに普通の猿は二三ヶ月も経てば、歩くことも握むことも十分に出来る、即ちそれだけ子供時代が短いのである。

然るに人間になると、子供時代が非常に長くなり多年之を愛撫哺育してやらないと、獨立の生活が營めない有様である。而して如何にその取扱が親切丁寧を極めても、人類の三分の一は五歳

に達する前に死亡しつゝあることは統計の明らかに示す所ではないか。子供時代といふ意味を他の保護を要する時代と解すれば、人間の子供時代は十二三歳までとあらう。蓋し十二三歳になれば、無理に獨立の生活が出来ないこともないからである。併し可塑性、可教性のある時代を子供時代と解すれば、青年期までも子供時代に數へなければならぬ。

然らばこの子供時代なるものは、心理學上如何なる意義を有するものであるか。これはつまり獨立の生活をなすために必要な準備をなす時代である。故にその個人の生活すべき社會が複雑であればある程、それに順應して行くには、長い準備を要する譯である。そこで人間の子供時代は、動物のよりも長く、同じ人間の中でも、未開人よりも文明人の方が長い、文明人の社會でも中流以上の子弟になると、生後二十五年も經過しても、まだ父兄から學資を貰つて、この準備のために時間と努力とを費さなければならぬ有様である。生理的に春情の發動は既に十四五歳頃に始まつて居るのに、その約二倍の年月を経なければ獨立生活の準備を終ることが出来ない。それが現今文明社會の常態である。幼稚園から大學を出るまでには、どうしても二十歳から二十五歳にはなるが、心理學上からいへば、皆子供時代と見做すべきものである。即ち子供時代は從屬の時代、準備の時代と稱することが出来る。

人間に子供時代があるために、文明はどの位進歩したかも知れないし、又逆に文明が進むに従つて人間の子供時代は非常に長くなりつゝある。社會學者の説明によると、すべて政治上社會上の制度は、主として家族から發達して來たものである。然らば家族なるものは如何にして出來たかといふに、それは前に述べたやうに、人間の嬰兒は誠に頼りないものであるから、之を保護して育てるために両親が一處に生活するといふことから始まつたのである。して見ると、社會の文明は、人間に子供時代といふものがあつて、それが次第に長くなつた御蔭で次第に進歩するに至つたといつても差支へがない。即ち人間の嬰兒が頼りない状態にあるために、両親兄弟の間には同情の念が發達し、之れが結帯となつて長く共棲するやうになつたのである。家族が出來ると進んで共同團體が出來た。道徳史を繙いて、道徳の發生進歩を考へると、道徳は共同團體の進歩と平行して發達して居ることが明らかである。道徳の發端と認むべきものはまづ社會的動物に見ることが出来るが、それから人間の部族生活を経て、次第に愛他的の共同團體まで發展して來たのである。

かくの如く考へて來ると、子供は文明の中核である。「子供は夫婦のかすがひ」といふが、實は文明のかすがひである。不和・離婚・別居などが子供の無い家庭に一番多いといふことは、統計の

示す所である。又子供のない人は子供の有人に比べて見て、種々の同情に缺けて居ることは人の氣づく所であらう。殊に一人子として富裕に育てられて来た人には、この缺點が著しいやうである。故に子供時代に於ける教育の如何は、その個人の盛衰と關係があるばかりでなく、社會全體の興亡と直接關係を有することである。かくの如くして子供時代の長いといふことによつて次第に文明が發達して来る一方には、文明の進歩が原因となつて我々の子供時代は次第に長くなりつゝある。蓋し社會の進歩は境遇が複雑となることを意味するのであるから、その境遇に相應するための準備をなす子供時代が次第に長くなるといふのは、自然の勢である。社會の發達と共に、義務教育の延長されて行くのも、全くこの理由に外ならないのである。近世文明社會の一員として、十分之に順應して行くためには、長い間各方面から種々の教育を受けなくてはならぬやうになつて来て居る。殊に頭腦を使用する仕事を以て世に立たんとする人は、長い子供時代を経過しなければならぬ。人生五十といふが、文明の進歩はその半以上を子供時代として過ぎなければならぬやうな形勢を齎らして来た。種々の社會問題は多くこゝから起つて来る。

第四節 行動進化の原理

一、順應行動 生物が無生物と異なるところは、外來の刺激を受け、それに對して自發的に運動を營む點にある。石も之を押せば動くけれども、その動くや自發的でない。アメーバの如き簡單なる單細胞有機體でも、食物にあへばそれを攝取する運動を營む、障害物にあへばそれを避ける。外圍の状況に應じてそれに適當した運動を行ふ能力は生物にのみ存する機能であつて、之を名づけて順應活動といふ。世の中にありとあらゆる有機體は畢竟外界から刺激を受け、その刺激の性質に従つて適當なる運動をなす機關であるといふ事が出来る。何のために運動するかといへば、それは時々刻々に變化して行く外界の事情に順應するための運動である。若し刺激に應じて適當の運動を行ふことが出来なかつたならば、その生物は外界における事情の變化に順應することが出来ずに死滅するの外はない。下はアメーバの如き簡單なものから、人間の如き複雑なものに至るまで、一として外界に對する順應機關ならぬものは一つもないのである。この過程は外界の刺激を感受する感覺的方面と、それに對して適當の行動を營む運動的方面との二つに分けることが出来るからして、生物の有する順應機關を名づけて感覺・運動の弧といひ、或は感覺運動圈といつてゐる。尤も下等生物にあつては、構造上、感覺器官と運動器官との間に分化がなく、感覺も運動も身體の同じ部分によつて行はれてゐるが、それが次第に進化して来ると、感覺を司どる

部分と運動を司どる部分とが構造上において分化して来る、更に進むと、光線を感じる部分・音を感じる部分・觸接を感じる部分といふやうに別々の器官が発達して来る。かくの如く構造上においては、次第に分化を遂げて来るけれども、根本的の機能においては、アミーバも人間も變りはない。外界に順應しつつ生命を維持してゐる點においては同じものである。たゞその目的を達する上に、道具立ての單一なものと複雑なものと相違があるに過ぎないのである。

簡單なる生物を取圍む外界はやはり簡單である。その簡單なる外界に順應して行くには簡單なる行動ですむ譯である。單細胞動物には向動性があつて、諸種の刺激に對し簡單な行動を営むのみで、その生命を維持し得るのである。換言すればこの場合における感覺運動の弧は極めて簡單であつて、感覺と運動との關係も極めて直接的である。

然るにその生物を取圍む外界の變化は無限である、生物はその無限なる變化の幾部分にでも順應して、より高き生活を營まうとする要求をもつてゐる。即ち生物は單に生の要求をもつのみならず、より高き生を要求してゐる。換言すれば生物は常に外界に對して新たな順應活動を営まうとする要求をもつてゐる。つまり生物は常に外界に對して順應の必要を感じてゐる譯である。恐らく生物が次第に構造上の分化を生じて、人間の如き分業的生活體を生ずるに至つたは、少

しづゝ新たな順應を試みて行つたのが堆積した結果であらう。かういふ風に考へて來ると、人間も下等動物も一とつながりになつて、人間は少しも一種特別のものでないことになる。

二、精神又は意識の出現 併しながらこゝに問題になるのは、精神とか意識とか稱するものゝ處置である。人間には精神（假にざつとした意味で意識と同じに用ひておく）がある、猿にもある、犬にもあるといふ風に次第に進化の階段を下つて行くと、一體どこが境になつて、精神あるものとなないものとの境界がつくか。これは随分學者の間に研究された問題であるが、ズット下つてアミーバに心があるかといふことになる、ヘッケルの如きは細胞精神を認めるし、他の多くの學者は之を否定してゐる。余の考へでは、そこに異説が出て來るのは、精神の意味に廣狹の違ひがあるからである。ヘッケルの如きは向動性の如きものを心と稱してゐるから、非常に廣い範圍に精神が存在することになる、即ち生命のあるところには精神があるといふことになる。更にオストワルドのやうに考へると、エネルギーと心との範圍が一致することになつて來る。併し之を意識といふやうな狭い意味に解すると、人間にしか精神はないともいへるやうになる。それはいづれにしても、動物が段々進化するにつれて、人間が自ら内省して體驗してゐるやうな精神作用が、はつきりとした形をもつて現れて來たことは明らかである。黎明の際、何時までが暗で、何時か

らが明であるか、わからないやうに、どこから精神が始まったかはわからないが、とにかく人間には、現に我々の経験してゐるやうな精神が発達してゐることは明らかである。この精神作用は一體何のために発達して来たものであるか。

下等動物の向動性においては、刺激と運動との關係が恰も機械的に行はれてゐるかのやうに見える。例へば光が来ると、機械的にその方に向つて動く。光に會ふといふことゝ動くことゝの間には何物も介在してゐないやうに見える。併しながら少しでも生物が複雑になつて来ると、今迄無關係であつた外界の變化に對しても順應を試みるやうになるから、必ずしも従來の如く機械的にばかり行動は出来なくなる。機械的に行動が出来なくなると、外界に對して如何に順應すべきかを定める何ものかゝ必要になつて来る。精神作用は恐らくこの必要に應じて発達して来たものであらうと思ふ。この立場からいふと、精神なるものは、特に人間に與へられた天恵ではなくして、やはり順應活動を全うする必要上、生物進化の道程中において次第に出現して来て、遂に人間に見るやうな精神作用の形をなすに至つたものである。故に精神作用の機能は、刺激に對し機械的に行動を營んだだけでは、外界に對する順應を全うし得ないやうな境地に立つたときに、如何に行動すべきかを定めて順應活動を指導するに存するといふべきである。

これは前に述べた人間の行動を概観して、如何なる場合に意識が働き初めるかを考へて見てもわかる事である。感覺と運動との關係が機械的に成立してゐる場合には、意識は概ね低下してゐるか若しくは全く働いてゐない。表について見るに、反射とか本能とか習慣とかの如く、機械的に行動の行はれる場合には意識の活動を必要としないが、全く新しい境地に立つて、新しい順應活動を營むときに初めて意識が活動を始める。例へば習ひ覺えた經を殆ど機械的に讀んでゐる間は別に意識の活動を必要としないから、經の文句については意識が低下してゐる。然るに一旦その讀經が途切れて次の文句が思ひ出せないといふ新しい境地に立つと、こゝに始めて意識は活潑なる活動を開始して、途切れた個所の少し前から讀み直して見たり、色々と聯想の糸を辿つて見たり、或は經を繰つて見たりなどしてその難關を切りぬけようとするのである。

以上の考察が正しければ、諸々の精神作用、例へば覺・記憶・推察・感情・意志などの活動は畢竟吾人をして完全なる順應を全うせしめるために発達したものであるといへる。して見ると、記憶の如きも記憶そのものに意義があるのではなくして、それが吾人の行動を管理して順應を全うせしめる點に記憶の機能が存するのである。要するに行動の発達も精神の出現も皆順應の原理によつて説明することが出来る。之を生物の可能性といふ點から見ると、すべて必要の存するこゝ

ろには、その必要に應ずるだけの構造なり機能なりを發達せしめる力があるといはなければならぬ。有機體は全體として一個の順應機關であるが、更に順應活動を巧みに行はしめるために神経系を發達せしめ、意識を出現せしめて來るところを見ると、生物には必要に應じて無限に發達して行く可能性があるといはなければならぬ。

第八章 本能の心理及び生理

前章には人間行動學の概要を述べたが、以下兒童の心理を述べるにも、大體に於て前の表に示した順序に従つて、機械的行動を先に述べ、次に精神要素と各種精神作用との發達を述べて意識的行動に移らうと思ふ。併しながら幾分教育上に資するといふ實用的の意味を加へて兒童心理を説くことになる、純粹學術としては平等に取扱はなければならぬことも、そこに幾分の斟酌を加へなければならぬことになる。例へば機械的行動の中生得的のものから始めると、先づ自動運動・反射運動から述べなければならぬけれども、これ等の運動そのものは兒童生活の將來にとつて教育上大なる關係をもたぬと思ふから、こゝには略することにして、本能及び本能に基づく諸活動を主として研究しようと思ふ。本能の中にも、教育上から見て、自ら輕重の別を生ずることはいふまでもないことである。

第一節 人類の本能の心理的特質

一、本能の性質 一般にいへば本能とは、(一)神経筋肉系に基礎を有する生得の傾向である。(二)本能には何等かの活動を伴ふ。(三)概ね或情緒が結びついてゐる。(四)反應の仕方はその種に属する生物を通じて同様であり、定型である。かういふ本能の一般的特質については、學者の間に異議はないけれども、も少し立入つて考へると、そこに少からぬ異説がある。

生物學者はその専門の關係上、自然、生活質の力學や行動の原因や發生に興味をもつてゐるから、どうしても本能の運動的方面に重きをおき、主として神経筋肉の方面に立脚して本能と他の反應との區別をたてようとする。之に反して心理學者は自然の勢として、すべての活動の精神的要素に興味をもつやうになるから、本能を定義する際にも、勢ひ情緒的觀念的過程に重きをおかうとする、且本能の目的性にも重きをおく傾向がある。かくの如き立場の相違からして、一方に於ては本能を極狭い意味に解して、僅に二三の反應だけに止めようとする生物學者と、その範圍を殆ど無限に擴げようとする心理學者との相違を生じて來るのは已むを得ぬ勢ひである。レーブ、バームリーの如きは前者の例であり、ジームス・マクデウガルの如きは後者の例である。

この點から考へて見ると、本能といふ語には大凡そ三種の用法があるやうである。第一の用法に於ては、反射作用の複雑なるものを指す、又はその變化し易い點からいふと、意志行動に近いものをいふのである。例へば孵化した雛が穀粒を啄く運動の如き、又は種々複雑なる運動を重ねて卵の殻を破つて出て來る運動の如きはこの種の本能に屬してゐる。これ等は反射に比すれば遙に複雑であり、活動する筋の數も多く、運動も系列をなして多數に上つてゐる。併しそれは單に程度の差であつて、本能の意味をかくの如く解すれば、反射との區別は益々不確實なものになつて來る。或は反射は機械的のもので、本能は目的性をもつてをり、且意識的であるといつて區別する人もあるが、これとても究竟の區別にはならぬ。

第二の用法に於ては、本能の意味を今少しく廣く解釋し、或一般的の目的を達するための運動を本能といふやうである。この意味の本能運動は必ずしも前の本能のやうに、特殊の一定した反應を指すのでなく、運動の仕方はその時の事情によつて色々に變化するのである。猫の狩獵本能の如きはその一例と見ることが出来る。猫が鼠を捕へる運動を見るに、初め鼠の近づくのを躡つてまつてゐる姿勢と、最後に飛びかゝる運動だけは、幾分か一定してゐる點もあるが、その他の運動は決して一定したものではない。鼠を捕へてからも、それを弄んでゐるが、その運動とても、

反射のやうに機械的のものではない。終局の目的が極まつてゐるだけで、その目的に達する方法は幾らもあつて、その時と場合によつて色々の運動が用ひられるのである。

第三の用法になると、もつと淡とした活動をも含めていふやうになる。その極端な場合についていへば、一定の目的を達するといふことの外は、何事も遺傳的にきまつてゐないのである。人間の大人のもつてゐる本能の大部分は、この種の本能に属するものであつて、個人をして一定の目的を遂行せしめんとする動力は與へられてゐるが、その方法たる運動は生後の経験により習慣によつて左右されて行くのである。例へば性の本能について見るに、人間に於ては、最初「ぎまりわるがる」とか、「しな」を作るとかいふ形をとつて現れるが、その運動の仕方は決して一定してゐないのである。更に極端な場合をいふと、如何なる運動を営むかは、重要な問題ではなくなり、寧ろそれ等の運動を行はしめるに至る感情が本能的であることがある。例へば乞食を見たとき、金を與へる人と、急いで避けて行く人とあるが、これ等の運動は非常に違つてゐるから本能の重要部分ではない。寧ろさういふ運動を行はしめるに至つた不快性の感情そのものが遺傳的な本能であるといふべきである。

之によつて見ると、本能は運動の形の一定した反射的のものから、運動の形は殆ど必要の條件

をなしてをらぬ感情性のもので、廣狹種々の用法がある譯である。例へばバームリーは生物學的の立場から定義を下して、本能とは反射運動が遺傳されて結合したもので、その反射運動は中枢神経系によつて集成されて、種全體に通じた順應的の外的動を有機體に起させるやうになつたのであるといつてゐる。之に反してマクデウガルによれば、本能とは生物をして一定の事物を知覺し注意せしめ、その事物を知覺したときに、特定の情緒的興奮を経験せしめ、それに對して一種特別の行動をなさしめ、少くともさういふ行動をなさんとする衝動を経験せしめる遺傳的の精神物理的傾向である。即ち氏はすべての本能について、認識的方面と感情的方面と意志的方面との存することを主張するのであつて、甚だ心理的の意義が克つてゐるといはなければならぬ。かういふ風に、極端なる例を二つ擧げて見ると、その間に廣狹の差が甚だしいやうであるが、實際においては、その定義の如何に拘らず、可なり廣い意味に解して、多くの遺傳的反應を本能として取扱つてゐるやうである。

二、本能を起す刺激 次に本能的反應を起さしめる刺激はいかなるものであるか、その種類について分析を加へて見ると、本能の起源並に性質について得るところが少くない。

(甲)特殊の刺激 本能を興奮せしめる特殊の刺激は甚だ多く、それが種によつて著しく異なつ

てゐる。ホールが恐怖について研究したところによると、嬰兒の恐怖の原因となるものは甚だ多い、大きな動物大きな歯・大目玉・毛皮に觸れる事などが特に恐怖を起す。小猫に毬又は他の小動物を與へると、その方に追かけて行つて、猫のするやうに飛びつく、犬といふ刺激に對して、各動物がどんな反應をするかを調べて見ると、兎は犬を見ると逃げる、又は何か蔽ひの下に隠れる、いづれも祖先の傾向をそのまま現すのである。猫は犬を見ると、起つて争ふ又は樹に上る、馬は困ると犬を蹴る、鶏は驚いたやうな鳴聲を出して逃げるといふ風に、犬の攻撃といふ同じ境地に對しても、各自適當なる方法で反應するのである。

(乙) 一般的の境地 一般的の境地が或本能的反應を惹起す傾向をもつてゐることも少くない。例へば暗黒と不明・新奇なる物・強大な刺激(輝く色又は光・大きな音) 微弱なる刺激(弱い光・色・音又は觸れる刺激) 視野の外周中で見た事物・突然の出現又は運動の如き一般的の境地は、常に恐怖又は驚愕の反應を起さしめる。前項を特殊の境地と稱すればこれは一般的の境地である。

(丙) 二次的境地 本能を起す特殊の刺激に似てゐるため又はそれと空間的又は時間的に聯絡してゐるために、それが二次的に本能を興奮せしめることがある。これは二次的境地と稱してよからう。この種の例は一般高等動物にもないことはないが、特に人類において多く見るところの現

象である。例へば馬が一度犬に襲はれると、その場所を通る度に犬は居なくとも驚いて飛上る、これは經驗から來るもので、觀念的要素が感覺的要素と複合した結果である。野獸は鐵砲をもつた人を見ると恐れるが、鐵砲をもたぬ人は恐れない。ホールは、青年期においては大きな動物に對する恐怖が減じて、一般にダニとかクモとかいふ小さな匍ふものを餘計に恐れるやうになるといつてゐる。物質上の恐怖が減じて、社會上の恐怖が増すのもこの時である。疾病・爆彈・電線・自動車を恐れ、社會的約束に背いた犯罪を恐れる如きは、生れつきのもではなく、相當の經驗と觀念作用とに俟たなくては起らぬ筈のものであるが、終ひにはそれ等の事物に對して立派な本能的の反應を行ふやうになるのである。

(丁) 相反刺激の重複 相衝突する傾向が二つ又は二つ以上同時に働いて相重複し相混交するために、種々の本能的反應の紛糾を來す事がある。心配・嫉妬・恥辱などのやうな複雑なる情緒はかくの如くして生ずるのである。母が子供に向つて庭から外に出てはいけぬと命じておいたのに、それに背いて行衛がわからなくなつてしまつた。命令に背いたのを憤慨する心持と我兒の安否を氣づかふ心との相錯綜した心持の如きは、この種の適例となすことが出來よう。即ち母の本能を中心として恐怖・愛情・不快などの情緒が反應を複雑ならしめ、ゐても立つてもゐられぬ焦慮の状

態を呈し、反應と主たる情緒といづれにつくべきかに苦慮し、又は両者が急速に相交替するのである。

以上本能を興奮せしむる刺激の種類を述べたが、甲及び乙の例を見ると、本能的反應が生得的のものであることがわかる。併し丙や丁の場合を見ると、本能の中に次第に精神的の要素を増し、本能を興奮せしめる事物も根本的に變つて來るし、反動そのもの性質も變つて來る。これが即ち本能教育の基礎となる點であつて、本能がかくの如く經驗の影響を受けて變化して行くからこそ、本能を基礎とした習慣も形成せられ、延いて種々の意志的行動にまで進化して來るのである。

三、人類の本能の特質 人類の本能の特質として三つを擧げることが出来る。尤もこれは人類の本能だけに限つた特質ではない。

(甲)本能の一時性 本能の發生する時期に、その發現を促すだけの適當の刺激が與へられなければ、その本能は弱る、又は消失するものである。之を本能の一時性といふ。例へば遊戯・好奇・恐怖・交友などの傾向はいふまでもなく本能的の基礎をもつてゐるものであるが、その發生の時期に當つてその活動を促すべき適當の境地を與へずにおくと、その本能は甚だしく弱る、または害はれる。話語を覚えようとする生れつきの傾向は一歳と三歳との間に著しく現れるが、若しも聾

などのためにこの期間において容易に言語を習得することが出来なかつた場合には、七歳以後には著しくこの傾向が衰へるものである。木上りの傾向は多くの子供に強く現れるが、これも適當の時期に適當の機會が與へられないと殆どその影を潜めてしまふ。著しく個人的色彩を帯びた宗教上の告白をしようとする傾向も生れつきにあるもので、一般に青年期頃にその頂上に達するが、これもその時代に發表の機會を與へ獎勵をしてやらないとその後には現れなくなるものである。

(乙)本能の定期性 本能は生れつきのものであるが、それは出生と同時に現れるといふ意味ではない。生れたまゝの赤兒は當座の生活に必要なだけの反射及び本能、生れたときにもつてゐる精神物理的有機體で出來得るだけの本能しかもつてゐない。その本能の機能とするところは多く自己保存的であつて、發達のために役立つもののみである。例を擧げると、赤兒は本能的に啼泣して、自分の要求を母に告げる、巧みに呼應した筋肉運動を行つて乳を吸ひ營養をとる、又運動をしようとする一般傾向があつて、それが後來習慣となり意志動作となる原料になる。かくて生長をつづけ、生時の僅少な本能が適當なる刺激を受けて活動し、それによつて發達が行はれて行くに従ひ、他の本能も次第に出現して來る。かくの如く本能が一定の時期を定めて現れて來る性質を定期性といふ。

約説原理によると、各種の遺傳が個體の生活に現れて来る順序は、種族がそれを習得した順序を繰返すものである。併し前にもいうた通りこの説も極端までおして行つては首肯が出来なくなる。個體發生が種族發生を繰返すといつても、途中をぬかすこともあれば、順序を逆にする事も少くない。本能の如きも種族としては大昔に習得した筈のものであるから、この説からいふと當然個體生活の初め、即ち嬰兒の生活に現れなければならぬのであるが、それは嬰兒の生理状態が許さない。約説原理を極端に適用しようとすると、かういふ風に事實と一致しない點が出来る。故にこの説をあまり嚴密に應用することは出来ない。併しながらこの説は非常に暗示に富んだ説で、種々の研究を促したことが少くない。就中本能の發生し發達する順序は種族全體を通じて可なり一定して一樣であることの發見されたのも、この説に負ふところが多いのである。

原因の如何は別として、とにかく本能は、發生の必要と、生理的の要件と、それを促す刺激との三拍子が揃つたときに始めて發するものである。例へば生殖本能の如きは、生理的に十分の成熟を達した上でなければ現れない。歩行も話語も共に著しく本能的のものであるが、生後二ヶ月位の子供に歩かせよう話させようと思つたつて無駄である。假令適當の刺激があつても、時期が来なければ本能的の反應は現れない。殊に多くの本能は精神物理的基礎の成熟するまでに長い時間

を要するものである。例へば子供も生後一年半を経過すると、機會さへあれば、他の援助なくして歩行も談話も出来るやうになる。それ以前には刺激を加へてもその效はない。

動物においてはこの定期性もつと判然たる形をとつて現れる。鳥の營巢と移住、熊の冬眠、諸動物の季節的交尾などの如きはその例である。人類においても、之に相當する定期性が全然ないといふ譯ではないけれども、習慣や觀念などが混入して來て複雑になるため、動物のやうな明らかな定期性を帯びてゐない。例へば生殖本能の如き元は季節的に定期性をもつてゐるに相違ないけれども、今日の人間の生活においては、發現の時期に定期性を認める外、季節的には認められない。

(丙)本能の早期特化性 人類、本能は他の動物の本能に比較して見ると、不確定で不完全で變化し易い性質をもつてゐる。一般に動物が低級であればあるほど、本能は確定し完全し固定してゐるといつてよい。最下等の動物は、確定完全不變化の本能をもつてゐるが、人間の本能にはさういふ性質が極めて少い。黄蜂・ヨシキリ・栗鼠の營巢本能はよほど確定不變化で、完全にその目的とするところと一致してゐる。それに比べて見ると、不慣れた人が家族のために住居をたてる活動の如きは、少しも一定の形を具へてゐないといつてもよい。之と同じく自己保存に用ふる手

段・好奇心の向ふ対象・争闘本能の現れ方なども特に不定で變化し易い。これは人間の本能に見る著しい特色であるといつてよい。

かくの如く人間の本能は不定で變化し易いために、その本能が如何なる対象に向つて如何なる仕方で見現するかは、各個人の経験によつて極まることが多い。例へば好奇といふ本能がある。如何なる事物に對して好奇心を起すかは、必ずしも生れたときから確定してはゐない。生後の教育により境遇によつて定められる。即ち、本能を發現せしむべき刺激又は境地は多く偶然に屬するものであるけれども、本能は最初に現れたその偶然的刺激との間に關係を結んで、他の刺激に對してはあまり力強く發現しないやうになる。これを本能の早期特化性といふ。

四、本能と情緒との關係 情緒はすべて本能と關係してゐる。情緒は本能的反應の感情的側面である。本能的活動の結果として積極的には満足と快感とを生じ、若しくは消極的には、不満不快を避けることが出来れば、その本能は繼續して活動して行くのである。つまり吾人が原始的に快不快の反應を行つてゐたその反應の變形が即ち本能である。特殊の情緒の大部分は、獨立して發生することなく、必ず特殊の本能に伴なつて起つて来る。或本能に於ては、それに伴ふ情緒的の要素があまり強いために、本能に對してその情緒の名を附することさへある。例へば憤怒の

本能・恐怖の本能などいふ如きである。憤怒といひ恐怖といふのは、情緒の名である、それを本能の名として用ひてゐるので、これ等の情緒に對しては、それに相當する本能が存在してゐるのである。要するに、本能と情緒との關係は一種の對當關係である。マクデウガルに従つて、二三の例を挙げて見るとよくわかる。逃走の本能には恐怖の情緒が伴ひ、争闘の本能には憤怒の情緒が伴ふ。拒斥の本能に對しては嫌忌の情緒があり、好奇の本能には驚異の情緒があり、自卑及び誇示の本能に對しては、卑下及び得意の情緒があり、母の本能に對してはやさしみの情緒があるといふ風に、兩者は大抵相伴つてゐる。けれどもすべての本能にそれ／＼特殊の情緒が伴つてゐると考へてはならぬ。社會的本能や、取得の本能や、一般身體運動の本能などに對しては、どんな情緒があるか、明らかにはいへぬからである。殊に多くの本能が複合して、單一の反應となつて現れる場合には、それに相當する情緒を明らかに指摘することは甚だ困難である。この場合には情緒も極めて複雑なものになり、畏敬(嘆賞と恐怖の混合)、恭敬(畏敬と感謝)、叱責(憤怒と嫌忌)などの如き情緒を生じ、又輕蔑・嫌惡・猜忌又は嘆美の如き複雑なる情緒を生ずる。

本能と情緒との關係はかくの如く密接なものであるから、年少の幼兒は未だ感謝とか恭敬とか美的情緒とかいふ複雑なる情緒を経験することが出来ない。異性の愛の如きも根本的のものであ

るが、大人の経験するやうな愛は幼児に見ることが出来ぬ。これ等の情緒はそれに相當する本能と共に發生し、且經驗に俟つところが少くない、その經驗も本能が働き始めなければ行はれないのである。故に多くの情緒を経験する力は心身發育の法則によつて左右される。蓋し本能の發生は、心身發育の法則によつて支配されるものであると同時に、本能をはなれては情緒を経験することは不可能であるからである。

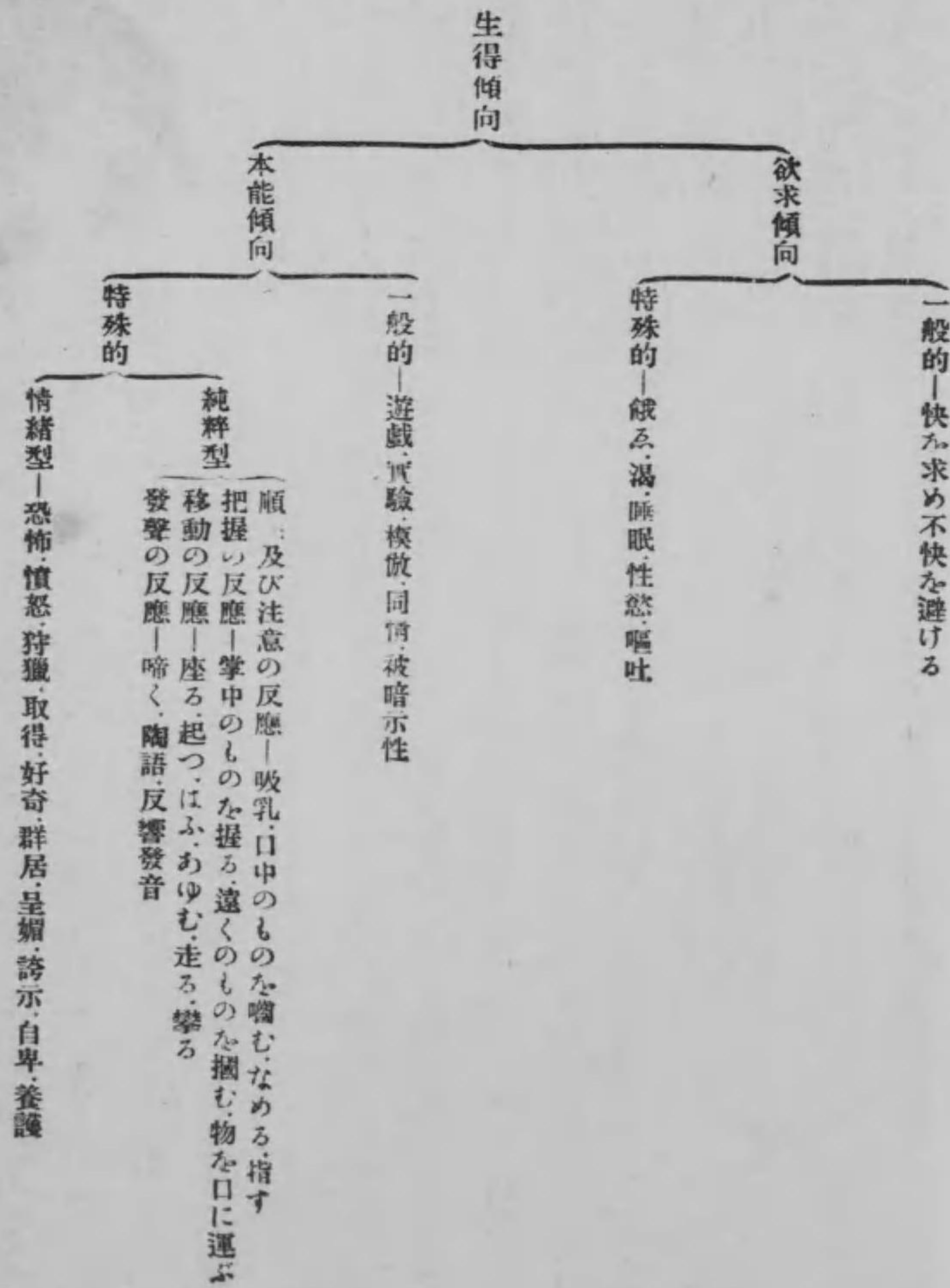
かくの如く本能と情緒との關係の密接な點から考へて見るに、本能は大人の行動よりは寧ろ子供の行動、著しく現れるものであるから、情緒も子供の生活に於ては比較的強く現れ、これが管理もよく出来てゐないのが常である。特に少年期の初めと青年期に於てさうである。この期に於ては情緒の働き方が自發的でしまりがなから、情緒の真相を研究しようと思つたならばこの期の兒童の情緒生活を研究するに若くはない。この點を明らかにしたのはホルルの功であつて、氏は心理學者の試みてゐる情緒の分析敘述について手痛い批評を加へてゐる。氏の説によれば、情緒の本質と意義とを明らかにしようと思つたならば、少年期及び青年期に於て客觀的に現れて來る情緒を直接研究して見なくては駄目である。生活上、教育上、情緒を正當に理解して之を利用することは主として將來の問題に屬することであらう。

第二節 本能の分類について

人類の本能は極めて複雑である。前章に述べたところによつて考へて見ても、その分類の困難であることがわかる。本能の分類を試みた學者は數多くあるけれども、その學說と立場との異なるに従つて著しく異つてゐる。併しながら前にもいつた通り、分類の境界は自然的に明確なものではなく、研究の便宜上區別しておくに過ぎないことが多いのであるから、分類の仕方にあまり拘泥することはよくない。例へば某の本能の所屬が甲の學者と乙の學者とによつて違つてゐても、それは學問上大した問題ではないと思ふ。試みに二三の學者の分類を擧げて見ると、マルクは本能を三種に分けた。

- (一)主として運動的のもの——木上り・戦争等
- (二)主として知的のもの——好奇・一般精神活動
- (三)著しく情緒を伴ふもの——恐怖・争闘・性慾

この分類は人爲的で誤解を招き易い。本能はすべて三つの要素を具へてゐるものであるから、その三つの要素の中の一つが特に著しいからといって、それによつて分類することは、當を得てゐる



ない。ホルムスは(一)同情的と(二)美的と(三)科學的とに分けたが、これでは本能といふ語が漠たるものになつてしまふ。カークパトリックは機能の立場から本能を分けて(一)個人的本能(二)母親の本能(三)社會的本能(四)順應本能(五)調整本能(六)雜本能としたけれども、これはあまり便宜的の分類であつて、科學的のものとはいへない。殊に他の項目に入れにくいものはすべて雜の部に屬せしめるなどは、極めて拙い。

ソルンダイクは本能を個人的と社會的との二つに分けた。前者に屬するものとしては、原始的注意性・大まかなる身體管理・食物を得ること・保護的反應・憤怒等があり、後者は他人の行動に對する反應であつて、養護的行動・他人の現在・承認・叱責に對する反應・自主的及び服從的行動・その他の社會的本能・模倣等が之に屬する。

マーシャルは純客觀的の立場から、(一)個體保存の本能と(二)種族保存の本能と(三)社會的團體保存の本能とにわけた。

以上はいづれも本能の目的性を認めて、その立場から分類したものであつて、一方からいふと、生物學的・目的論的であつて、心理學的の分類でないといふ非難も加へられる。そこでドレーパーは純心理學的の分類を試みた。

氏によると、吾人の生得的傾向の中には、衝動に先つてまづ不安の感の生ずるものと、然らざるものとある。少くとも不安の感の先行するやうに思はれるものと然らざるものがある。實際上兩者を區別することは困難かも知れぬが、理論上兩者を區別して前者を欲求、後者を本能と名づける。一般的欲求はたゞ快と不快といふ一般の傾向によつて左右されるもので、特殊の欲求とは特殊な経験に基づくものである。本能の中で一般的のものは、境地も反応も共に特殊ならぬものであつて、特殊のものは特殊の境地に對して特殊の反射を呈するものをいふのである。その中でも純粹型といふのは、比較的簡單で、よほど反射に近い性質をもつてゐるが、人類の發達上極めて大切なものである。情緒型といふのは、境地と反應の點からいふと、特殊なる點に於て種々の差別があるけれども、それに伴ふ情緒の性質の常に特殊なるものをいふのである。恐らく心理學的の分類としては最も秀でたものであらう。

マーシャルの三分説を詳しくいふと左の如くなる。

- (一) 個體の有機生活の保存を機能とする本能
- (二) 個體の屬する種の保存を機能とする本能
- (三) 動物の種、殊に高等動物たる人に於て著しく見らるゝ社會的團體の保存を機能とする本能

バイルはこの外に發達本能又は順應本能として遊戯と模倣とを擧げ四分説をとつたのである。本書に於てはやはり機能の立場から本能を個體保存・種族保存及び社會的の三つに分ち、尙遊戯・言語等の如く、學者によつて本能として扱はれたり、或は本能の複合したものとして扱はれたりするものは、本能に基礎をおく行動として別に之を述べようと思ふ。元來人間の場合においては本能を誘發する刺激が多種多様であり、それに対する反應の仕方もそれ以上に多様である。即ち吾人の行ふ反應は、種々の本能が同時に働いた結果として生ずることが多いのみならず、年齢も性の別も、習慣も意志も皆混入して來るから、純粹に本能のみの反應は少いといつてもいい。随つて分類の仕方に拘泥してゐるよりも、寧ろ各種本能の性質をよく極め、習慣や意志との關係を明らかにし、心身の發達、學習の作用、一般教育との關係を知ることの方が遙に大切である。

第三節 本能の生理

本能の起源が科學的に説明されるやうになつたのは、全く近世の生物學が進歩してから後の事であつた。即ち近世進化論の發達はやがて本能論の發達であつた。十八世紀に於ける進化論は近世生物學の先驅をなしたものはあるが、十九世紀の初頭に於けるラマルクの進化論が出づるに

及んで全く相入れ代つてしまつた。この説は外圍に對する機能的順應によりて得た特質の遺傳することを以てその根本原理としてゐる。ラマルクの『動物哲學』の出たのが一八〇九年で、ダルキンとワラスが自然淘汰説を公にしたのが一八五八年であるが、その間も進化の思想は舊派の動物學者から嫌はれつゝも、あちこちに現はれて居つた。かくして一八五九年に『種の起源』が出ると同時に、近世進化論は生物學上に強固なる基礎を据ゑたといつてもよいのである。この説によれば、有機界における變化は無機界における變化と同じく、一定の法則に従つて行はれる。こゝに變化といふのは、動物の色々な種が次第に發達し分化することを指していふので、その中でも、尤も重要なのは本能である。

ラマルクとダルキンの進化論は本能に關して二つの異なつた説をたてゝゐるといつてよい。ラマルクの説にすると、本能とは元來意識的に習得した性質が、巧みに外圍に順應してゐる中に習慣として固定し、それが子孫に傳はつたものである。遺傳された性質はその後新規の有効なる順應をなすことによつて變形を受け、更に遺傳されて行く。即ち複雑なる本能は種族史上、時を異にして度々有効なる順應をなしたる結果、それが次第に變化する種族の習慣として遺傳されたものである。リウキスはこの説を名づけて知能喪失説といふ。即ち元は知能によつて行つてゐたこ

とが、種族的の習慣となつたと主張する説である。この説は少しづつ形をかへて、リボー・ブライエル・ヴント・シュナイデル・スペンサー等に採用されてゐる。

之に反してダルキンの説によると、生物の偶然又は自發的の趨異に自然淘汰が行はれた結果、本能の有利な趨異を生得してゐる動物は生残り、有害な趨異を有するものは死滅し、代々蓄積して行つて遂に本能を生ずるに至つたと説くのである。尤もダルキンも或種の本能に習得性の遺傳に起源を有する事を認めるけれども、この方にはあまり重きをおかず、主として自然淘汰によつて説明しようとするのである。ロマネスも大體はダルキンの説に従ひ、尙習性遺傳を重視した。

然るにその後に至つて、習得した性質は遺傳しないといふ學説が次第に有力になつて來た。ドイツマンがその先鋒であつたことは前の章に述べた通りである。その論據も可なり堅いので、現今の生物學者は知能喪失説をすてゝ、主として自然淘汰の作用のみによつて本能の起源を説明しようとしてゐる。併しながらドイツマンの説も決定的にさうときまつた譯ではなく、習得性の遺傳を立證することに骨を折つてゐる學者も少なくないし、全然それを否定し得ない事實もある。この困難に打ちかつために最近に案出されたのが即ち有機的淘汰説で、オスボルン・モルガン及びボルドキンの三氏が偶然にも同時に主張した學説である。

この説は個人の順應といふ要素を入れて説をたてるのであつて、個人よりは寧ろ社會の場合に自然淘汰の行はれることを明らかにした點に於て重要な學說である。この説は個人の一生の間に發達した順應的の變化と、生れつきの趨異とは、傾向の上に於て相一致するといふ考に基づいてゐる。順應的の變化といふのは、外圍に對して意識的に順應することにより、特殊の外圍に適するの故を以て個人に生じたところの變化である。この順應的の變化は遺傳しないであらうが、それと符合する生れつきの趨異は遺傳されるであらう。例へば個人は社會的外圍の中にあつて、その中の特殊の要素に對し、順應をつゞけて行かなければならぬが、その影響がつもりつもつて、長い間には、普通にいふところの自然淘汰の意味も大に違つて來るであらう。かやうにして、或程度までは、同じ種類の變化が生ぜられること、恰も習得した變化が遺傳されて行く如くであらう。ボルドキンのいはゆる社會的遺傳が作用するののも一つはこの有機的淘汰によるのである。

第九章 本能と教育

第一節 本能の教育的處置

一、本能の利用 本能は遺傳的のものではあるが、反射運動の如く形式の確定した不變化のものではない。之に適當の處置を加へれば、或程度まで之を變化せしめて、教育の目的に副はしめることが出来る。ソルンダイクもいつてゐるやうに、初めは減茶苦茶に事物を弄つてゐたのが、次第に砂山や木片や球をもつて遊ぶやうになり、後には器具・鉛筆・ペン・タイプライター・機關・印刷機などを巧みに動かすやうになる。又嬰兒の時代には單に人から注目を受け承認を経ただけで満足してゐたのが、後には兩親や教師や自己の良心、理想的の人物などの承認を得て始めて満足するやうになる。又初めは他人が食物を取らうとすると、それに對して憤怒したものであるが、やゝ

進めばそれが學業上又は遊戯上の競争となり、更に進んでは自己そのもの、修養のために、自己の過去と競争するやうになる。又初めは手當り次第色々のものを蒐集貯蔵してゐるが、遂には學問上の蒐集排列をするやうになつて来る。即ち當初本能的に或は好み或は嫌つてゐた事が、次第に變化して有益なる事業となり、篤厚なる友誼となり、一族の幸福を希ふ心となり、更に進んで眞理正義を愛し人類の幸福を思ふ心とまでなつて来る。要するに教育の仕事は、本能を變化せしめて利用して行くことであるといつてもいい位である。本能は種族發生の長い歴史から必要に應じて生れて來たものである以上、絶対に不用のものはない、假令今日の社會に合はぬやうな生得的傾向があつても、それには適當の處置を加へてその力を利用すべきである。然らばその處置の方法は如何、大凡そ四つの方法を擧げることが出来る。

(甲) 不用及び活用 これは本能を起さしめる境地を左右して以て本能そのもの、出現をも左右せんとする方法である。不用といふのは、本能を起さしめるやうな境地を與へないで、その發生を防ぐ方法である。例へば子供の欲しがる危い物は、なるべく隠して見せないやうにする。腹の悪い子には菓子を見せない、年頃の男兒には不良な活動寫眞を見せないやうにする法をいふのである。活用といふのは、大に活動せしめようと思ふ本能に對しては、故意に之が發動の機會を與

へる方法である。例へば引込思案の兒童に對しては、誇示の本能を働かしめる機會を與へるが如きである。この方は教育的處置として積極的方法であるが、前の不用の方は正常の兒童を教育する方法として決して完全なものではない。何故かといへば、兒童の境地から或種の刺激を全部取除くといふことは、事實に於て不可能のことであるからである。或特別の場合とか、嬰兒・病兒・異常兒などの場合には、不用の法も用ひられるが、豊富な生活を期するためには、寧ろ活用の方を主とすべきである。

或本能を不用の状態におくと、そのためにその本能が衰微の状態に赴くことは事實である。これは親子の間に於て特に注意を要する關係である。例へば父親が非常に怒り易い性質であるとすると、子供は自然父に對し畏服するやうになり、子供自身が憤怒する機會は益々少くなる。さうなると、子供の性質は父親の性質とは反對に、あまり怒らぬおとなしい子になつてしまふ。これは夫婦の間に於ても同じことであらう。

(乙) 行動の快と不快 本能的反應の結果としては、その行動に快又は不快の感情を伴ふのが常である。然るに或行動にいつも快が伴へば、その行動は益々再發の傾向を生じ、いつも不快が伴へば次第に發生を見合はせるやうな傾向を生じて来る。キラ／＼した火に對しては、手を

出して取らうとする傾向をもつてゐるが、そのために火燒して不快な思ひをすると、その傾向は阻止されてしまふ。之に反して、快感を伴ふことが頻繁なれば、その傾向は益々強くなつて行く。體罰を與へて或傾向を阻止しようとする方法、賞辭を與へて或傾向を奨励しようとする方法などは皆之に屬する。犬にお預けなどの藝を覚え込ませるのもこの方法によるのである。

(丙)行動の變化 本能は自己並に種族の保存のために發達したものであるが、文明の發達につれて、そのまゝでは時代に適應せぬことが少くない。例へば憤怒に伴なうて争闘することなども、文化の程度の低い國又は階級に於ては、一般に行はれてゐたけれども、次第に文化の進むにつれて、個人間の争闘は文明人のすまじきことと見なされ、それを他の方法によつて解決するやうになる。即ち怒つて他を打つことの代りに、名譽毀損の訴へとか損害賠償の請求とかをする。これは本能そのものを抑止するのではなく、その行動の形式に變更を加へて文明社會に適合せしめんとするものである。甲兒のもつてゐる菓子を取つたとき、互につかみ合ひを初めるのは、原始的本能そのまゝの發現である。甲兒がそれを母親のところに訴へて出て、その裁判により、母親の手を経て菓子をとり戻したとすれば、行動は文明的に變化されたのである。

元來子供は小さい野蠻人である。その遺傳的構成からいへば、小野蠻人たるに相違ない。今日

我々のもつてゐる本能の遺産はこの昔我々の祖先が天災と猛獸と他の蠻人との間にあつて戦つてゐる中に出来たものである。之を二十世紀の社會に順應せしめようと思つたならば、之に相當の變化を加へて行かなければならぬ。これを適當に變化せしめて行くことは、教育の仕事であると共に、又その結果は文明である。食を見れば餓鬼の如くに貪り食ふのは、原始的状態における人類の常であつたに相違ない、併し今日では假令如何に餓ゑてゐても、相當の禮儀を盡して食事をとらねばならない。昔のまゝの行動の仕方では、今日に許されないのである。

(丁)本能の轉向 本能的反應は一種の勢力であるから、他の方法によつてその勢力を消盡せしむれば、それによつて當該本能を一時衰微せしめることが出来る。例へば今日の社會に於ては、發情期に際して、概ね性的本能を抑壓する必要に迫られる。その場合に種々の身體運動を行へばそれによつて性的衝動を轉向せしめ、性的關係から生ずる不當なる緊張を緩和せしめる效がある。このことは別に説明するまでもなく明らかなことであつて、獨身生活の人又は自慰の如き悪い習慣を有する少年に對して、遊戯や仕事に興味を向けるやうに勧めるのは、蓋しこの關係があるからである。かくの如く性的方面に費すべき勢力を他の方向に轉向する結果、少からず文運の興隆を促し、文明の進歩にどの位の寄與をしたかは測るべからざるものがある。

勢力の轉向は性的本能の場合に最も明らかであるが、その他の本能についても同様の轉向作用を發見することが出来る。例へば物を壊す兒には建設的の仕事と與へて導くことによつて、その破壊的衝動を轉向せしめることが出来る。若し喧嘩好きの子供がゐるならば、野球又はバスケットボールなどの如き團體競戯を勵行し、遊戯規約の下にその勢力を消費せしめる方法をとるのがいいと思ふ。又徒黨を組んで悪いことをする傾向があつたならば、その本能を轉向してクラブを作らしめ、團體的に何か事業を営ましめるとか、少年團に加入せしめるなどの方法によつて、その勢力を消費せしめるのがよい。

(戊)感情の轉移 右の如く行動を變化せしめ、若しくは勢力を他に轉向せしめるのに對し、本能に伴ふ感情を他のもつと有益なる方面に移すことを感情の轉移又は純化といふ。例へば怒るといふ情緒の原始的の形そのまゝのものは今日の社會にその必要を見ない。併し、我々は事に當つて大に發憤するだけの動力をもつてゐる。この貴重な動力を徒らに死蔵し又は抑壓するのは策の得たるものではないから之を他の方面に移して働かせる。人から罵られたり、害を受けたりしたときに怒つて争ふ心は、之を他の方面に轉じさせて、正義のために戦ふとか、害惡を懲ずるとかいふ風に利用するのである。救世軍の神のために戦ふ意氣は、戦陣に於ける武士の勇氣で

ある。日蓮上人も全く戰士の意氣を以て教のために働いた。美人を好み、不具を蔑する心は生れながらにしてある、この心を轉換せしめたならば、心の端正なるを愛し、思ひ邪なるを嫌ふ心ともなるであらう。

性的本能に伴ふ感情が他の高尚なる活動の背景として轉移して行くことは、敢へて珍らしくない事實である。例へば性的衝動と宗教又は藝術の如き活動との間には、密接なる關係があつて、或點はよほど似通つてゐる。而して性的本能が淵源となつて宗教や藝術の活動に少からぬ感情を供給してゐることは、多數の學者が認めてゐる。學者によつては、宗教や藝術の活動は全然性的本能から起つて來ると論ずるものさへあるが、少くとも、藝術や宗教や、その他種々の精神活動の背後にあつて動力となつてゐるものの中には、性的本能から由來してゐるものが少なくないといふことだけは、すべての學者の承認してゐるところであるといつて差支あるまい。この場合に性的本能は衰微してゐるやうに見えるが、その勢力は他の宗教的又は藝術的活動に變形してゐるのである。フロッドは『現代の性的生活』の中にかういふことをいつてゐる。「かくの如く性的の生産力と精神上の生産力との間には、密接の關係があるのであるから、純肉體的なる性的衝動の代理として何か精神上の創作が出来るといふやうな注目すべき事實の存する所以も明らかである。即ち

精神上に性的の等價量とも稱すべきものがあつて、それが性的衝動の代理を勤めるのである。例へば殘忍・憤怒・苦惱の如き情緒や、詩歌・美術及び宗教などに現れてゐる創作的の精神活動などは、皆この性的の等價量と認むべきものである。要するに、自然に發動して來る性的衝動を抑止すれば、廣い意味の想像生活は全部性的の等價量となるのであつて、これが人類の愛の發達史上における意義は重大なるものである云々。」氏のいはゆる等價量は嚴密の意味に於ては、感情の轉移と稱することが出来ないかも知れないが、性的本能に伴なふ感情を深く心理學的に追究して來ると、これ亦性慾の純化であるといつて差支ない。要するに、性慾と宗教藝術との如く一見縁遠く思はるゝものも、兩者の間には密接なる關係があつて、宗教藝術に伴なふ感情には、性慾の純化されたものが少くないのである。

二、**本能の統制** 以上の方法は教育者の側から見て、原始的なる本能を變化せしめて社會の要求に一致せしむべき工夫を示したものである。更に立場をかへて兒童の側から、本能が統制されて道徳的理想に合致して行く順序を研究して見ると、四つの階段に分けることが出来る。(一)生得のままの本能に随つて行動を營んでみると、その時の事情によつて或は快を生じ或は不快を生ずる。快を生じた時は尙その行動を持續しようとし、不快を感じたときはその行動をやめようと

する。これは外部から與へられる快不快によつて行動を左右して行く程度の階段に屬するもので本能の統制としては最も初歩のものである。(二)次に本能的の反應を營めば、それが社會生活に適合して社會から嘉納される場合と、反對に社會から非難される場合とがある。これは前の階段のやうに、本能的行動そのものから起る快不快ではなく、その行動が一旦社會に投射され、それが反映した結果として或は嘉納となり非難となるのであつて、この嘉納非難が多少系統的に行爲に對して反映して來ると、それに従つて多少本能を統制しようとする。廣い意味でいへば、前の快不快によつて變化して行くのと同じ譯であるが、行動そのものに直接伴なふ快不快に比べて見ると社會の嘉納非難はよほど間接のものになつてゐる。その間接のものによつて、本能が左右されるやうになつたのは、本能統制の一進歩である。(三)更に進むと、社會の嘉納非難を實際に受けるに先ち、かやうな行動には屹度かやうな嘉納(または非難)が與へられるであらうといふやうに、或程度まで將來を豫想することによつて行動を左右して行くのが第三の階段である。前の階段に比べて見ると、社會の與へる批判によつて本能を統制して行く點は同じであるが、實際の批判を俟たず、豫めそれを先見することによつて、本能を統制し得るやうになつた點が、この階段の進歩である。(四)以上三つの階段はどれも統制者が外部にあつて、それによつて他律的に統

制されて来たのであるが、更に一步を進めると、自ら行爲の理想をたて、その理想に随つて自律的に本能を統制して行くやうになる。この階段に達すると、世間の毀譽褒貶は意に介せず、自らの是なりと信ずるところに随つて進むやうになる。

右四階段の中、第一の階段は全く生物學的状态に留るといつてもよいが、第二第三の階段になると、要求としては原本的のものでありながら、それが社會生活との關係に於て或は嘉納せられ或は非難されることになる。就中子供の本能はこの階段に於て嘉納せられるものよりは、寧ろ非難され抑壓されるものゝ方が多いことはいふまでもない。嘉納された行動は將來も益々發達する機會を與へられた譯であるが、非難された行動はどうなるかといふに、社會の非難をも顧みず、益々その原本的傾向に随つて振舞ふものは、反社會的なものとなり、社會生活が營めなくなる。之に反し、社會生活に順應せんがために、社會の非難するやうな傾向はなるべく之を抑壓して表面に出さないやうにして行けば、他と調和して生活して行くことが出来る。併しその抑壓された傾向は抑壓されたまま消失するであらうか。物理學では勢力保存の原理をたて、如何なる勢力も決して消失しないことを認めてゐる。これと同じ原理がそのまゝ精神界に行はれてゐるかどうかはわからぬけれども、抑壓された本能的傾向がそのまゝ何の痕跡も残さずに全然消失してしま

ふといふことは考へられない。假令一方に抑壓されても、その勢力は必ず形をかへて現れるであらう。この關係は或程度まで前に述べた本能の轉向といふことで説明が出来る。例へば性的本能を轉向せしめて、文學に興味をもつやうになつたとすると、この文學上の興味に費される勢力は元の性的本能から生ずるものである。然るに精神分析學者はこの關係をも少し深いところまでおし進めて行つて、本能的傾向の昇華作用といふことを論じてゐる。

第二節 精神分析學者の本能教育論

一、精神分析法の起源 十九世紀の後半、オースタットのキエンナにヨゼフ・ブロイヤールといふ醫師があつた。この人が一八八〇年から同八二年の間に一人のヒステリー患者を扱つたことがあつた。今この患者について詳しい症狀などを語つてゐる邊はないが、博士はこの患者の現す症狀を捉へて、その病源を秩序的に探索した結果、すべての症狀は強い感情性の經驗がそのまゝ抑壓されてゐるために生じたものだといふ事がわかつた。ヒステリーは肉體上に種々の症狀を呈するけれども、決して肉體上に故障があつて生ずるのではない。その原因は全く感情の抑壓にあるといふのがブロイヤールの結論であつた。從來ヒステリーについては多く生理的の説明が行はれてゐ

たのであるが、氏に至つて始めて純心理的の説明を下した。氏がかやうな研究をした當時、同じ土地にフロイドといふ學生が居て、氏の研究に興味を感じ、遂にヒステリーの療法として、清淨療法又は精神分析法なるものを完成した。然るにその學説は心理上の一説としても、學界の注目を惹くやうになり、近頃になつては、その説に基づいて教育上にも種々の説をなすやうになつて來た。蓋しこの派の考へでは、子供の時の經驗（多くは性に關した）が社會的の非難のために無意識界に抑壓されて居て、それが大人になつてからの生活に甚大の影響を及すといふのであつて、性慾教育や家庭教育や、その他訓練方面に少からぬ新しい見解を出してゐる。

二、フロイドの根本思想 氏の説によると、子供時代に經驗した精神作用、特に願望は、無意識界の一勢力となり、その後の發達に對して永久の基礎をなすものである。總じて無意識界に作用して居る精神作用は極めて有力なものであつて、特に無意識的に働いて居る願望の力は一生消えるものではない。生長後の希望や興味も、幼時の希望や興味と結びつかなければ、意義あるものとはならない。但し兩者は勿論意識的に結びつくのではない。大人の行動は無意識界から衝動の助けをかりて來た時に始めて本當の力が表れて來る。故に我々の精神作用は幼時から引きつゞいて一種の連鎖をなして居るものである。鳥渡前後の間に何等の連絡がないやうに思はれる時で

も、その實は無意識界から影響を受けて居て、前後に十分の連絡があるので、たゞその關係を知らずに居るだけである。例へば二十歳に達した時、始めて某々の事項に興味を感じ、その結果某の職業について一生それに従事するやうになつたとする。これは一見幼時の經驗と關係がないやうであるけれども、その實かくの如き態度をとつたのは、幼時に生じた深い無意識的の傾向と一致もし結びつきもしたために外ならない。かう考へて來ると、性格上重なる特徴は既に生後五個年までによかれ悪かれ永久に出來上つてしまふのであるから、教育上からいつてもこの説は甚深の意味をもつて居る譯である。かくの如く、幼時の精神作用は吾人に甚深の影響を有するにも拘らず、一般にその大切なることを知らずに居る、のみならず個人としても幼時のことは忘却され易いからして、幼時の傾向の大切なることが認められて居ない次第である。

幼時の經驗を忘れることは思つたよりも甚だしい。實際に多くのことを忘れてしまふばかりでなく、極些細なことだけが記憶されて居つて、大切なことは多く忘却されてしまふ。故に幼時の記憶は見かけ以上に價值の少いものである。そのみならず、幼時の記憶はよほど信用をおき難い。殊に發情期に於ては意識的に無意識的に想像作用が行はれる結果、案外信用の出來ないものになつてしまふ。世人は幼時の經驗を忘却することについて別に不思議を抱いて居ない、當り前

の現象だと思つて居るけれども、これは十分に研究して解釋すべき大切の問題である。氏によれば、幼時の健忘は主として幼時の教育上の手段として用ひられて居つた心理的禁過から生じた結果である。そも／＼子供が世の中に生れた時は、種々の傾向や慾望を潜在的にもつて居て、當初は極めて思無邪の状態に居るけれども、その傾向や慾望を實現することは、大人の立場から見ても許すべからざることである。そこで子供を教育する手段として、成るべくこの種の慾望から離れさせ、その心を他の興味に向はしめるやうにする、これが即ち「昇華」といふ作用である。

三、いはゆる昇華作用 社會的論理的標準のために抑壓された本能的傾向の行衛については、前節に述べたやうな轉向作用でも説明は出来るが、それだけでは説明の出来ぬ點があるといふので、精神分析學者は本能の昇華といふことを説いてゐる。前から説いて来た通り、子供は種々の本能をもつてゐて、それを遠慮なく實現しようとする、併しながら、それ等は今日の文明社會の嘉納せぬことであるのみならず、段々生長して來ると、社會の嘉納非難にも服従するやうになり、その中には、自分の理想といふやうなものも出來て、自分の本能傾向が自分の標準とも合はなくなるのであるから、それを他の傾向とおきかへる必要が起つて來る。かくの如く、大人の社會生活に適合するために、他とおきかへなければならぬ傾向は少くない。その主なものを舉げると、

自分の身體特にその一局部を占有すること、種々の肉體的機能、殊に糞尿の如き分泌排泄機能に興味と快感とを感ずること、兩性の差・子供はどこから生れるか・夫婦關係の性質如何といふやうな問題に對する好奇心、他人に對する利己的思想、邪魔され干渉された時の嫉妬及び憤怒といふやうなもので、これ等は子供の生活に力強く根を張つてゐる。精神分析學者はこれ等の傾向を總稱して廣く「性的」といつてゐるが、子供は原本的本能によつて、これ等の傾向を事實に現さうとする。例へば尿の排泄を弄んだり、生殖器を弄んだり、他人のものを奪はうとしたりする傾向を現はす。けれども今日の社會はこれ等の傾向の實現を許さない、之を行はうとすると非難を加へて抑壓するから、子供は晩かれ早かれ、これ等の傾向を放棄してしまはなければならぬ立場にある。然るに子供の中には、容易く完全に放棄し得るものと然らざるものとある。勿論これ等の傾向も生長の後は忘れてしまふ、精神分析の術語でいへば抑壓されてしまふ。併し抑壓はされても全然消滅してしまふのではなく、形をかへて都合のよい體裁をなして現れて來る。これを名づけて昇華作用といふのである。

昇華といふ語は元來化學上の用語であつて、一物質を熱した時、それが固體の状態から一日液體とならずに、直に氣體となることを名づける語である。フロイドは之を精神上にもつて來て、

「元々性的なる目的をば、それとは關係はしてゐるが、もはや性的ではない他の目的ととりかへる働き」を稱して昇華作用と稱した。精神分析學者はこれを以て單に本能の轉向と見ず、子供の有する本能の大部分は、この昇華作用を経過して將來の生活を支配する大勢力となつて行くと考えるのである。

四、精神病の起因 然らば昇華されないものはどうなつて行くか。例へば子供には、他人をさしおいて我慾を全うしようといふ傾向が生れつき存在して居る。子供がこの要求を實現しようとする時、周囲の大人は、これを不可となして禁遏する結果、それに相當する精神作用は抑壓されて、無意識になつてしまふ。併しかやうに禁遏しただけではすまない、その報いは必ずその個人の上に現はれて来る。幼時の精神生活を忘却するといふ現象は、正にその報いの一つである。かくの如くその願望は抑壓されて無意識界にはひつてしまふけれども、その願望の動力は決して無くなるものではない。故に若し教育の昇華作用が不十分であるために、その無意識的願望に伴なつて居る動力を抑へるだけの力がない場合には、その動力が何處かに道を求めて外に現れなければならない。これが即ち精神病の病原となるのであつて、謂はゆる精神病の症狀なるものは、この抑壓された願望を變裝したる形式の下に於て満足せしめることに外ならないのである。この無

意識的の願望は純化された活動によつて現れるが、然らざれば精神病の症狀となつて間接に現れるのであるが、前の場合に於ては社會の目的に適合して居るけれども、後の場合に於ては社會にとつても個人にとつても有害であることを免れない。

さて通常性的と稱せられて、明らかに生殖と關係のある精神作用は、幼時に於ける各種の精神作用が或は選擇されて強められ、或は抑壓されてしまつて發達を遂げた結果である。子供には多數の性慾的傾向があつて、その働き方は大人の性慾作用と著しく違つて居り、後來如何に發達するかも至つてまち／＼である。大人に見る各種の性慾倒錯を調べて見ると、幼時の諸傾向が明らかに分かる。氏はまづ(一)誘引の元となる性慾の對手と(二)衝動の現れる活動即ち性慾の目的とを區別して居る。随つて性慾の倒錯も二種類に分かれる。一は普通に性慾の對手たるものに變動を來して、同性慾に陥るものゝ如きである。かくの如く倒錯が生ずるのは、解剖的にも心理的にも兩性的の性質を具へて居るため、同性を對手とした時に始めて異性を對手とした時と同様の快感が得られるのだと説明するの外はない。一は性慾本來の目的に變動を來すものであつて、サディズムやマソヒズムはその適例である。サディズムといふのは、相手の男又は女を屈服せしめ、これに苦痛を感じしめることによつて快感を得んと欲する一種の病氣である。マソヒズムはその反對に

對手から苦痛を受けて初めて性慾の満足を得る病氣である。この二つの傾向は正常の場合にも、弱き程度に於て存するものであるが、これも抑壓の結果、この傾向のみが著しく擴大されるやうになつたのであらう。

フロイドによれば、かくの如き各種の性慾倒錯は既に子供の時から潜在して居る。併しながら教育の力はこの傾向を強ひて抑へようとするから、通常は抑壓されてしまひ、その衝動に伴ふ心理的の勢力は昇華されて、もつと社會的に價值ある方面に向けられるのである。かくの如く本能は教育の力によつて昇華されるのが普通の場合である。併しながらこの外に二つの場合が可能である。(一)その傾向が異常なる勢力を得、そのため右に述べたやうな性慾の倒錯が實際に現れて来る。(二)その衝動と之を抑壓しようとする勢力との争闘が烈しいために、その衝動が精神病の症狀となつて現れることがある。この場合に於ては、倒錯した衝動を變裝した形で満足せしめることが即ち精神病の症狀である。かくの如く幼時の傾向は三つの場合の中、いずれか一つの道をとつて現れるものであるが、この三者は必ずしも判然たる境界をもつて居るものではない。例へば同じ人でありながら、一方に於ては性慾の倒錯と精神病とに悩まされつゝ、他の一方に於ては、その傾向が昇華された結果として藝術の創作などに耽ることがある。又昇華の一種として、

社會的に價值のない異常なる性格の發達することがある。謂はゆる偏屈人であるのは、この種に屬するものであらう。

五、フロイドのいはゆる「性的」かくの如く氏は幼時の願望が抑壓されて、成長後の精神生活に對して著大の影響を及すことを力説して居るが、これと同時に性慾傾向の極めて重要なことを論じて居る。但し氏の「性慾」とか「性的」とかいはゆる語は、普通よりも餘程その意味が廣く、一般に性的と認めて居ないことまでもその中に含めて居る。併し氏は態と言葉の意味を曲解する譯ではない。一般の性的本能とは關係のない精神作用と見なされて居るものも、その實は性慾と深い關係をもつて居るといふことが分かつたため、謂はゆる「性的」なる概念の範圍を廣くしたのである。假令一步を譲つて、性的といふことは生殖本能に關係ある傾向だけを意味すると解しても、直接生殖作用を促す衝動だけに限る譯には行かない。これは鳥渡考へても明らかなることである。直接生殖作用とは何等の關係はなくとも、その本性に於て「性的」なるものは少くない。例へば物品崇拜の如きは性慾の對手に變更を來した性慾倒錯の一種であるが、その本性からいふと明らかに生殖作用を否定して居るものであるけれども、性慾的のものであることは誰も疑はない。羞恥・殘酷の如き現象も本來は性慾本能から由來したものであることは明らかであるが、直接生殖作用の

完成には與つて居らぬ。併し間接に生殖と關係して居ることは明らかである。かういふやうな論據からして、氏は「性的」といふ語を廣く用ひて、羞恥の如く性的本能に發端を有する精神作用は悉く性的と稱するのが至當であるとした。蓋し氏は無意識界について精神分析を行つた結果、一見性慾とは關係のないやうな作用でも、段々研究して見ると、この性慾に由來して居るものが頗る多いといふことを發見し、さてこそ「性的」といふ語を一般の用法よりは廣い意味に用ひるやうになつたのである。元來吾人には精神作用の蔭に性慾が潜んで居つても、故意にそれを否定しようとする偏見がある。この偏見は人心に深く、根ざして居るが、學者は努めてこの偏見から脱しなければならぬ。

六、昇華作用と教育 昇華作用は大人にも現れるけれども、寧ろこれは子供の精神生活に多く見る所の現象である。兒童期殊にその前半に於ては、頗る廣い範圍に亘つて昇華作用が行はれて居るが、大人の生活に於てはそれが極めて少い。これは教育上極めて大切な點である。元々子供が自發的に行ふところの活動や興味は、教育の目的として居る所と全然その方向を異にして居る。教育の目的を達しようと思へば、それを他のものと入れかへなければならぬ。然るに入れかへといつても、前に述べた通り、舊い自發的の興味をおしのけて、全然新しい教育的の興味をも

つて來るのではない。たゞその勢力の方向を變へさへすればよいのである。かういふ風に考へて來ると、教育上から處置すべき子供の勢力の性質や、それが自發的に現れて來る形式などについても、もつと立ち入つた研究をする必要が感ぜられて來る。教材を提出するには、それが子供の要求にびつたりと合するやうにしなければならぬといふことは、經驗上明らかである。けれども、子供のもつて居る本來の興味に關する研究がまだ不十分の域を脱しないのであるから、それに基ついた努力も亦隨つて不十分なることを免れない。

幼時に抑壓された原來的の傾向が、兒童將來の生活を左右する一大勢力をなす一例として、職業の選擇との關係を述べて見よう。精神分析學者は、各人が現在の職業や勤務先を選ぶやうになつた動機といふやうなことを興味をもつて研究して居るが、その結果によると、外部の勸奨や機會によつて職業につくことが尤も多いやうに思はれるけれども、その實ははつきりしない隠れて居る傾向によつて左右されて居ることの多いといふことが明らかになつた。皮相の觀察者から見れば、外部の事情も大切のこのやうに思はれるけれども、多くは外に隠れた原來的の要求があつて、これが外に表れるための口實に過ぎないことが多い。例へばこゝに一人の子供があつて、幼少の時殘忍性戀愛の傾向をもつて居るが、それを實現することなくして抑壓したとすれば、成

長の後には、その能力により又事情によつて、屠人として成功するか、又は外科醫として名をあげるであらう。又幼時自己廣告的又は陰部露出病的の傾向を有したものは、長じて後、俳優となり、競り屋となり、又は演説家となるであらう。或患者は幼時排尿といふことに非常の興味をもつて居つたが、少し成長すると、流れや水溜りを弄ぶことに殆ど狂的の嗜好を現し、今日では有名な工學者となり、多数の運河や橋梁を作つた。又幼時主として排便作用に興味をもつて居つたものは、昇華作用によつて種々の競戯に耽つて居たが、後、一人は建築家となり、一人は彫刻家、一人は活字鑄造家になつた。又一人は固形物もこれを熱すれば、型にはめ易くなり、弄ぶにも都合よくなることを知つて、料理を好むやうになり、遂に料理長になつた。尤もこれ等の要素だけで職業が極る譯ではなく、まして右に述べたやうな無意識的の力が働いて職業が決定されるといふ譯ではないけれども、この無意識的の要素が極めて執念深くして持久性に富んでゐるところを見ると、職業の選擇に對しても可なり勢力をもつてゐることがわかるといふのである。

精神分析學といつても、今日では可なり異説を生ずるに至つた。併しその根本思想に至つては同じことである。その説は未だ一説たるに止る状態ではあるが、本能の教育論としては、大に參考となる點が少くないと思つて、その要領を述べたのである。

第十章 自己保存の本能

本章より兒童の本能の發達を述べる。その順序は個體保存と種族保存と社會的との三分法に従ひ、その各について前に掲げたドレーパーの心理的分類を參照し、特に教育上重要なものについて説明して行かうと思ふのである。

自己保存の本能とは個體の生命を保存し、その安寧を計ることを機能とする本能で、種族保存の本能とは、種族の存続を計ることを機能とする本能である。この外に、自己の屬する部族又は社會の中に生活する上に必要な本能を社會的の本能と名づける。併し度々いふ通り、分類は便宜上のものであるから、本能の中には、この中のどれにも屬するものがあらずし、又事實自己の保存が行はれない限りは、種族の保存も社會的の生活も出来ない譯であるから、三者は互に從屬關係に立つものである。

第一節 一般身體運動

個體本能の別説に入るに先つて、吾人の心身の活動は皆生得的の活動であることを忘れてはならぬ。外圍から来る種々の影響に對して、運動的反應を行はうとする傾向は教育上最も大切なものである。子供は出生と同時に、否出生以前から自發運動を行つてゐる、即ち外來の刺激なくして自發的に運動を營んでゐる。胎動の如きは出生前の自發運動である。子供はこの運動によつて初めて外圍と教育的の關係を結ぶのである。思ふに、運動は生命の根本的特質であるといつてもよい。手や腕や脚の自發運動・軀幹を伸ばすこと・眼や頭の亂雑な目的のない運動・顔面の運動・發聲運動などは皆この傾向の現れたものである。教育はこれ等の運動を原料として之に加工して行くのであるから、この傾向がなければ、教育も訓練も教授も施すに術がない。この點からいへば、教育とは運動的反應によつて個體の上に生ぜられる變化であるといつてもよい。教育は筋肉を通じて初めて行はれるものである。この點からいつても、教育とは外から與へるものではなくして、内からの發展を助ける仕事であることがわかる。

個人の生活からいつても、種族の生活からいつても、精神活動の開展するに先つてまづ運動が

あつた。その運動を管理するために、精神活動が發達して來たことは前に述べた通りである。而して種々の精神活動を營まうとする傾向も亦生れつきのものである。ソルンダイクもいつてゐるやうに、或特殊の本能を働かせると、それがために、生れつき満足を感じるものがあるが、それとは別に精神活動そのものに満足を感じる性質をもつてゐるやうである。かくの如き性質があればこそ、人智も發達し、精神そのものも進化して行くのである。身體運動の傾向が生れつきのものであるとすれば、精神活動の傾向も同様に生れつきのものである。この兩者は互に從屬的のもので、兩々相俟つて發達して來たのである。精神活動の中には、身體活動と同様に本能的のものが少くない。かういふ生れつき傾向がなければ、教育はその出發點に苦むのである、人性に變化を及すにはこの生れつき傾向を媒介とするより外に法はない。教育とは何物もまたぬ白紙の如きものに、何物かを與へんとすることではない。子供を白紙の如きものと考へ、教育者の任意に何事でも教へ得るものと思つたらば、それは大なる誤りである。兒童は、その外圍と外圍の齎す感覺とを、觀察・注意・思考しようとする傾向を生れつきもつてゐる。この傾向を生長せしめ、之を管理し支配することはやがて子供を知的に發達せしめる所以である。教師はたゞその傾向を誘ひ出すために、適當なる刺激を與へることに苦心すれば足るといつてもよい位である。

第二節 反射性なる純粹本能

吾人の生活に現れる本能には純粹なるものは少く、多くは生後の經驗・習慣等が混入し、それがために左右されてゐるが、生後間もなく現れる本能で、未だ經驗によつて左右されてゐないものは、割合に純粹である。例へば啼泣・吸乳の如きはそれである。その性質はいづれも反射的のものであるによつて、反射性なる純粹本能と題した。(一)啼泣の生物學的意義はそれによつて母親の注意を惹き、その保護を求めるといつてよい。吸乳運動はいふまでもなく栄養をとるに必要なるものである。(二)手を握る、物を口に運ぶ等はよく人の知るところである。(三)歩行の本能は完成までに可なりの練習を要する關係上、習慣の要素の加はることが甚だ多い。(四)發動については後章兒童の言語を述べるときにゆづることとする。

右の中、握る反應は可なり著しく現れる。これは人間が曾て樹上生活をして居つた時代に、自己の身體を支へるために必要であつた運動であると解釋されてゐる。即ち樹上に住むものは、手を以て樹枝を握ることが必要であつたから、この反應は本能として遺傳され、嬰兒の生活にも現れるに至つたのである。この反應に關しては、既に一二頁にも述べておいたが、近頃ワツソンは

これについて實驗を試みてゐるから、それを紹介しておかう。



圖九十第

す示を様るす驗實な射反る握の兒嬰

新生兒の手に小さな棒を與へると、それを可なり力で握り、且それに取りつくといふことは、昔から人の氣づいてゐたことであるが、それは單なる觀察に止つて、少しも實驗されたことがなかつた。然るにワツソン等の研究によると、その棒をもち上げた場合、それに取りついてゐる時間に長短の相違があり、又その力に大小の違ひがある。身體が全部空中にもち上げられても、一定時間は棒を握つて離さない位に力のあるものもあるし、或はこの本能のあまり發達してゐない子供もある、さういふ子供は少し棒をもち上げると、手をはなしてしまふ。ワツソンの工夫した装置の大體(圖参照)をいふと、寢臺にカンバスを張つてその上に嬰兒をのせる、嬰兒の體重は秤によつて直ぐ知られる。次に棒を嬰兒の手に握らせ、實驗者は兩手で之を支へてゐる

ると、秤の指針は嬰兒の體重の減少を示す、その減少したときの重さは即ち嬰兒が引つばった力の全部である。

その研究結果によると、生後二十日間は嬰兒の大部分は両手共に全身をさへるだけの力を出すが、暫くすると、通常この反射は消失する。その後の観察によると、少くとも生後三箇月間はこの反射が繼續する。時としてはこの本能を缺いてゐることもあるし弱いこともある。普通兒百例の中この反射のないものが二人あつた。一人は大變に肥つてゐたから、取りつくことが出来なかつたのであらう。他の一例に於ては、これと思はれる原因はなかつた。榮養不良の如き異常の場合に於ては、自己の身體を支へるだけの力がなかつた。精神薄弱その他の缺陷を有する場合に於ては、普通兒に比して、この本能の存續してゐる期間が長いといふやうな結果が現れつゝある。

ロビンソンの實驗によれば、この握る力の最も強いのは生れてから二三週間で、すべての嬰兒は一二分は容易にさがり、長きは二分三十五秒に及んだものもあつた。生後一時間にも達せぬ嬰兒が兩手で十秒間かゝり、引つゞき左の手で五秒だけかゝつて居つた。三週間以上になると、脂肪が増して棒にかゝる力が弱くなるといつてゐるが、この本能の減退が脂肪の増加のみに原因してゐるかは疑はしい。

第三節 榮養本能と狩獵本能

生物は生れると直ぐから自己を養ふために榮養をとらなければならぬ。榮養本能は早くから現れる本能の一つである。その最も初めに現れる形式は吸乳運動であるが、頭を動かして乳を捜す運動、味ひの如何によつて口・咽喉・顔面に生ずる運動なども之に屬する。その後手を延ばしたり、握つたり、口に入れたりする運動が加はつて来る。一二歳の子が何でも手當り次第に口に運ぶのは人の知るところである。これは無論榮養本能と認められるけれども、これ等の運動と一般身體運動の本能との區別は必ずしもはつきりしてゐない。食物に對する興味は可なり強大なものであつて、カークバトリックによれば、六歳にしてその頂點に達するといふ。子供が「何かいゝもの」を欲求することの切なるは人の知るところであるが、榮養を要求することその事は決して悪いことではない。たゞ長くそれのみに固守せず、他の興味をも發達せしむべきである。

原始人の榮養本能に近いものに狩獵本能といふのがある。今日我々の營んでゐる生活に於ては少しも狩獵を行ふ必要はないけれども、我々が本能として狩獵の傾向をもつてゐることは明らかである。例へば子供がとんほをつり、蟬・ばつたを捕へるが如きは、この本能的要求から生ずるも

のである。大人でも眼の前にとんぼが飛んで来てとまれば、ついそれをつかまへて見る気になる。未開時代に於ては、他の動物又は自分より弱い人間を捕へて食物とする必要上、この本能が著しく發達してゐたのであらう。子供の鬼ごっこや、かくれんぼの如きは恐らくこの本能に満足をする遊戯であらう。大人が娛樂として狩獵を事とするは、無論この本能に基づくものであつて、時としては甚だしく亢進してゐることがある。

第四節 からかひといぢめ

子供が互にからかひ、いぢめ合ふ本能は、前の狩獵本能や身體運動の本能と相連絡してゐる現象である。甲の子供が乙に飛びついたり、引つぱつたり、押したりするのに對して、乙も同様のことをして返せば、二人はからかひ合つてゐるのであるが、一方が受け身になつて相手にならぬ時には、甲が乙をいぢめるといふことになる。特に男の子が女の子に對してからかふときには、女の子は男の子にいぢめられたといふのである。但しその本質は残忍性戀愛と見なすべきものであるかも知れぬ。憎悪の念から他に損害を與へるためにいぢめるのでないことは、勿論である。大人でも動物でも、黙つてゐると、子供は随分いぢくりまはすものである。少しく長ずれば、年

下の子供をからかつたり、いぢめたりする。からかひ合つて遊ぶのは獎勵すべきであるが、いぢめることはよくないとされてゐる。そしてこのからかひといぢめとのために、子供同志の間に、絶えず悶着が起つて、大人も之が處置に窮することが往々ある位である。一方では遊戯的の氣分でからかつたのが、之を受ける方では、いぢめられたといふことになるからである。

第五節 收得本能

一、蒐集・貯藏本能 收得本能の中には蒐集・貯藏・所有等類似の名稱のついた本能を總括することにする。子供が二三歳になつて、草花・木石等に興味をもつやうになると、それを集めて貯へ所有する傾向を現す。動物に於て蒐集・貯藏の本能の最も著しく現れてゐるのは、蟻・蜂等であるが、その目的とするところは冬期における食料の準備である。併し他の動物に於ては、この本來の目的から離れて、無目的に無價値のものを集めることがある。犬が木片・下駄等を縁の下に運ぶが如き、子供が小石・木の實を集めるが如きはその例である。栗鼠は來るべき冬のために、胡桃を蒐集するが、それは少くとも現在には不用のものであつて、しかもその將來における用途についても意識してはゐないのである。人間の場合においてはこの盲目的なる本能が變形して、他の利益を

伴なふ物品を蒐集する習慣となり、原本的の本能は却つて萎縮するに至ることがある。例へば貨幣・貝類・寶石類・糸はがきなどを集めるのは、その物品に交換力があり、携帯に便で、それ自身誘引的であるがためであつて、純然たる本能的のものに見るが如く、必ずしも盲目的のものではない。併しながら有害と知りながら尙集めることを止め得ぬ點、又貯へておいても何にもならないのに、それを棄てることが出来ない點などは、明らかに原本的の傾向を示してゐるのである。犬の如き家畜にあつては、その生存上、この本能を必要としない、それと同じく文明社會にあつても、栗鼠や蜂のやうに食料を貯へておくことは必ずしも必要な本能ではない。然しながら、兒童はかくの如き蒐集をなすことによつて、將來の生活上に必要なことを學習し得ることが少くない。故に教師はこの本能を利用して間接の教授を行ふことが出来る。例へば切手・貨幣の蒐集は諸外國に關する興味を喚起して親密の感を起さしめ、地理歴史の教授上裨益を與へることが少なくないであらう。その他花卉・昆蟲の蒐集は理科教授の補足として價値があるであらう。

二、蒐集本能の發達 今兒童について、蒐集本能の發達する有様を見るに、蒐集は三歳以前から現れ、次第に旺盛となり、十歳頃にその頂點に達し、十四歳頃から次第に衰微する傾向がある。時としてはこの蒐集慾に異常の亢進を來して、殆ど他の興味を壓倒し去ることがある。初めは本

能的の分子が多く、蒐集する物品そのものに興味をもつて集めるのではないが、後にはその蒐集物に價値を認めて蒐集するやうになる。但しその物品の市價如何は必ずしもその問ふところではない。殆ど無價値のものを大切に貯蔵することも少くはない。次に兒童の蒐集する物件をみるに、最も多いのは自然物であつて、殊にこの本能的傾向の現れる初めに當つては、小石・草の葉・鈍栗のやうなものが主として集められる。それについては色紙・カード・糸はがき・切手などを集めるやうになる。要するに、蒐集本能の發達階段は大凡そ三つに分けることが出来る。第一は何物によらず單に貯蔵しようとする時代、第二は他兒童と競争して蒐集せる物品の數に於て優らんと欲する時代、第三は之を秩序的に排列せんとする時代である。尙この蒐集本能は好奇心と相俟つて誤つた發達を遂げることがある。それは好奇本能のところ述べることにする。

三、取得本能 取得本能といへば蒐集貯蔵といふよりもやゝその意味が廣く、事物を自己の所屬たらしめ、之を占有せんとする生來の傾向をいふのである。幼兒に現れる取得本能は多く喧嘩就中兄弟喧嘩の原因をなすところからして、之を我慾と稱して惡傾向の中に數へ、常に母親の擯斥するところとなつてゐる。併しながらこの本能は次第に所有の觀念を發達せしめる基礎となるのであるから、猥りに抑壓することなく、適當の指導を與へることが必要である。この本能を喚起

せしめる刺激物は皆主觀的の價値を有するものであるけれども、少しも客觀的の價値のないものに對してこの本能の働くことがある。要するにその時の事情により、その個人の年齢によつて、種々の事物に對して取得本能が働くのである。例へば幼兒が紙片・木片・糸・色ガラス片・カードなどを集めて之を自己の所屬とし、若し他人の之を侵すものがあれば大に怒りを發するのが常である。かくて六歳以上に至れば、その對象にも變化を來たし、玩具・裝飾品・衣服・小道具等を取得しよとする傾向を示し、大人になれば各自の趣味に従つて、金錢・衣服・美術品・書籍等を欲するやうになる。かくの如くして、幼兒の盲目的なる蒐集貯藏の状態から脱して、事物占有の終局の目的を意識して、之を追求占有するに至れば、則ち所有の觀念を生じたのである。

四、所有觀念の發達 所有の原始的の形は種々の現象について見ることが出来る。例へば下等の動物でも、食物を得れば必要以上に之を食して、脂肪又は保護的の被覆を貯へるやうになる。かくの如きは一種の生理的貯蓄であつて、個人が財産を所有するのと同じである。進んで高等の動物になると、種々の事物に關して、自己のものと他のものとを區別することが行はれる。例へば鳥が自分の作つた巢、さてはその樹木の全體をも自己のものとして主張するが如き、又犬が自己の小舎を死守するが如きである。鵲の如きは無用なものまでも自己の所有として、他の之を犯

すことを許さない。その他、胡桃を集め、骨を埋め、蜜を貯へ、鈍栗を隠し、狩獵地を獨占するものさへある。森林の中には、到る處にこれ等のものが貯へられてゐるのを見るであらう。

嬰兒にありては、所有の感は未だ明瞭でない、動物及び野蠻人と同じく、たと無目的に種々のものを占有しようとするに止る。かくの如く初めは所有せんがための所有の念強く、徒に争鬭を事とするのみで、事物の共有の如きは殆ど不可能であるが、六歳以後になると、場所・建物・衣服等の大なる事物については甘んじて他と共有するやうになり、欲望の對象にも次第に客觀的價値を生じて來る。併しながら玩具・器物などの小なる事物については、所有の争ひの起ることが甚だ多い。かくて正常なる大人にあつては、所有の念は益々堅實を加へて來る。所有に關する教育上の問題としては、所有に關し學校に於て教授すべき程度及び範圍如何、家庭に於ける兒童の勞務に對して賃錢を支拂ふの可否、兒童貯金の可否、可なりとせばその始期如何、學校貯金庫の可否、玩具・書籍・衣服等の價格を教へるのは何歳位よりするを可とするや等、種々の疑問がある。

第六節 逃走本能(恐怖)

これから自己保存の本能として述ぶる四五の本能は著しく情緒的色彩を帯びたものであつて、

本能運動に對してそれに相當する情緒を明らかに指摘することが出来る。例へば逃走本能に對しては恐怖の情緒があり、争闘本能に對しては憤怒の情緒がある如きである。

一、恐怖 逃走本能に相當する恐怖の情緒に關しては、從來色々の研究が行はれた。尤もこの情緒を起す元の原因及びその反應に關しても、又恐怖といふ精神状態の特質についても、種々の異説があるけれども、他の情緒に比すれば可なり研究が行届いてゐる。一八九七年の『ペダゴヂカル・セミナリ』にはホルの恐怖研究がのつてゐるが、これは質問法によつて精神状態を研究した最初のものであつて、恐怖研究として價値があるばかりでなく、歴史的にいはいはれのある論文である。ソルンダイクは多數心理學者の意見を取捨して、恐怖を起すべき刺激として雷鳴・爬蟲・大なる動物の近づいて來ること・毒蟲類・暗黒・異様の見なれぬ人・獨居・一種異様の高音・急等を擧げた。無論これ等の境地の二又は二以上が同時に働けば恐怖は強まる。例へば暗黒も恐ろしいが、暗黒中に獨居することは更に恐ろしいことである。けれども一方に於て何かしら本能的に満足を與へてゐる場合、例へば菓子を食べてゐるときには、獨居といふ境地にゐても、恐怖の情緒は幾分か弱くなる、又傍に人がゐれば他に異様な見なれぬ人が來ても、さほど恐ろしくない。

ワツソンは嬰兒について實驗的に研究して見た結果、練習とは關係なく恐怖の反應を起すこと

ろの刺激として左の數種を擧げてゐる。(一)嬰兒を支へてゐるものを急に除くとき、例へば助手が支へてゐる手から落すとき。(二)大きな音。(三)子供が眠りかけたときしいてゐる毛布を急に引くと恐怖の反應を示す。(四)丁度眠入つたとき又は目を覺ましかけたときに、急におしたり少しゆすつたりすると恐怖する。その反應はどんなものかといふと、急に呼吸をとめる、亂雑に手を握りしめる、(子供を落すときには必ず握る反射運動が現れる、これは樹上生活と關係のあることであらう。)眼ばたきをする、唇をすぼめる、それから泣き出す。年長兒にあつては、逃げる、隠れる。恐怖の初めて現れる年齢はどうかといふに、以上の反應は殆ど例外なく、出生と同時に現れるといつて差支ない。

次に多くの學者は子供が暗黒を恐れるのは本能であるといつてゐるが、ワツソンは種々の研究を重ねて見た結果、暗を恐れる事が遺傳的であるといふ確證は得られなかつた。著者もこの意見には同意である。子供は暗を恐れる事はあるが、それは他の原因に基づくのである。例へば暗黒に於ては平常の刺激たる躁音などがなくなるからであらう。それからこの國にもある事であるが、昔から暗黒で子供を脅かす習慣がある。暗いところ來ると、何の意味もなく「おばけ」といつて脅す、又勇氣を養ふつもりで脅す、故に暗を恐れるのは、悪い教育のためである。遺傳的

には何等恐れる必要のないことを恐れるのは、全く周囲のものが恐怖を教へたといつてもよいのである。ワツソン自身も暗を恐れるさうで、その反応は淡として居り、多少子供らしいところがあるといつてゐる。そこで氏は二人の子供を育てるのに、大に注意を加へたところが、四五歳に至るまで暗い部屋にはひつて行くのが平氣であつた、又暗いところに残しておいても不平をいはなかつた。然るに或晩丁度ワツソン夫人が少時外出してゐるときであつた、急に雷雨がやつて来た。それ以來、子供は暗いところにゐるのをいやがり、雷雨を非常に恐れたといふことである。

二、恐怖に對する本能的反應　これ等の境地に對する反應としては、逃走運動が尤も著しいものであるが、ソルンダイクは三十一種の反應を列挙してゐる。その中には逃げると思ひすくむとの如く、全然相反したものもあるから、恐怖を起すやうな境地に對する反應には、種々のものが存するのである。尤も同じ人が同じ境地に立つたときには、恐らく同じ反應を營むであらうけれども、境地と精神状態とは種々雑多であるから、反應の仕方も亦一様ではない。雷鳴のときの態度と、大きな動物の近づいて來るときとの態度とを比較して見ても、反應の一樣でないことが分かるであらう。併しその最も代表的なるものは逃げることに、隠れることであつて、又それが危険を避ける目的には最も適してゐるのである。故に反應の代表的なものに因んで逃走本能と名づけた。

三、恐怖の特質　恐怖には定期性と一時性が著しく現れてゐる。出生當時から現れる恐怖の種類は前に述べたやうな一定の境地に對するものに限られてゐる。その他の境地に對する恐怖は、一定の時期に至つて發生し、その後に至つて消失する。例へばカークバトリックによれば、暗黒に對する恐怖は三四歳の時に尤も著しく、その後は次第に衰へて行く。ジュームスは二歳位の男子が急に爬蟲に對して恐怖した例をあげてゐる。かくの如く或種の恐怖は一定の時期に現れるものであるから、その時期に先つて、それとは反對の習慣を作れば、その出現を遮ることが出来る譯である。例へば小さい時から寢室を暗くしておく習慣をつければ、ワツソンの説の如く、殆ど暗黒を恐れずに生長せしめることも出来る。之に反し、少しでも暗黒のために恐怖せしめるやうな機会を與へたり、おどかしたりすれば、本能は一層の強さを以て現れて來るのである。又一方からいふと、子供が何を恐れるかは經驗によつてきまるともいへる。特に子供の恐怖傾向の著しい年齢において、雷鳴のためにその本能が誘發されたとする、その子供は一生に亘つて特に雷鳴を恐れるやうになる。即ち早期特化性も恐怖の場合に行はれてゐる。大人でありながら、虫を恐れたり、雷を怖れたりなどするのは、幼時における早期特化のためであるともいへる。

四、恐怖と教育と文明　この本能は元來危険を避けて自己の生命を安全にすることを目的とし

てゐるものであるけれども、古來恐れるといふことは、勇氣のないことを意味するものとして排斥されてゐた。今日でも恐怖は矯正すべき人間の弱點と考へられてゐる。恐怖矯正の策としては恐怖の不必要なることを實例において示す法もあるし、恐怖を起し得べき境地に對して特に満足を與へるもの結びつける法もあり、兒童の理性・知識に訴へる法もあるが、要するに本能の一時性・定期性を利用してその出現を他へそらす工夫が第一である。親が家庭において、常にあぶない、怖いといふ語を用ひて居れば、それだけこの本能の發達を促すことになるであらう。今日文明の社會に於ては、純本能的の恐怖は實生活上あまり必要がないかも知れぬ。暗黒も動物も、昔の如くに恐れる必要はないといつてもよい。故に徒にこれ等の境地を恐れるのは、勇なきに似たりといつて差支ない。併しながら恐怖の情緒が他の重要な事項に轉向したものに至つては必ずしも不必要とはいへない。危険を恐れる、子供が父兄の與へる罰を恐れる、學校の成績の低下することを恐れる、友達から嫌はれることを恐れる、社會の劣敗者となることを恐れる、これ等は寧ろ個人が社會生活をなす上に必要な恐怖である。

第七節 排斥本能(嫌惡)

この本能は他を嫌ひ斥け、以て自己の安寧を保つことを目的としてゐる。恐怖と大に似た點があるが、恐怖はその對象より逃げ遠かる運動となるが、排斥本能は嫌惡すべき事物を除き又は退ける運動を起す相違がある。併しながらその感情的側面がよく似てゐて區別がつかないほどであるために、兩者は混同されることが少くない。

口の中に入れた食物の味又は匂が有毒のものであつたり、まづいものであつたりすると、それを急いで吐き出さうとする、この傾向は生物學上、有害なものを排斥しようとする本能であつて、その意味は明らかである。今一つの場合はヌル／＼ネバ／＼したものが皮膚に觸れると、全身を縮め、兩手を前方になげ出す事實がある。ネバ／＼した動物を見ると、身内がすぐんでゾットするのはその一例である。有毒なる爬蟲類を避ける必要上から、さういふ本能が發達したともいへるが、それ以外に於ては、大して生物學上の價値は認められない。併し滿一歳以前からこの傾向を現す子供のあることは明らかである。例へば嬰兒が始めて毛皮に觸れたときには、すぐんで引つかくことがある。子供によつてはこの本能はすつと遅れて發達し、初めは虫や蛙やなめくぢを喜んで弄んでゐるものが、急にそれに觸れることさへも嫌がるやうになる。

排斥本能の原始的なる形は、恐らく自己保存の目的が主となつて發達したものであらうけれど

も、これが類似した他の方面に擴けられていはゆる感情の轉移が行はれると、この本能の働き方はよほど知的のものになつて来る。毒のあるまづいものは吐き出れるが、或人の性格が毒々しくて香ばしくない場合には、その人のことを考へただけでも、嫌惡の情が起り、胸糞が悪くなる。汚らしい話などを聞いたときに、唾を吐くのもこの理由からであらう。「唾棄すべし」とか「嘔吐三石」などの形容語が精神的のことに用ひられるのはこの關係からである。この場合には、顔の表情も、僅ではあるが、悪いものを口から吐き出すときのやうな顔つきをする。又立派な人ではあるが、その舉動や言語にいやにネチ／＼したところがあると、丁度蛇に逢つたときのやうに立ちすくむ傾向を現すのもこの本能から起つたものと見ることが出来る。原始的の本能がかくの如く擴張され、知識化せられて來ると、寧ろ社會的本能の中に數へてもいゝやうになつて來る。

第八節 争闘本能(憤怒)

「この本能は人間の有する生得的傾向の中で最も強烈なものである。これは逃走の如く危険を避けることが目的ではなく、寧ろ之と對抗して之を壓伏し、以て自己保存の目的を達しようとする。恐怖は退嬰的であり、憤怒は突撃的である。随つてこの傾向は男性の方に著しく現れる。これは

男女の生物學的職責の相違から見ても然るべきことである。併し女性にも絶対にないことはない、すべての人間に共通した性質であるといつてよい。この本能は如何なる場合に起るかといへば、他の本能的傾向が防げられたときに起るものであるから、この本能の發生には、他の本能の存在を必要とする。随つてこの本能は二次的のものであつて、これを惹起するところの境地は種々雑多であり、その反應も亦多様である。例へば子供を抱いてゐるときは、どうしても身體活動の本能を妨げるからして、この争闘本能を起して自由を得ようとする。ワツソンの觀察によれば、嬰兒の運動を妨げると怒る、これは生れつきであつて、例へば顔や頭を抑へると泣き出す、續いて叫び出す、身體は堅くなり、かなり呼應した切りまくるやうな運動、叩く運動が手腕に現れる、足と脚をもがく、呼吸をやめて顔が赤くなる、年長の兒童に至つては、腕や脚に現れる切りまくるやうな運動が更によく呼應されて、蹴る・打つ・噛む・押すといふやうな運動を始める。運動の妨害の續く間はこれ等の反應も續いて行き、時としてはそれがやまないことがある。兩腕を胴にびつたりとつけたまゝ動かさずにあると、大抵の子供は生れた時から怒る、肘關節を指でしつかりと押へてゐても、時々これ等の反應を起すことがある。頭部を綿の枕の間において動けないやうにしなければ、怒ることがある。たちのよい子でも數秒間鼻を抑へてゐると怒り出すのを見る。

その他、好奇・狩獵・蒐集等の本能を妨けても、やはり争闘本能を發生する。併し同じ争闘本能でも、それを惹起す刺激が違へば反應も随つて違ふ譯である。争闘本能が極めて一般的のものであると同時に、その現れる形式が一樣でないのも之がためである。子供が何か自分の本能的要求が容れられない場合に、叫んだり、押しやつたり、蹴つたり、もがいたりするのは皆この本能である。少しく長ずれば、運動は更に大まかになり、怒鳴つたり、驅出したり、走り寄つたり、躲したり、蹴つたりなどするやうになる。更に進んで八九歳になると、組打ちを始める、即ち喧嘩である。大人はこの喧嘩を至極悪いことと考へ、子供に對しては嚴に之を禁じ、之を犯すものは叱られ罰せられる。大人の社會に於ても喧嘩は慎むべきこととされてゐるけれども、昔侠客の仲間には、弱きを助けるために強きものと喧嘩することが一種の道德と考へられ、それ等の義侠的行動が一部社會の憧憬的となつてゐた。そも／＼喧嘩は一つの惡徳として全然之を禁止してしまふべきものであらうか。思ふに喧嘩そのものは今日の社會に於ては不必要であり、又當然なくすべきものであらうが、それに伴ふ戰闘的精神は人間の男らしさを維持する上に必要なものである。マクヂウガルもいつてゐるやうに、「争闘本能は社會組織を進化せしめる上に、何者にも劣らぬ働きをなしてゐる。又現今に於ては、集合的の情緒及び動作の實證を大規模に發生せしめる上

に大規模の働きをなしてゐる。」又氏は歐洲の民と印度支那の人民とを比べて、「後者は戰争的本能に缺けてゐる、彼等は辛抱強く、長く苦んでゐて、戰争に興味をもたない。特に支那に於ては軍事上の徳を輕視してゐる。同時に彼等は誠實ともいふべき社會的の徳にも缺けてゐるやうである。この徳がなければ社會の強固と進歩とは望まれない」云々。

果して然りとすれば、争闘本能は、個體維持のために生ずる利己的の働きに過ぎぬものとして、一概に捨て去ることは出来ない。争闘なる本能に相當する情緒は即ち憤怒であるが、憤怒は昔から戒むべきこととされてゐる。キリスト教も憤るなかれと教へ、佛教も忿を以て煩惱の中に數へてゐる。併しながら同じ憤怒でも、義憤又は公憤となると美徳の中に數へられる。故に憤怒でも争闘でも高級のものになれば之を惡としない、却つてそれがために社會の協同一致を助けることになる。して見ると、争闘は非社會的の本能ではあるが、或點からいふと、社會的の基礎をなすといつてもよい。贅澤をいへば、低級なる物質的の争闘本能の階段を経ることなく、直に高級のものゝ現れることを希望するのであるが、事實はさうは行かない。後者は前者の變形であるから、前者なくしては後者は發達しない。喧嘩はしてはならぬ、併し國のため、友のため、主義のためには戰へといつても、それは無理である。元を抑へて末を發達せしめようとしてもそれは

駄目である。幼時は少しも喧嘩を知らずに、たゞおとなしい兒として大きくなつたものは、大きくなつてから、他の妨害を退けても、自己の希望權利を主張するといふことの意味を知らない。即ち戦争的の氣分が起らない。成功の快感、退嬰の恥辱を知らないのである。丁度この本能の強大なるべき時に、それを働かす機會を與へなかつたならば、大きくなつてから後、大に自己の權利のために戦はなければならぬ時になつても、その力が出て來ないやうになる。即ちこの場合にも本能の特質たる一時性が行はれてゐるのである。組打の争ひそのものは必ずしも必要ではないが、あらゆる事件に關して戰闘的精神を養ふためには、幼時の喧嘩も手段としては必要であるといへる。要するにこの本能は放置すべきものでもなく、罰を加へて壓伏すべきものでもなく、その精神を他に轉用すべきものである。

子供の中には特に喧嘩好きのものがある。この本能が度を超えて現れるのは、恐らく子供のもつてゐる正常の要求を満足せしめないから起ることであらう。例へば家庭又は學校に於て身體運動の本能に満足を與へないでゐると、一方争闘本能を培養するやうな結果を來す。子供の身體運動の傾向を相當に實現させる手段をとり、假令喧嘩好きの子供でも少しくその扱ひ方をかへればその惡癖を矯正することが出來ると思ふのである。

第九節 好奇本能(驚異)

好奇とは何か新奇なことに注意しようとする本能をいひ、それに伴ふ情緒を驚異と名づける。十分に發達した形態に就ていへば、その輪廓は極めて明らかである。併し段々と發達の初期に遡つて來ると、その輪廓が不明になつて、これこそ好奇の初めであるといふやうにハッキリと捉へることが出來なくなる。そこで先づ参考として、動物の生活にこの好奇本能がどのやうに現れて居るかを考へて見たい。

一、動物の生活に現れる好奇　ロマネスは精神發達の程度によつて動物の階段を區別し、之を人間の發達階段に當てはめたことがあつた。その中の第三段が昆蟲及び蜘蛛類であつて、この階段に至つて初めて好奇心の作用を見る、その證據には昆蟲はビカ／＼した光りを見ると、その方に飛んで行かうとする傾向を示すといつて居る。しかしそれは果して好奇心を起して飛んで行くのか、それとも生理的に明るい方に動いて行く向動であるか、明らかでない。人間の場合でも、生れたての子供が明るい方に眼を向けたからといつて、好奇心があるとはいへない、たゞ光りの刺激によつて生理的の反射を起しただけである。扱次の第四段は魚類であつて、光を見せると、

頻りにその方に寄つて来ることは、誰でもよく知つて居ることであるが、これも果して好奇心に起因するのか、それとも生理的の現象であるか、ハッキリは分かつて居ない。今一段上つて鳥類になると、著しく精神發達の徴が見えて、最早好奇心の存在は争はれない。或人は鸚鵡に時計を見せて試験した所が、その音を聞いて好奇心を起し、頻りにそれを検査する態度を示した。猫・犬・鹿なども著しく好奇心を起す、狩獵法の多くは動物の好奇心を利用したものである。試に羊や牛の牧場に横臥しつゝ音聲を發して見ると、暫くにして羊や牛はその周圍に群集するに相違ない。犬や猫が動くものを見てジャレるのは、つまり好奇心の發現である。猿になると更に好奇心が著しく現はれて来る。或學者が内側を黒く塗つた箱を密閉して、猿の籠に入れてやつた。すると直ぐにその箱の傍に來て綿密に調べてから、おづ／＼と觸れて見、しまひにはそれを取上げて開けようとした。すると箱が容易く開いたので、それを取落したまゝ飛びさつた。即ちこの時、鳥渡恐怖を感じたのであるけれども、好奇心は直ぐに恐怖を制して、再びその箱を取上げ、初めは嗅いで見たり、噛んで見たり、手を入れて見たりして居たが、終には頭をその中に入れた。この例によつて猿が如何に好奇心を起すかといふことが明らかである。

かくの如く、好奇の本能は高等動物になればなる程、著しく現れるけれども、その衝動は比較

的に弱い。如何なる動物に於ても、この本能のみが甚だしく充進するといふことはない、それはこの本能のみが著しく發揮されると、不慮の死を招く機會がどうしても多くなる。何故といふに、好奇心が起ると、之を起した物體に近づいて之を検査しようとするからして、危険が多くなるのである。好奇の外に恐怖の情が起つて之を制するために、危険に遠がること出来るのである。又他の生活に直接必要なる本能と違ひ、これがなくては生命に係はるといふこともないから、割にその力が弱いのである。併し文明人にとつては、これが知識發展の動力となるものであるから、之を詳説しておく必要がある。

好奇(驚異)と逃走(恐怖)とは相伴うて起ることが多い。犬が初めて蛙の飛び歩くのを見つけると、好奇心を起すと同時に恐怖を感じる、怖くはあるがそれにさわつて見たいといふ心中の争闘はその態度によく現れて居る、即ち逃げ腰をしながらジャレて居る様は誠に滑稽である。この二つの本能の相争ふことは「怖いもの見たさ」といふ諺によく現されて居る。「人見知り」する時分の子供が、見慣れぬ人の顔を見て泣きだし、母の懐にすがりつき乍ら、又も振返つて見ては泣き出だすのも、恐怖と好奇との争ひである。要するに、驚異はその物體に近づかんとする運動を起し、恐怖はそれに遠ざかんとする運動を起すものである。

二、子供の好奇の發達階段。子供の好奇は何時から初まるかといふことは、中々困難な問題であるが、諸學者の研究の結果に従つてその概略を述べる。

(一)その最も簡單なのは光りの刺戟をジツト見つめることである。これは單に見つめるだけであつて、その光りの方に眼を動かすといふことはしない。兩眼も未だ呼應しないで、不規則に動いて居る時に、何か光つたものがあるとそれに目を留めて、多くは快の表情を現すのである。これは早いになると、八九日頃から現れて来る、未だ生理的の反射に過ぎないのではあるけれども、一方には精神作用が伴なつて居て、これが將來發達しては知的の欲求となる萌芽である、前に述べたシン嬢の祖母が嬢に向つて、「赤兒が何か見て居るときには、それを無暗に妨けてはならぬ、注意力の發達を妨げる恐れがあるから」といつたさうである。これは今日の教育上の理論からいつても間違のないことであつて、注意の運動機關を練習することが低能兒の教育上第一に必要なことと見做されて居るのでも分かる。要するに、この受動的に物體を數秒間でも見つめるといふことは、子供の知的生活の初めであつて、極めて大切な時期である。

(二)その次ぎには、子供が進んで興味ある物體を見て、その方に眼を向けるやうになる。これは大抵第四五週頃からである。中にも一番その注意を惹くのは視覺上の刺激であつて、光つた物・動

く物・明暗の對比の強いものは皆子供の興味を惹くやうである。その次ぎは聽覺の刺激であるが、生後第一週には既に現れて来る、併し音によつて快を感じるよりは不快を感じるこの方が多いやうで、何か音を聞くと、恐怖を感じる程でなくとも、そのために激動を受けるやうである。

かくの如く能動的に觀察する働きは、一年の終り頃から著しく現れて来る、即ち單に物を見るだけでは満足せず、何でも手當り次第觸れたり味つたり嗅いだり握つたりして見る、箱だの抽斗だのを引出して中を見たがる、書物があれば中を開けて見ようとする、凡て閉ぢてあるといふことが、子供の好奇本能を動かすやうである、見えないものを見たがるといふ好奇心は、非常に廣まつて居り、その根柢も深い所を見ると、これは種族發生上に關係のあることといはなければならぬ、即ち動物を始め原始時代の人類に至るまで食物を得る必要上から、多少の危険を冒してまでも、隠れたるものを捜出すといふことが必要であつた、それが子供の個體發生に現れて來て居るのである。日本の子供に於ては、火鉢・戸棚などの抽斗を開けて、中のものを一々取出して調べるといふことが殆ど共通的に見られる、これをむげに禁止することは、子供の立場を失はしめるもので、「抽斗いぢめ」はホンの一箇月か二箇月位でやまるものであるから、いくら引出しても差支ないやうにして、自由に活動せしむべきである。これが將來研究室に於ける研究、極探檢の壯舉

となる萌芽であると思へば、少し位座敷を散らかしても、決して禁止すべきでない。

(二) 扱かくの如く、能動的の觀察が進みつゝある一方には、生後半年頃からして單に觀察するばかりでなしに進んで實驗するといふことが初まる。實驗とは故意に自分でやつて見るといふ事である。その初めは多く筋肉調整に關する實驗であるが、それが次第に擴がつて他の感覺にも及んで来る。その實驗の結果、不快な感覺或は苦痛が起つても、却つてそれが研究心の手引きとなるのである。觸覺・味覺及び聽覺に關する實驗は第二年至つて著しくなり、特に聽覺の實驗の如きは大人の耳に堪へられない程著しくなることがある。味覺の實驗は思つたよりも遅く表れる。物を口に持つて行くことは四箇月位から初まり、味覺質も少しは發達し、齒の出ると共に嚙むことも發達するけれども、進んで味に就いて實驗を試みるやうになるのは二年からである。ベルといふ人の記載によると、子供の味つた品数が百八十二の多きに上り、口に持つて行けるもの及び口をもつて行けるものならば、殆ど天地間の凡てのものに互つて居る。或人の報告に十四箇月の男児が石鹼を少し食べた。それから三週間経つて又食べたが、その後は始めて食べられぬといふことを知つたとある。七歳から十歳頃に互つて、味に關する好奇心が特に著しくなることがある。生のまゝで食べて見たり、砂糖と鹽を混ぜて食べて見たりなどする。時としては食物でないもの、

極めて不潔なものを單に好奇心からして味つて見ることがある。大人になつては「いかもの食ひ」といつて、熊と人の嫌やがるものを食べて得意になつて居るものがある。之と關聯して煙草を喫つて見たいといふ慾が八歳乃至十歳頃から現れる、これは固より生理的に喫煙の要求がある譯ではなく、單に好奇心から喫つて見ようとするのであつて、その中に味を覚えて止められなくなつてしまふのである。之と同時に煙草以外のものを喫ふことを盛にやる。ベルは七十一種の品目を數へて居る。これはつまり子供が新しい感覺を得ようとする好奇心から生じたもので、そのために假令不快な感覺を得ても、決して實驗を止めるやうなことはしない。

茲で、好奇心より生ずる子供の外見的殘酷について一言の要がある。子供が蟬の羽を引抜いたり、蜻蛉の尾をヘシ折つたりするのを見て、子供は生來殘酷なものやうに考へる人があるけれども、それは大なる間違ひである。實は子供の無智と一つは好奇心から生ずる實驗的要求の發露したものと見るのが至當であらう。子供が猫の子を池の中へ押込んだからといつて、子供は猫に苦痛を與へ、之を殺して以て快とするものであるといふやうに解釋するのは不當であつて、寧ろその動機は猫も金魚の如く泳ぐだらうと思つてやつて見たといふ風に見るのが至當であらう。若し子供の行爲の中には全く殘酷の分子のないものがないとはいへないが、一見して殘酷であるや

うに思はれるものが却つて好奇から起つた研究的の仕事であることが多い。

(四) 次ぎに子供の言語が発達して来ると、いろ／＼の疑問を發する、これは好奇心研究のためばかりでなく、兒童の精神生活全體を知るために大變大切なことである。子供の發する疑問を内容上から分けて見ると五つになる。(1) 自然力に關するもの、(2) 機械力に關するもの、(3) 生命の起源に關するもの、(4) 神佛に關するもの及び(5) 死及び天に關するものである。

右の中で(1) 自然力に關するものは最も多く、全體の約半分に當る程である。即ち太陽・月・星・雲・雨・霧・風・雷・電光・火・水・動植物に關する疑問は皆之に屬して居る。多くは「誰が作つたか」とか「何で出来てるか」とかいふ類で、随分うるさい程母親などを責めるものがあるが、この疑問に不適當な答を與へたり、又は不然答を與へずに抑壓してしまつたりするのは、將來子供の知的生活の基礎となるべきこの疑問の大切なることを知らぬ仕打である。

次の(2) 機械力に關する疑問は即ち自動に對する好奇心であつて、子供に機械力を應用した玩具を見せると、驚異と恐怖とが並び起るものである。これは猫などに自動仕掛の玩具を與へて見るとよくわかる。少し慣れて来て恐怖の分子が無くなつても、猫はまり程に興味を感じない、これは子供も同じことで、あまり複雑で、調べても分からぬやうな玩具は、割に子供に歡迎されない

のである。寧ろ一つ／＼に分解してしまつて再び組立てることが出来るやうなのがよい、たゞ子供の方で眺めて居るに止るやうな玩具はよろしくない、子供が手を加へて初めて活動するやうな獨樂とか紙凧とかいふものが、古今東西に亙つて喜ばれて居るのに徴して明らかである。その疑問の例をあけて見ると、「時計はどうして動くか」「汽車はどうして動くか」などである。

(3) 生命の起源に關しては、六七歳を中心として盛に疑問が提出される。これ等の疑問に對しては如何なる答を與へるのがよいかといふことが教育者の研究すべき問題である。例へば「私はどこから生れたの」といふ問に對して、「お前は木の股から生れた」といふやうな無責任な非教育的なる答を與へて満足して居るのが一般のやうに見受けられるが、というて、答へ方によつては、生殖に關する觀念を不神聖ならしめる恐れがある。子供の疑問の起つた時に、早く適當の答へを與へてその思想を堅めておかないと、子供は不健全なる新聞記事などによつて、生殖の事實に就いて想像を逞うし、その結果、子供の出生といふことと、犯罪とか恥しいとか秘密とかいふことを密に聯合して考へるやうになり、救ふべからざる弊害をかますに至るのである。

(4) 宗教上の疑問といふのは、「神様とは誰か」「佛様は何處に居るか」の類で、西洋の子供程多くはないが、時々子供の提出する問題である。有名なる聲で啞で高等の教育を受けたる米國のヘレ

ン、ケラー嬢は十歳の頃「この世界は誰が作ったか」といふ様な問を頻りに發して居つた。夫を出來るだけ説明してやると、「神は誰が作ったか、神は何で新しい世界を作つたか、土や水は何處から持つて來たか、一番初めの種子や動物は何處から持つて來たか、神は何處に居るか、神を見たことがあるか」などいふやうな問を發した。不具でない子供ならばもつと早くこれと同様な疑問が提出される。兼好法師も『方丈記』の末尾に幼時のことをかいてゐる。「八つになりし年、父に問ひていはく、佛はいかなるものにか候ふらんといふ。父がいはく、佛には人のなりたるなりと。また問ふ、人は何として佛にはなり候ふやらんと。父また、佛の教へによりてなるなりとこたふ。また問ふ、教へ候ひける佛をば、何が教へ候ひけると。また答ふ、それもまた、さきの佛の教へによりてなり給ふなりと。また問ふ、その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひけるといふとき父空よりやふりけん、土よりやわきけんといひて笑ふ。問ひつめられてえこたへすなり侍べりつと、諸人にかたりて興じき」と。これ等に對して如何なる答を與ふることが、子供の宗教心を適宜に補導して行くのに必要であるか、須く研究を要することである。

(5) 三歳乃至七歳の兒童が死に對する態度は主として好奇心に基づくものである。子供が始めて死といふものを經驗するのは、大抵犬猫の死に遭つたり、又は鳥や蟲の死骸を見るのに起因する

のであつて、その場合にも決して悲哀の情を起すやうなことはない、寧ろ好奇心を起すものであつて、色々の質問を發する、而して之に對する答へ方の如何によつて、子供が死に對して懐く感情も極まつて來るのである。初めは死といふことに對して殆ど恐怖を感じて居ないのが、次第に死人に對して恐怖を感じるやうになる所を見ると、子供の問に對する答へ方が如何に大切であるかといふことが分かる。

(五) 子供は能く物を壊すものである、特に玩具はよく壊す、その結果からいふと物を壊すのは善い事ではない、随つてしばしば御母さんの撃懲する所となる、併し子供が物を壊すのは、好奇心に起因するのであつて、つまりそのものの内部をよく調べようとする研究心の發露したものである。勿論破壊は必ず好奇から起るとはいへないけれども、大部分は好奇から起ると見て差支ない。破壊といふ點から見ても子供の好奇心を惹くのは音と運動とであつて、随つて樂器・時計などが一番多く壊される。機械的の玩具を壊すのは運動に對する好奇心を満足せしめんがためである。人形を毀すのはその内部を見んがためである。この破壊性は四歳乃至八歳の子供に最も著しく現れるものであるが、正常の發達を遂げた子供であるならば、機械力を應用した玩具などを、そのまま毀さず久しく持つて居るといふことは決してない。屹度その内部を見ようとする好奇心から

して之を破壊するに至るものである。新しい玩具を與へると、暫らくすると「もうこわしてもいい？」と尋ねる子供がある。故に理想をいへば、別に破壊せずとも、運動の原理や、初歩の物理上の法則などの分かるやうに組立てた玩具を作つてやる必要があると思ふのである。

(六)好奇心發動のために旅行慾を起すことがある、尤もこれは青年期に屬するものであつて、多くは友人の話の聞いたり、旅行談を読んだりなどして生ずるのである。謂はゆる彷彿癖なるものも恐らくこの好奇心の偏したる發育が他の諸原因と相俟つて生じたものであらうと思ふ。統計上からいふと家出の最も多いのは春であるが、これは春季に發現する動物の周期性移住本能と關係があるから、次章の中の移住本能の條下に述べよう。

三、有害無益なる好奇 以上は好奇心の發達の順序に隨つて、種々なる好奇心の現れ方を六つに分けて研究したのであるが、好奇心の發達したものに就いていへば、自ら無用な有害なるものがある。

(一)一時的の感覺的好奇 前から述べた如く、好奇心は決してその者が有益なものではなくして、それが知的發達の口火をなすといふ點に於て大切なのである。故に好奇本能の中にもそれが知的發達とは何等の關係のないものもあるし、又道徳上よろしからぬ好奇心もある。

凡て子供は感覺的の刺激に對して事々物々好奇心を起して、その注意を轉々するものである。然るに若し教育が甚だ不完全であるか、或は無教育のまゝで生長するかすると、大人になつても大體に於て子供の時の状態を續けて居るものである。即ち現在に於て眼に觸れ耳に入るものゝ外は少しも好奇心を起さぬ、これは無教育なる婦人の集合處たる井戸端會議に於てよく見ることが出来る。彼等の間に注意せらるゝものは、僅に數軒の裏長屋の間に生じた出來事に限られて居つて、日々下らぬことに會議を重ねて居る。これ等は好奇心が子供の時のまゝ、發達せず停止して居る状態であつて、その結果は謂はゆる「物見高い」といふ性質を誘致して來る。「物見高いは都の常」などといつて、ごく些細なつまらぬことにも、多人數が群集してワイ／＼騒いで居る謂はゆる「彌次馬」が多い。それから停車場とか公園とか、多く人の出入する處には、必ず用のない人がウロ／＼して居るのを見るが、極めて不健全なる好奇心である。都會の人が少し田舎に行くとき、皆怪奇の眼を見張るが、一時東京でも外國人が通ると、後からゾロ／＼ついて行くといふ風であつた。都會に限つて特に物見高いやうにいふけれども、恐らくそれは都會に人が多いためであつて、教育の低い社會には總じてこの不健全なる好奇心が著しいやうである。

次にかゝる感覺的の刺激に對する不健全なる好奇心が或一事物に固着して現れることがある。東

京には謂はゆる「火事氣違」といつて、警鐘の音を聞くと、何事をおいても飛び出して見物に行くといふ人がある。放火症といふのは火事騒ぎを見たさに火をつけるのであるが、これは火をつけてまでも見たくはなけれど、一旦火事と聞けば一里や二里位は馳け出して行くほどの熱心である。

(二)蒐集道樂 次ぎに無用なる好奇心の發現として記すべきことは、謂はゆる蒐集道樂なるものである。即ち或物を猥りに集めようとするのであるが、第五節にも述べたやうに、たゞ蒐集といふ中にも、動植物の標本を集めるなどのやうに科學的に研究の意味を有つて居るものもあるし、或は全く病的に濫集症になつてしまつたものもある。こゝに説かうとするのはその中間に位するものであつて、精神病と見做す程ではないけれどもその集める目的に何等の研究の意味がなく、一時好奇心に驅られて熱中はするものゝ、久しからずして飽きが來て、又他に移るといふやうなのをいふのである。古郵便切手などを集めるのは好奇心から來て居るとはいふものゝ、諸國との親みを増す外に、之を丁寧に整理して切手帳を作りなどすれば、整理の習慣などに益するところが多であらう。フレデリック大王は千五百の煙草入を所有せられたといふことである。たゞ品數の多いのと、價の高いのとを誇る外に、何の目的もないならば、それは甚だ有害なものであるといはなければならぬ。或は集めることその事に好奇心を感じるのみならず、集める品物に奇を求め

るものが少くない、例へば燐票道樂といつてマッチのペーパーを集めるものがあつて、珍らしいことになる、一枚五圓も十圓もするのがあるといふことである。その物には何等の價値もないのにとゞ好奇心からそれを蒐集するのである。同じ勢力を費やすならば、もつと學術的に有益なものとか、或は趣味を養ふ上に助けとなるものとか、いろ／＼ありさうなものである。或人は物好きにも停車場の土瓶を集めた人がある。古寫本・古書畫などの蒐集は結構なことであるけれども、價値あるものを集めるのでなくて、たゞ徒らに稀有なるもの、奇怪なるものを集めるに至つては墮落といはざるを得ない。新古に拘らず、凡そ書物を求める道樂は先づ上品の方であるが、その中にもいろ／＼種類がある、(一)王として裝飾に供するために裝釘の美なるものを選んで集める人もあるし、(二)珍本家といつて、世界に一部しかないといふやうな書物を集める人もあるし、(三)古くから有闕れた書物でも初版のものゝみを集めて喜ぶ人もある。併しこれ等は孰れも内容によつて集めるのではないからして、單に藏書家たるのみに止つて居る。

(三)残酷野蠻なる遊戯に對する好奇 少し方面をかへて考へて見るに、好奇心の發動がよろしきを得ないといふと、頗りに野蠻なる遊戯を好むやうになることがある。昔、紀元前二六四年頃からローマには闘戯コッフェチオといつて残酷な遊戯があつた、之はそのために雇はれた人に鎧を着せ、武器

を持たせて闘はせ、それを集つて口物するのであつて、全く好奇心から出た非文明的な残酷なる遊戯である。この遊戯にはいろいろの形式があるが、中で Antidaine というのは、眼の處の開いて居らぬ盲胃をかぶつて闘ふのであつて、めくら減法に剣や刀を振りまはして闘ふ所を面白がつて見物して居るのである。而して一方が傷いたり敗れたりした時に、そのまゝで止めさせるか、死ぬまでやらせるかは、その見物人の望み次第であるといふに至つては、如何に獸性を帯びた残酷な好奇心であらう。教育あり趣味の發達した民族であるならば、かくの如き残酷なことは決してこれを好まないであらう。典麗閑雅なるギリシヤ人は果して之れを好まなかつたといふことである。或は闘戯の如きは紀元前に於ける古代民族の喜んだことであつて、近世にはさういふ残酷な好奇心はないといふ人があるかも知れぬ。處がさうではない、人と動物との差こそあれ、スペインには闘牛といふ國技がある。恐らくこれ程残酷なものは又とあるまい、而も一國擧つて好奇心の眼を見張つて之を見物し、闘牛長の如きは國王以上に民衆の喝采を博するといふことである。一八九九年フランスにこの闘牛が輸入され、政府は法律を以てこれを禁止したけれども、民衆はその禁を守ることが出来ないほど、好奇心を刺激されたといふことである。それが日本にも行はれて居る。伊豫國南北宇和郡で行はれて居る闘牛の如きはそれである。一三十分から二時間位まで、互に角と角とを突き合せて頭や頸や腹などから鮮血を滴らして慘憺たる状を呈するさうである。

でも、互に角と角とを突き合せて頭や頸や腹などから鮮血を滴らして慘憺たる状を呈するさうである。

この残酷を喜ぶ好奇心と性質を同するものに、公判傍聴好きとでもいふべきものがある。自分とは全く關係のない裁判を傍聴して、その好奇心を満足するものである。その甚だしきものになると、毎日必ず姿を法廷に現し面白



圖十二第
「らか孔のぎか」畫庭家
國ンデーエス
筆ンソルラ ルーカ

さうな事件があると這入つて聞いて居る。何れ法廷に持出されることであるからして愉快な花々しいことはない。闘戯や闘牛を見る程、直接に感覺的に残酷なものではないけれども、自分以

外のものゝ苦痛・苦悶を見聞きして好奇心を満足させる點に至つては即ち一である。パリにはラ・モルグといつて姓氏不詳の行倒れ人などを一定時日の間、公衆の觀覽に供する所がある、こゝには毎日必ず好奇心に驅られて用もないのに見に来るものがあるさうである。

(四) 祕密に對する好奇 猿が閉ぢたる箱を與へられて好奇心を起し、之を開かうと試みた例は

前已に述べておいた。凡て動物も人間も閉ぢたるもの・隠されたるもの・秘密にされたるものに對しては本能的に好奇心を起して之が内容を知らうとするものである。浦島は開けて見るなといつて玉手箱を渡されたけれども、どうしてもその好奇心を抑へることが出来なかつた。アダムも食ふなど命ぜられた果實を、好奇心から取つて食べたので遂に罪の子となつた。發賣禁止の如きは却つて好奇心を増して讀者を得る手段とさへいはれて居る。これ等は其の隠されたものが興味あるものであるために知りたがるのでなく、たゞ隠されたものであるために見たがり聞きたがるのである。子供が五歳以上に達して、自己の利害といふことを明瞭に意識するやうになると、この種の好奇心が種々の形を取つて現れて來る。父母の話を立て聞きする。かぎの孔から部屋の中を覗く、カバンを開けて見る、更に他人のことに關してその秘密に屬することを聞きたがり、更に之を他人に傳へることを喜ぶやうになる。特に女兒にはこの誤れる好奇心の發達したものが多く、他兒の祕事を發いて仲間と語らふのを仕事として居るものさへある。

四、**好奇の變態** 變態とは常態に對する語であるけれども、兩者は截然と區別の出來るものではない。常態とは理想の型を示したもので、實際に於て凡ての人はこの型から少しづつ、外れて居る。而してその外れ方の少いものを常態といひ、甚だしく外れたものを變態といつてゐる。故

に變態を研究して見ると、常態の人も多少その缺點を有つて居る。例へば精神病の一つの症候に清潔症といふのがあつたが、精神病者でない常態の人の中にも随分潔癖の人が居て、他處で食事をする時は必ず茶碗を透かして見、白紙を以て清拭してからでなければ食べぬ人がある。而して白紙の不潔なることには氣が附かないのである。この意味に於て好奇心の變態は常態の人の心得上大に參考になるのである。好奇心の變態は之を分けて二つとする。

(一) 好奇心の缺乏 を三つに分ける。(甲)は高度の白痴に於て見るもので、患者は殆ど意識現象なく、植物性反射性の機能があるのみで、可塑性は絶無、即ち教育は全く不可能である。このものにあつては、如何なる刺激を與へても、好奇心を起させることは絶対に出來ない。(乙)軽度の白痴に於てはやゝ意識現象を呈し、強烈なる光體を見せるとか、烈しき音響を聞かせるとかすると、幾らかその注意を惹くことが出来るけれども、矢張り學校教育は不可能である。(丙)痴愚となると、受動的の注意だけは働けけれども、發動的の注意は駄目である。その受動的注意も永くは續かない。學校教育は全然不可能であるといふ譯ではないが、特殊の設備を要する。

(二) 好奇心の過度 を二つに分ける、その(甲)は荒唐なる知識慾であつて、知識を求めると好奇心は實に盛ではあるけれども、自分の企ては荒唐のものであるといふことを知らずに居るもので

ある。即ち到底出来ないやうな問題を夢中になつて研究する。例へば錬金術の如きが即ちそれである。これは鉛のやうな下等の金屬から金銀を造り出さうと企てた術であつて、その説によれば鉛のやうな下等金屬でも黄金でもその成分には變りはない。たゞ不純物を混有するだけの運びであるから、「哲學者の石」を用ひてその不純物を除けば、直ぐに金に化することが出来るといふので、當時の人は非常の熱心を以て哲學者の石を發見しようとしたのである。この錬金術が化學の發達を促したことは確かであるけれども、今日となつてはその企てが誠に荒唐のものだといふことが明らかになつて居る。それでも尙好奇心に驅られて、今日秘かに錬金協會といふやうなものを設けて、頼りに研究して居るものが、少くとも世界に三種あるといふことである。又濫りに未來のことを知り度がつて、「うらなひ」などに頼らうとする態度も亦、好奇心の變態と見ることが出来る。

(乙)質問症 好奇心が過度になると、質問症というて、矢つぎ早やに質問をする病人がある。これに二通りある。(一)強迫觀念性質問症といふのは、質問の形をなして現れる強迫觀念で、事實上の興味なき質問が、純強迫的に生ずるものである。多くは些細のことに強迫觀念を有つて居つて、「風は何故吹くか」「机にはなぜ足が四つあるか」などいふやうな愚にもつかぬ質問を連發

し、自分もそのために強迫を感じて不快でたまらぬのである。(これが質問となつて言葉に現れぬときには、穿索症といひ、正常の判断や行爲を妨げるときには、これを疑惑症といつて區別して居る。)(二)次に觀念奔逸性質問症といふのは、觀念聯合の速度が速過ぎて、それが病的な質問となつて現れるので、多く子供に見る所である。この種の質問は感覺が緒口となつて、急速に澤山の觀念を惹出し、而かもそれを解決することが出来ないために、質問となつて現れて来る。例へば風が吹くと、「風は何處へ行くか」「どこから来るか」「雲は何で作つてあるか」など、質問が轉々として行く。併し前のやうに子供の心に強迫が起るやうなことはない。如何にも知りたけなる、活氣に充ちた質問である。併しながら一つの質問を出して、それに対する解答の與へらるゝまで待つて居ずに、注意は次ぎから次ぎへと轉々して行く。これはよく低能兒に見るところである。

さて右の中第一の方は子供には少い、豫後は不良であつて、偏執病に轉ずるものが多い。第二の方は子供にも割りに多く、豫後は佳良である。但しこれは軽度の痴愚の症候である、又は小兒精神病の症候である。勿論子供の質問は知識發達の基礎をなすものであるが、これ等の病的な質問は決して良い症候ではない、ところが健全なる正常の質問と、この病的な質問とは餘程似た點があつて、その區別をしておくことが必要である。健全なる子供もいろ／＼の質問をするけれど

も、之に相當の解答をしてやると、それで満足する、でなければその質問と内的の連絡ある新しい質問を提出して来る。ところが病的の場合に於ては、親切に十分の解答を與へても、效き目がない、即ち強迫性の場合に於ては、聯想強迫の影響を受けて、幾度も同じ質問を繰返す、奔逸性の場合に於ては、折角の解答を聞きもあへず、それとは全然關係のない質問を繰返して来るのである。

五、好奇の必要 自然界及び人事界の現象に對する驚異及び驚嘆の情が宗教の起源の一つであることは、普く人の認むる所である。して見れば、好奇心は宗教の發達上に大切なる役目をなして居るといはなければならぬ。この點に於て好奇心は社會の保存的勢力の一つであるといふことが出来る。併し又、一方に於ては好奇が社會進歩の動因として大切なる役目をなして居ることも忘れてはならぬ。

そもく好奇といふ本能は思辨的及び科學的傾向の根本をなすものである。即ちこの本能があればこそ、哲學も科學も發達するのである。故に思辨的及び科學的傾向がどの位進んで居るかといふことを見れば、その社會の文明の程度を知ることが出来ると同時に、それを以て文明の進歩する主たる條件と見ることが出来る。之を歴史に徴して見ても、思辨や科學の最も盛であつた時

代は即ち社會進化の最も急速に行はれた時代と一致して居る。例へばアリストートルの如き大哲學者大科學者の出た時は即ち社會の方も最も發展した時であつた。而して社會的の黄金時代に次いで必ず社會的の沈滞期が来るものであつて、之に相當して思辨及び科學の方も全盛期に於ける思想を、たゞ繼承するだけに止ることになる。例へば孔子の後には之を祖述する學者が輩出しアリストートルの後にはその學派とか註釋家とかいふものが出て、カントの後にはいはゆるカント哲學者が出たやうなものである。

今日の如き文明の進歩を致したのは、つまり間斷なき好奇心があつたからであるといつてもよい。例へば南極探検の如きは、極めて好奇の満足を要求するものであつて、かやうな好奇心は文化の進んだものゝ頭でなければ起るものではない。我々は鳥渡知らぬ土地に行くと、直ぐに人口は？戸数は？といふ好奇的の疑問が起るけれども、文化の程度の低いものには左様な研究心は起らない。國勢調査の如きもよほど文明の進んだ國でないと、完全に行はれない。先年、臺灣の生蕃を連れて來て諸處を見物させたことがあつたが、鳥渡考へると、到る處に彼等は好奇の眼を見張るであらうと思はれたけれども、事實は決してさうではなかつた。たゞ彼等は鐵砲や大砲の如き人を殺す道具については大分好奇心を起したやうだつたけれども、その他の事に於ては案外冷

淡であつた。特に文明的の裝飾などについては殆ど無關心であつたといふことである。これはつまり彼我の文化の程度があまり違ひ過ぎるために、我等の好奇を感じる事が、必ずしも彼等の好奇心をそゝらないといふことに起因するのである。

六、好奇と社會進歩の階段。好奇といふ本能が基礎となつて思辨的傾向が發達する。その結果はつまり因果の概念の進歩といふことに歸する。今因果の概念の進歩した跡を尋ねて大凡三階段に分け、(イ)魔術的(ロ)超自然的(ハ)科學的の階段とすることが出来る。

(イ)魔術的階段。この階段は人間が周圍の世界の勢力を左右せんとする必要及び慾望の直接に現れたるものであつて、而かも外圍の勢力が如何なる性質のものであるかを知らずに居るのである。而して一方に於ては、宇宙間の凡てのものは互に相聯關して居るといふことを暗々裡に考へて居る。例へば雨が降るといふことは自然界に於ける一つの勢力である。處が自分の都合によつて明日は降らせ度くないなどと思ふことがある。今日の科學では降雨は人力で左右することが出来ないことになつて居るけれども、この階段に在る人々はそれが出来ると考へて居る。そこでテール／＼坊主などを作つて下けておく。彼等の考へでは、宇宙間のものは凡て相互の聯絡を有つて居るのであるから、降雨とテール／＼坊主との間にも必ず必至の聯絡があつて、テール／＼坊主によ

つて明日の降雨を止め得べしと信ずるのである。勿論彼等は宇宙間のもの凡て相互に聯絡するなると明々地に意識して居るのではない。たゞ彼等の所行を分析して見るとさうなるといふ丈で、その相互關係の仕方については極めて漠然たる考へを有するだけである。随つて自然界の勢力などを左右する場合に用ふる所の手段は、極めて偶然的のものであつて、少しの類似があれば直に取つて以てその手段とするのである。謂はゆる「おまじなひ」は皆之が手段である。子供は雜列に逢ふと、手を握つて拇指をかくす、これは死が各自の親を見まはぬやうにするためのまじなひである。即ち左右しようと思ふ親の生命とその手段たる拇指との間には今日我々の眼から見て何等の關係もないのであるが、彼等は之を以て效を奏し得べしと信じて居るのである。薬人形に五寸釘を打ちつけて、人を呪ふなどもこの中に入れられる。

かういふやうな魔術的方法は久しい間人心を支配し、今日においても尙尠からず殘存し、小學兒童の間にさへ行はれて居る。まじなひの中にも精神上に關係多き事柄は、その奏效を信ずる暗示の力によつて、或はまじなひ通りの結果を生ずることも度々あらうと思ふけれども、それでも效果の空しかつたことが度々になると、遂には之に満足することが出来なくなる。テール／＼坊主を幾つ拵へてもやはり雨が降ると、今迄の手段を放棄して、

(ロ)超自然的の階段に移つて行く。この階段に於ては好奇の衝動に驅られて想像の力を働かし「自己の意志に反して雨を降らすものがあるであらう」といふ風に考へる。さうしてその雨を降らす力を崇拜するやうになる。即ち超自然的の力を信じて、何事も神や佛に祈るやうになる。例へば雨を降らしたいときにはおまじなひなどには依頼せず、直接降雨を司ると信ぜらるゝ神佛に雨乞ひをするのである。併しこの階段と前の階段とはキッパリ分れて區別が出来るものではない。社會の大部分が宗教的の階段に移つて來ても、或一部の人だけは超自然的の説明に満足することが出來ず、矢張前の階段の魔術的態度を持して居る。しかしその手段は前掲のものよりは餘程進歩して複雑になつて居る。即ち好奇心に驅られて、從來よりは一層自然力に影響を與へようと思つて種々の工夫を凝らすやうになつて居る。即ち人心がやゝ進んだ後に於て、尙古いやり方を墨守しようとするものであつて、その結果として現はれたのが、魔術者・メデシンマン・鍊金術者・占星術者などである。併し超自然的階段に屬する宗教家はこれ等の人を以て外道なり難行なりとして排斥もし迫害も加へたのであつた。而して

(ハ)科學的階段に至つてはすべての問題を科學の力によつて解決しようといふ風になつて居る。例へば雨をふらしたり降らさなかつたりするのも、テル／＼坊主や雨乞ひなどに依るのでな

く、電氣の如き物理的勢力をかりて科學的に解決しようといふ心がけて居る。これはつまり保守的な宗教的態度と、進歩的なる研究的態度との間に絶えず衝突が行はれた結果として、かゝる進歩を見るのであつて、今日はつまり吾々の好奇心を科學的に満足せしめんとする時代である。好奇心の教育もつまりこゝまで到達して、この本能をして社會進化の一要素として有力なるものとする必要がある。

七、知育の基礎としての好奇以上述べたところによつて、好奇心が兒童の知的發達の本能的基礎をなしてゐることが明らかになつたであらうと思ふ。子供は生れながらにして、知的に進歩せんとする動力をもつて居り、それによつて知的に發展して行くだけの性能をも具へてゐる。それに對して適當の指導を與へる外は、教育者として何物をも與へる必要はないし、又與へようとしても、與へ得られるものではない。然るに従來の多くの教育は、教師のもてるものを兒童に與へることのみ腐心し、兒童が自ら無限に發展し得る動力を具へてゐることを忘れてしまつたやうな觀がある。若し教師にして自己の僅かに知れることを兒童に分與するのが教師の仕事であると考へ、兒童は又教師より一事にても多くのことを學ぶのが學問であると考へたならば、結局兒童が先生以上に發展することは出來ないことになるであらう。かやうな教育の下に於ては、到底

出藍の譽れあるものを作り出すことは出来ない。教師は自己の有する貧弱なる知識を兒童に授けるなど、いふ誤つた考を放棄して、眞に兒童自身のもてるものを開發して、その成果を眺めようといふ態度に出でなければならぬ。兒童の延びようとする方向と、教師の教へようとする方向とが、常にその一致を缺いてゐるために、教育の能率は擧がらないのである。「教育は引出すことなり」とはすべての教育學教科書にかいてあるにも拘らず、實際に於ては少しも引出すやうな教育になつて居らず、常に好奇の芽を枯らし、知的發展の途を沮み、たゞ教師が一定の案に従つて、何事かを教へよう教へようとしてゐるのである。發達の可能性を包藏してゐるところの兒童は實に偉大なるものである。その偉大さを知らずして、徒に己が貧弱なる知識を分與しようとしてあせつても、それは徒に自然の發展を害ふのみで、人の子を害ふとは眞にこの事であらう。眞に己れを空うして、兒童といふ天然の發展を玩賞する心にならなくては、眞の教育は出来ないと思ふのである。これは好奇といふ知的發達の本能的基礎のみでなく、他のすべての方面についても同じことである。

第十一章 種族保存の本能

目的の上から見て、その結果が種族の保存になるが如き本能を一括して、種族保存の本能と名づける。この種類に屬するものは、移住・營巢・産卵・生殖・養護等の諸本能である。兒童心理學に於て特に攻究を要するものは、移住と生殖と養護とである。

第一節 動物に現れる移住・營巢・産卵の本能

移住本能の何たるかは、海豹の移住を見るとよくわかる。海豹は一定の季節が來ると、アラスカ島を去つて、太平洋を南へ々と幾百幾千哩の移住を試み、秋と冬との間は南方に止まつてゐる。春になると、子を産むために北の島々に戻つて來る。その歸島の日取りが毎年不思議なほど同じだといふことである。これは氣候の變化と、海豹の體内に起る變化とが相俟つて刺激となり、

長い長い旅を始めさせるのである。丁度時計の振子の如く年々歳々相往復して居る。併しこれは決して習ひ覺えたことではなく、たゞ海豹の身體に神経筋肉上の構造が遺傳され、一定の刺激に會へば、南に行つて子を育て、北に戻つては子を産むといふやうになつたのである。

鮭の移住も中々面白い。適當な季節に相當の發育を遂げると、河口にはひつて来る、その季節が来ると、河は鮭で一杯になつてしまふほど澤山に集つて来る。これらの鮭は非常なる困難を冒して上流に向つて溯河し、上流の砂利や砂の多い所に行つてそこに卵を産みつける。その間は急湍を越え、瀧を上つて、浅い上流に達するまでは、少しも食物をとらず、或は鼻を傷け、尾を破り、愈目的地に達する頃には殆ど疲れ切つてしまふ。そこで卵を産みつけてしまふと、今度は尾を先きにしたまゝ、下流の方に流されて行つて死んでしまふ。千島樺太地方ではこれ等の屍體が累々として河畔に横はつてゐるといふことである。卵の方は時節が来て孵ると、徐ろに流を下つて大洋に出で、そこで数年の間生活し、相當の大きに達すると、河口を見つけて流を上り、先きの如く卵を産みつけてから死ぬることを繰返すのである。海豹の場合に於ては、子が親と一緒に移住してその習慣を見習ふといふことも考へられないではないが、鮭の場合に於ては、さういふことは少しも考へられない。親は卵を産みつけるだけで、親子共に生活することはないからであ

る。故に少くとも鮭の移住は盲目的衝動的のものだといはなければならぬ。

謂はゆる候鳥(渡り鳥)の移住も、海豹の移住とよく似て居る。秋になると、鳥は群をなして北方より南方の國に渡り、そこで冬を暮す。やがて北國が春になると、再び北の舊巢に戻つて来る。天候の都合で幾らかの遅速はあるけれども、殆ど一定の時間を定めて歸つて来るといつてもよい程、規則正しいものである。時としては數千哩の旅をして来た鳥が、昨年と同じ木の同じ枝に戻つて来て巢を営むことさへ少くない。

動物の産卵本能には中々面白いのが少くない。その例を挙げると數限りもないが、自然が生物の繁殖のために如何に苦心してゐるかは、産卵の現象だけを見ても知ることが出来る。梨や林檎の害蟲に象鼻蟲といふのがある。その口吻は身體の割に大變長いから、これを象鼻蟲といふのであるが、これが卵を産むには、まづその口吻で梨又は林檎の實に孔を穿つておき、その孔に後尾端をあて、産卵するのである。そしてその孔の口は一種の膠質物で塞いでおく。さうすると、暫らくしてから雄が飛んで来て、雌の産卵した果實のついてゐる枝の一部を、鋭い歯で半分ばかり食ひ切るさうである。その結果、その果實には樹液が十分に行かないから、段々凋れて来て、幼蟲が育つのに、丁度いゝ加減の食物になる。若しその枝を半ば食ひ切つておかないと、幼蟲はた

とひ孵化しても水分のために空気の流通を防げられて、窒息する憂ひがあるのである。

巢を作る動物も澤山あるが、蟻や蜂の作る巢の如きは、人も知る如く可なり精巧なものである。それが種類によつて一定した巢を作るのが中々に不思議である。同じ蜂の中でも蜜蜂の巢は人の知つてゐる通であるが、「すゞめばち」も可なり大きい巢を作る。大すゞめばちは地中に大きな水平巢を作り、紋すゞめばちは紙様の球形巢を木につりさけ、徳利ばちは泥で徳利のやうな巢を木の枝に作り、長脚蜂は蓮状の巢を作るといふ風に、種類によつてちやんと一定した形の巢を作るから、巢の形状によつて動物の種類を知ることが出来る。しかもその營巢は經驗によつて知つたのではなく、たとひ他の同種の動物が巢を作るのを見てゐなくとも、本能的に同じ形の巢を作ることを知つてゐるのである。巢が出来ると蜂はその中に産卵し、卵子が孵化すれば、親又は働蜂がそれを養ふのである。

第二節 移住本能

一、人類に現れる移住傾向 季節及び氣候の變化に應じ、又食物供給の状態に従つて居所を移すといふことは、下等動物のみならず、人類の生活に於ても、極めて重要な因子であつたに相

違ない。人類學の示す通り、人類が主とする食物は、種々の階段を経て來たものである。果實を食つた時代・農業時代・漁業時代・狩獵時代などがあつたのである。果して然りとすれば、人類の過去の生活に於ては、移住が大切な要素であつたといはなければならぬ。人類は森林や水流・山や谷・季節の變化・晝夜、さては月の盈缺などに對しても、密接なる關係をもつて居て、それに順應して行つたに相違ない。若し人類の起源及び發達に關する通説が正しいとすれば、人類が久しい間これ等の條件の變化に左右されて居つた結果として、その有機體に何等かの痕跡を残したに相違ないと思はれる。加ふるに各國の建國史は、殆ど皆移住に關する漢とした傳説や口碑から成つて居る。我が國の歴史を始め、ギリシャ・イタリ及びイギリスの歴史は皆移住から始まつて居る。今日のアメリカ土人は曾て海を渡つて大移住をなしたものだといふことも、確證されて居る。

更にこれを人間の兒童期及び青年期について、移住本能の發動を調べて見ると、怠惰とか家出などの現象があり、大人になつてからも、漂浪の衝動は今日尙、その痕跡を我々の生活に隔世遺傳的に残して居るといはなければならぬ。勿論文明の發達とともに、生活の状態が定住的になつて來たことは事實である。嬰兒期が次第に長くなつて、家族生活をするの必要を生じ、愈定住の傾向を堅くしたために、漂浪移住の傾向は次第に弱くなつて、餘程外圍の壓迫が烈しくならない

と働かないやうになつて来た。即ち人は自ら住むべき家を建て社會の影響と子を育てる必要とからして、親子は一定の所に止まるやうになつた。それでも尙社會の影響が弱く、移住を促すやうな條件が強いと、親の一方が家を去ることが少くない。殊に子供は家を離れ易いものである。かくの如く移住の衝動は社會上育兒上の關係から随分弱くなつて来たけれども、若しも家庭生活を送るに都合の悪い條件が生ずると、舊い移住本能が現れて、往々一生を通じて作用することがある。歐洲諸國にはジブシーといふ有名なる浮浪民族が散在して居つて、盜賊・うらなひ・罽賣・鑄掛などを商賣として、諸國をへめぐつて居る。これ等は一生を通じて浮浪本能の働いて居る例である。遊び人とかゴロツキとかいふものもこの本能に左右されて居るものであらう。して見ると、兒童期や青年期に於ても、居所を移して何か珍しいものを見たいといふ遺傳的の傾向が現れるのであるが、家庭の事情がそれを妨げるやうな状態にあるために、通常はその衝動が實現されないで終るのである。故に若しも家庭や學校の状態に缺陷があると、怠惰とか家出とかいふ現象が本能的に現れて来る、而して一旦浮浪生活をする、それが一生を通じて行はれ、到底一所に定住することが出来ないやうになることさへ少くない。どの村、どの町に行つても必ず所定めずさまよひ歩く謂はゆる家出人なるもの、噂を聞かぬことはない。それが男のみならず女にもある。短

時日の間、家族と一緒に暮して居ると、やがて家を出て、さまよひまはるが、何時とはなしに歸つて来る。その時はこれから長く家に止るつもりであるけれども、やがて家を出て、又歸つて来ないのである。

二、怠惰と家出 怠惰と家出とは春と夏に一番多い。これが前に述べたごとく、移住本能に基づくものとしたならば、春と夏に多いことは當然の理である。冬の中は已むを得ず、一個所に定住して居つた。それにつぐ温かい季節であるから、原始人類も多くはその春の氣候に移住を試みたに相違ないと思はれる。アメリカの土人は、春になると、陣地を去つて戦争と狩獵とに出かけるといふことである、我々でも春が来ると、心をそゝられるやうな氣がして、家の外に出たくなるものである。住宅の移轉なども統計を取つて見たらば、春が一番多いかもしれぬ。何にせよ、怠惰が春の季節に一番多い現象であるといふことは争はれない。子供が歩けるやうになつて戸外に出ると、何處ともなく盲目的に歩くことを好む傾向が現れるものである。併しその傾向に對しては初め少しの注意を加へると、容易にこれを壓倒して家に留る習慣を養ふことが出来る。併し少しく舵をとり損ふといふと、この傾向が可なり活潑に働いて、鳥渡注意を怠つて居る間に、二三四町もさきの方に遊びに行つて居るといふやうなことが少くない、その後兒童期の終から青年

期の初にかけて、著しく家出の傾向が強くなつて来る。怠惰及び家出の例は、この時代に最も多いものである。若し事を未然に防がなかつたならば、終生浮浪の経験を脱することが出来ないやうになる危険がある。青年期の頃、未だ家庭生活の束縛力があまり強くない中から、過度に世界を見せると、この浮浪の傾向を促すやうな結果に陥る危険がある。浮浪は犯罪の前階である。犯罪を離れた浮浪は考へることが出来ない。そも／＼住所が一定しないで、今日は此處、明日は彼處といふ風では社會の慣習や他人の生命財産を尊重する必要もないから、どうしても犯罪といふことが免れなくなつて来る。恒産なきものは恒心なしといふが、「恒住なき者も恒心なし」とふことが出来る。都會では巡査と住民との關係があまり懇意になり過ぎる弊を認めて、頻々と轉任を命ずるさうであるが、そのため巡査の子の操行は甚だ悪いといふことを聞いて居る。又浮浪の徒の群に入つた少年を改心させようとの親心から、嫁を娶つて與へても、やがて又家を出て行くことも、よく聞くとこの事實である。

三、怠惰の原因 以上述べた所によつて、家庭及び學校の與へる社會的影響を妨害するやうな事情はすべて移住本能を促すものだといふことが出来る。戸外で仕事なり遊戯なりをしようとする欲望、學校及び教師を好まぬこと、自由の活動を欲し、束縛を好まぬこと、何となく現狀に満足することが嫌やで、何處か目新しい所に行きたいと思ふことなどが、怠惰の原因となるのである。

寂しい冬が済んで、木の芽の出る春になると、何となく新しい世界に出て、新しい生活が送つて見たくなるものである。仕事の單調に飽いて嫌やになつて来て、思ふさま戸外で手足を延ばして見たい時である。春は勉學の時でなくて、行樂の時である。大人でさへさうであるから、子供にとつては特にさうである。外の世界を見たいといふ欲望はむら／＼と起つて来て、盲目的に衝動的に子供の心をそよる。學校と家庭の事情がよほど好都合に出来て居なければ、子供が怠けて家を出ようとするのも、無理のない話である。

學校を嫌ふのは概して學校の課業がよく出来ないためである。課業のよく出来ないのは、感覺器官に缺陷のあるため、營養不良のため等、その他種々の原因があるであらう。如何なることが原因であるにせよ、學校の課業がよく出来ないは學校に行くことを好まなくなるのは當然である。又課業の種類を好まないことが原因になることもある。學校でする仕事の子供にとつて早過ぎたり、既に活動せんことを要求して居る作用があるのに、それを放棄しておいたりすると、子供は、學校以外に於て、それを満足せしめようとするに至るのである。手工の如き技術を教へる學校を

去るものは甚だ少ないといふことも併せ考ふべきである。又仕事の如何に拘らず、教師自身が優秀のものでないと、學校を好まないやうになる。牢獄の如き家庭及び學校に在る子供は、動もすればそこを脱して自由の天地に翔翹せんとする傾向を現すものである。

人類學的社會學的に研究した結果も中々参考になる。怠惰兒童の身長はあまり高くない、體重も少い、強くもない、同年齡の平均體質に比して少しく落ちる。怠惰者は社會化されて居ない兒童に多く、随つて多くは、長子か末子か、若しくは一人子である。怠惰兒童の六割五分は家庭の不完全なものであつたといふことである。家庭の勢力が弱く、遺傳も不良であるといふと、社會的勢力の弱いにつけ込んで、移住本能の如き原始的の衝動が現れて来る。殊に家庭の勢力の貧弱なる上に學校の状態が不良であると、怠惰及び家出は殆ど免れることが出来ぬといつてよい。

四、**教育と移住本能** この移住本能の教育的處分については、二つのことを考へなければならぬ。(一)子供は新しい世界を見、旅行を試みようとする欲望を自然にもつて居るのであるから、それはなるべく學校及び家庭で満足せしめてやらなければならぬ。教授の方法の如きも、絶えず戸外の仕事を多くするやうに工夫して、この欲望に副はしめるがよい。元來世界の大部分は教室の外にある。教室外にある世界を切りくづして教室で見せるよりは、兒童を教室外につれ出し

て世界を見せるやうにするが至當である。自然界も、工作物も、政治の機關も、人の活動も、すべて教室の外に出て見た時に、始めて活きた智識を得ることが出来るのである。かくの如くこれ等のことを研究するために兒童を校外に連れ出す一方には、教室の内でする仕事の材料を校外に仰がなければならぬ。例へば地理(郷土)教授の如きも、まづ校外に出でその附近を跋涉せしめ、その地理、即ち山川・森林等の所在を明らかにせしめ、それを教室内で地圖にかゝせるやうにすれば、その本能をよほどまで満足せしめて、悪い傾向を防ぐことが出来る。理科の教授に於ても同じやうな工夫を試みる事が出来る。(二)家庭及び學校に於ては、成るべくその社會的方面の催しを盛にして、それ以上子供に移動の慾を起させないやうにしなければならぬ。即ち學校と家庭とが中心となつて、子供はその周圍で活動するやうにせねばならぬ。但し十分に子供の本能に満足と與へるやうにしむけないと、子供はその軌道を脱して、家庭學校を離れ、一度現れては二度と返らぬ慧星のやうに、遠い遠い漂浪の旅に出かけてしまふ危険がある。

要するに、學校及び家庭に於て、子供の長ずるに従ひ、種々の本能の次ぎ／＼に現れることを熟知して、それを適當に働かせて行くだけの注意を怠らなかつたならば、以上の如き危険より免れることが出来ると思ふ。

第三節 性的本能(異性の愛又は戀愛)

種族の保存は性的本能によつて始めて遂げられるといふことが出来る。生物學者の説くところによると、吾人の肉體は死んでも、生殖質は不死である。胚にまだ何の器官も出来てゐない時分から、生殖細胞だけは他の細胞から分れて獨立してしまふのであるから、生命の火はこの生殖細胞の中に宿つて代々傳はつて行くのである。榮養を求める機能が個體を保存せしめる根本動機であるならば、異性を求める本能は種族を保存せしめる根本動機であらう。餌と愛と、この生と性との二つの本能が緯となり經となつて、人生といふ複雑なる舞臺面を織り出してゐる。就中性的本能は種々の形を以て種々の方面に現れて来るから、その最初の發達から順次に研究してかゝらねばならぬ。

性的本能の發達する順序は、最近に至つて始めてその真相が明らかになりつゝある。しかも尙種々の點に關して意見の一致しないものが多い。これは今迄性に關することゝしいへば、恥かしいことゝして、ひたかくしにかくするのが一般の風習であつたのと、子供の性慾の發達を觀察することが困難であつたのとに原因してゐる。一般の人はいはゆる「年頃」になると、突然性慾が發生

するものゝやうに考へてゐるけれども、それは根本的に誤つてゐる。青年期になつて身體が成熟した上でなければ、性的本能は働かないと考へるのは大なる誤りである。モルによればこの考へには二つの誤りが潜んでゐる。第一、身體は普通青年期よりも以前に成熟を遂げるもので、第二、まだ身體は成熟せずとも、性的衝動は存在し得るものである。無論幼児には嚴密なる意味の生殖本能は存在してゐないけれども、廣い意味の性的傾向は幼い時からあつて、それが次第に集中されて生殖本能となるのである。故に青年期になつて今迄になかつた本能が突然發生するものではない。この點を最も明らかに力説したのはフロイドである。

一、子供の性慾 フロイドのいはゆる「性的」又は「性慾」が廣い意味に用ひられてゐることは、第九章に述べた通りであるが、氏の説によると、子供は生れる時から性の衝動も活動も具へて居る。大人の性慾はつまりこの中から種々の階段を経て發達して來たものである。よく子供の生活を觀察して見ると、到る處に性の活動の現れて居ることを知り得るであらう。勿論その頃はまだ生殖のことには關係するに至らないけれども、極幼少の頃、早きは三四歳の頃からして異性に對する愛情の存することは、早くから學者の認めて居つたことである。

さて子供の性的衝動の現れ方は極めて複雑である。これを分析して見ると、種々の要素に分け

ることが出来る。(一)まづ各種の感覚が子供に快感を與へる。これは種々の點から見て性的の快感であることが分かる。就中身體の中で最も皮膚の鋭敏なる部分殊に表皮と粘膜との境を興奮せしめることが、子供に著しく性的の快感を與へる。例へば生殖器は勿論のこと、直腸や尿道口や皮膚その他の感覺面に自ら刺激を與へて快感をとるのである。この種の性的生活はたゞ自體の満足を求めるのであつて、對手と關係することを必要としないからして、エリスはこれを「自己色情」と名づけた。唇・耳・鼻・肛門等はしばしば兒童の自己色情を充たす局部として利用される。殊に肛門部に於てこの種の快感を起すことを覺えると、故意に便通を耐へて、脱糞の際の粘膜刺激を喜ぶやうな惡癖を生ずるに至る。かくの如く特に性的快感を生ずる部分を「色情帶」と名づけた。子供が母の乳房を吸ひ、又拇指を吸ふなども、この色情帶を興奮せしめて満足する適例である。この現象を始めて科學上から觀察した人は、ブタベストの小兒科醫リンドネルであるが、氏はこれを以て性的の満足であると解し、これがもつと高等なる他の性的満足に變形して行くことを詳しく論じた。かくの如く、直接生殖を司るものは無論生殖器であるけれども、之と同様の快感を起す部分は必ずしも生殖器だけに限らない。(二)次ぎに對手として第二人者を必要とする性的快樂がある。この種の衝動は發動的と受動的といふ二つの相反した對をなして現れる。即ち

一方に於ては、他に苦痛を與へて快感を覺ゆるサディズムと、反對に他からいぢめられて快感を感じるマソヒズムとの一對があり、他の一方に於ては、見せて快感を感ずるのと、反對に見て快感を感ずるのがある。この見て快感を感ずる方からは知識に對する好奇心が發達し、見せて快感を感ずる方からは、藝術的及び劇的の情寫衝動が起つて来る。(三)その他、第二人者を必要とする性的生活は、すべて相手を選ぶといふ立場から見ることが出来る。併し子供の場合に於ては、性の相違といふことは大して必要ではない、すべての兒童は皆同性戀愛の傾向をもつて居るからである。

二、性的發達史 さて兒童の性的生活はかくの如く豊富ではあるが、各種の衝動の間には、何等の統一なく、地方分權的に各が獨立して快感を生じつゝある有様である。然るに子供が次第に生長するに隨ひ、各種の衝動の間に統一組織が出来て来る。故に發情期の終頃になると、殆ど性的の特質が一定して中央集權的になる。(一)まづ各衝動は生殖器帶を中心としてそこに隸屬するやうになる。隨つて性的生活は全部生殖の手段となり、眞の性慾活動を營まなければ十分満足が得られないやうになる。(二)一方には自己色情よりも相手の選擇の方が勝を占めて、愛する人を求めなければ、如何なる性的衝動にも満足を與へることが出来なくなる。併し從來兒童の生活に於て働いてゐたすべての衝動が悉く性的生活の完全に與るのではなく、發情期に達するに先ち、

或種の衝動は教育の力によつて烈しく抑壓せられ、その結果として羞恥とか嫌忌とか道德とかいふ如き精神現象が發達し、吾人の願望を抑壓して立番の役を勤めて居るのである。發情期にはひつて性慾が高潮して來ても、これ等の精神作用が立番をして居て、恣に衝動の活躍することを許さないのである。

病理學の示す所によると、すべての發達過程が少しでも抑止されたり遅らされたり又は不十分であつたりすると、それが病氣を起す原因となるものである。性慾の發達に於ても正にその通りである。如何なる個人に於ても、性慾の機能が何の妨害も受けずにスラ／＼と發達して行くことはない。随つてそのために異常なる點又は病氣の傾向を残すことが少くない。例へば發情期に達すると共に、すべての衝動が生殖器を中心として組織統一されてしまへば差支ないけれども、若しその中の一つが取残されて居ると、それが性慾の倒錯を起す原因となつて、性慾本來の目的以外に脱線することがある。前に述べた如く、相手の選擇作用が自己色情全部に打克ち得ないことがある。すると子供時代には兩性が同等の價值をもつて居るのであるから、この關係がそのまま繼續して、大人になつても同性戀愛の傾向を持續し、場合によつては病的になることさへあるのである。

三、性的生活に於ける子供と兩親との關係

以上子供の性的生活の身體的表出を主として述べたが、その精神的表出についても述べべきことが澤山ある。特に面白いのは子供が相手を選ばないふことである。これは初め養護の必要から生じたことであるが、子供と兩親との間に、性的の興奮を伴ふことは、否定することの出來ぬ事實である。子供は愛の相手として兩親又はその一方を選むものである。兩親が子供に對して示すやさしみの如きは、明らかに性的のものである。一般に父は娘を愛し、母は息子を愛するものである。子供はかくの如き境遇の下に成長する結果、男の子は父の位地に居つて母の愛を占有せんとし、女の子は母の位地に居つて父の愛を占有せんことを希ふに至る。而してかくの如き關係によつて兩親と子供の間に發生する感情、及びその結果として兒童相互の間に生ずる感情は、積極的にやさしいばかりでなく、消極的に邪魔になるものを(即ち男兒はその父を、女兒はその母を)害せんとする感情をも生ずるに至るのである。併しかくの如き感情は發生すると間もなく抑壓されてしまふけれども、吾人の無意識界に對しては著大なる影響を及すものである。男兒は母の愛のためには、父の存在が邪魔になるからこれを害せんとする希望をもつて居るけれども、それは種々の壓迫によつて抑へられてしまふといふのである。ギリシヤの古き傳説にシープスの王エヂボスが父と知らずして父を殺し、母と知らずしてこれ

と婚したことが傳へられて居るのは、幼時の願望が少しく形をかへて現れたのだと見ることが出来る。これはフロイドの「不倫説」といつて有名なものである。沙翁のハムレットもこれと同じ基礎より生じた物語であつて、エヂボスほど露骨でないだけである。幼時、かくの如き願望がまだ十分に抑壓されて居ない時には、子供はどこから生れるかといふやうな問題について研究を始め、自分の見解から演繹してその真相につき様々の想像を廻らすことは驚くほどである。通常かくの如き研究の興味が起るのは、新に自分の弟妹即ち新しい競争者が生れてその安寧を脅すのが原因で、始めはこれを敵視するより外はない。かくて子供は子供相當に性慾に關する思想をまとめ、男にも女にも同じ男性生殖器があつて、食事によつて妊娠し肛門から生れると考へ、又性交は一種の征服である、いぢめることであるといふ風に獨りじめに解釋して居るのである。

併し子供の性的組織は未だ不完全ではあるし、女子生殖器の秘密を知るに及んでは、従来自己の加へてをたつた解釋に缺陷の存することを悟り、そのため子供は研究を中斷するやうになる。けれどもこの時代の研究及びそれによつて得られたる思想は、子供の性格を構成する上に極めて大切なもので、後來精神病に罹るときはその内容にも重大の關係をもつて居る。

子供が両親を以て初回の愛の對手とすることは、當然免れぬことである。併しながら子供の性

慾は永く両親の上に留つてゐないで、早晚それから離れる時期が来る。これも亦當然来るべき運命である。抑壓作用が各種の性慾衝動に働いてその中から選擇を行つて居る時、又今迄この抑壓作用の材料を供給して居つた両親の影響が減少して来る時には、教育の任は益々重くなつて来るのであるが、惜い哉今日の教育はこの任務を知的に經濟的に解釋することを知らないで居る。

四、子供と大人、男子と女子の性的生活 まづ大人と子供とを比べて見ると、主として異なる點が三つある。(一)その經驗する快感が違ふ。(二)子供は必ずしも對手の人を必要としない、即ち自己色情的である。(三)子供は大人に比して快感を得る淵源が多い、その代り快感を得る方法が大人のやうに分化して居ない。然るに發情期に入るに及んで、これ等の點に重大なる變化が起つて来る。今迄は機械的その他の興奮が子供の慾望に満足を與へて居つたけれども、發情期に入ると共に、緊張の感情を経験するため、その中に不快を含むやうになる。即ちこれ等の興奮は單に前快たるに止まり、この前快が更に活動を促し、緊張が弛むことによつて終快を生ずるやうになる。性慾の對手たる異性は次第に判然となり、重大の意義をもつやうになつて来る、最後に興奮の生ずる淵源は特に解剖上一局部に限局されるやうになる。これは附屬的の快感が右に述べたやうな風にして段々抑壓されてしまふからである。

女子の性的發達を男子のに比べて見ると、二つの特色をもつて居る。婦人が男子に比して精神病に罹り易いのは蓋しこれがためである。その特色といふのは、(一)子供の性的活動は何れかといへば男性的の性質を帯びて居る。故に男兒が發情期に達した時には何事もないが、女兒が發情期に達すると、よほど同性に對する性的傾向を抑へなければならぬ必要が起つて来る。(二)次ぎに發情期に入ると同時に、色情を生ずる部分に移動が行はれる。然るに男子にはこの事がない。かくの如く婦人の場合に於ては、男子の場合よりも發情期に於ける變化が著しいため、發達に錯誤を來たし易いのである。

子供の性的思想は思つたよりもその範圍が廣く、而も重大である。普通三四歳になると、性に關する疑問が起り始めるが、之に對する両親の答辯は常に不十分である。世人は親の與へる苦しまぎれの説明をすぐに信するやうに思つて居るけれども、子供は決してそれを信じない。そこでこの時分からそろ／＼両親に頼ることをやめ、自分の氣に入るやうに種々の説明を下し理窟をつけて、自己の世界を構成するやうになる。その理窟なるものが案外、眞理を含んで居つて、後來の生活に重大なる意義をもつて居る。然るに右に述べたやうな壓迫と共に、これ等の幼時の理窟に對しても抑壓が行はれ、従つて忘却されてしまふ。通常五歳から十歳までは潜在の時期であつ

て、昇華の活動が最も十分に行はれる。成人後に至るまでも残つて居る性的思想の記憶は、概ねこの期の終り頃に始つたもので、それ以前の幼兒の思想は全く忘れられてしまふ。總じて幼少の折、両親及びその他の家族に關して、性的の空想を逞うすることは屢あることで、それが成人後の生活を支配することは少からぬものである。

以上は子供の性的發達に關するフロイド派の意見であるが、發情期に達し、性的本能が狹義の生殖本能となつてから後の研究は性の心理學に屬することであるから、こゝでは省略に従ふこととする。とにかく子供の性的生活は他の本能と同じく、極幼少の時から始まるといふことは、近世兒童研究の齎らした大切な貢獻の一つである。

第四節 養護本能(親子の愛又は愛憐)

一、動物の養護本能 性的本能の直接目的とするところは子孫の産出にあるが、養護本能は生れた子供を養育して獨立せしめるまでに必要な行動を營むことを目的として居る。この本能は主として母親に現れるものであつて、高等の動物には殆どすべてに共通して存在して居る。魚の如き下等の動物になると、一時に數萬の卵を産むが、産んだまゝに放置して顧みないから、大多

数は他の魚類の餌になつてしまひ、成熟するのは極少数である。動物が高等になるに従つて卵又は産兒の数は次第に少くなり、その代り母親は之を養護して成熟せしめるのである。その中でも下等なものにあつては、單に卵を身體につけて物質的の保護を與へるだけに止まるが、少し進むと親の行動を本能的に順應せしめて産兒を保護するやうになる。魚類の中でも、粗末な巢の中に卵を産み、他の魚がそれをとりに來ると追ひ拂つて監視してゐるものがある。この程度以上に進むと、産兒の保護はよほど心理的となり、親の行動に著しい變化を來すと共に、産兒保護の期間が次第に長くなつて來る。最高の階段に達すると、一人の女性が一兒又は二兒を産み、之に十分の保護を與へて成熟せしめるやうになる。是に於てか種の繁殖は性の本能によつて行はれ、種の維持は主として養護本能によつて行はれることになる。かういふ程度の動物に於ては、産兒を保護して繁榮せしめることは、母親の専務であつて、母は之のために全力を捧げ、貧乏も苦痛も死をも敢へて辭しないやうになる。

二、女子の養護本能と男子の養護本能 自然の目的とするところは、種族の繁殖であるから、自己保存の本能も生殖の本能もすべて子孫を繁榮せしめる一つの手段に過ぎない。故に養護本能は時として非常に優勢なものとなつて、他の本能を凌駕することさへある。子故に迷ふ親心で、

子のためには、何物を犠牲にしてもやまない程である。猿の一種に、母親がその子を一方の腕にだいたまゝ數個月間少しも離さないでゐるのがあるといふことである。人間の場合に於ては、多少知識化されてゐるけれども、その強盛なることは他の動物に劣らない。子故に迷ふ母親の憐れな情緒を劇化したもの、例へば角田川、三井寺などの如きものゝ少くないのに徴しても察する事が出来る。人類が繁榮して永續して行くのは、蓋しこの本能が存在するためであらう。人類の存在する限り、將來も益この本能は強くなつて行くであらう。

動物の生活を見るに、主として養護本能をもつてゐるのは、女性だけである。故に養護本能のことを一名母の本能ともいふのである。犬の如きを見てもわかるが、産兒の養護に當るものは雌だけで、雄は少しも之を顧みない。人間について見ても、子に迷つて大道を狂ひあるくものは女に限られてゐるやうであるが、併し、人間の社會に於ては、母のみならず、父も共力して、子供の養護に當つてゐるのが普通である。勿論母親の方が強大なる養護本能をもつてゐることは明らかであつて、その反應の仕方も父と母とは趣きを異にして來てゐるけれども、文明の進むと共に、男性にも養護本能が発達して兩者の差異が次第に減少しつゝあることは明らかである。マクヂウガルの實見によれば、首狩りの好きな悍猛なるボルネオ人でさへ、家にゐるときは一日子供を抱

へて愛してゐたといふことである。故に男性に養護本能が発達してから可なり長い年月が経つてゐるのである。

人間の社會にも母親だけに養護本能があつた時代があるとすれば、それはよほど古い時代のことであらう。即ち男は常にあちこちを浮浪して歩いてゐて、行く先々で出會ふ女と一時的の夫婦關係を結んで又放浪して歩いた。女は子を産むといふ仕事をもつてゐるために、男のやうに放浪することなく、比較的定住する傾向をもつてゐるに相違ない。その結果、女は財産を作り、之を子に傳へるやうになつた。即ちこの時代には女子のみに養護本能があつて、男子はたゞ行く先で性交を結ぶのみで、子に對する愛情はなかつたのである。すべてが母系的で、父は認められなかつた時代である。然るに女子は一個所に定住する結果、次第に愛他的の感情を發達すると共に、生殖行爲と出産との因果關係を了解し、男子を自分の傍におくやうになり、こゝに始めて男子も幾分か野性を脱して、女子と同棲し、子供を愛するやうになつて來た。而して又これが家庭の初めであつた。換言すれば、生殖本能は男子に強く、女子に弱く、之に反して養護本能は女子に強く男子に弱いのである。即ち最初は女の手一つで子供を育てゝゐたのであるが、今迄少しも參與しなかつた男子が途中から加はつて來て、その仕事を分擔するやうになつたのである。而し

て男子は體力に於て勝つてゐる結果、主として外敵を防ぐこと、今日の語でいへば軍事を引受けてゐた。然るに更に文明の程度が進んで外敵の防禦に全力を注ぐ必要がなくなると、今まで女子の引受けてゐた生計上の仕事の中で比較的力のいる仕事を分擔するやうになり、大體に於て男女の生活上の差異が少くなつた結果、女の専務であつた養護の本能までが男子の方にも發達するに至つたのであらう。

三、その發達と意義 養護本能の現れるのはその性質から見ても、發情期以後に屬することは明らかである。然しながらその萌芽とも見るべきものはもつと早くから現れる。例へば幼兒の形遊びの如きは或意味に於てこの本能の早くから出現したものと見ることが出来る。併しながら、子供の形遊びの中には、養護本能以外に他の種々なる傾向を含んでゐるから、外形が養護本能に似てゐるからといつて、必ずしもその早期出現と見ることが出来ない。

他の本能はすべて自己中心であつたけれども、この養護本能に至つて始めて愛他的の分子が含まれて來る。自分の利益を犠牲にしても、自分以外のものゝために盡すといふ傾向は、養護本能に於て始めて見るところである。この心持が擴張されて家族を愛する心となり、村を愛し國を愛し、全人類を愛するの心となるに至る。故に利他的精神の發生する萌芽として、養護本能は人類

の向上發展の上に、至大の關係を有するものである。社會的本能の中に數へらるゝ同情・献身等の諸徳もその根元を養護本能に發してゐる。この點からいへば、養護本能の元來の持主である女性は、今日世界の人が理想としてゐる人間性を、より多くもつてゐるといはなければならぬ。而して外敵に對して争闘することを専務としてゐた男性は、よく多くの野性をもつてゐるのであらう。今日、國際聯盟の力によつて戦争絶滅永久平和の企てられてゐるのを見ると、人道化は即ち女性化を意味するのである。

四、親に對する子の愛情　養護本能は一名親子の愛情と名づけられてゐるが、その實は子に對する親(特に母親)の愛情であつて、それに比べると、親に對する子の愛情はよほどその力が弱いやうである。即ち親子の愛は相互的のものではなく、寧ろ片側的のものである。これは生物學的に見て當に然るべきことで、種族を保存するためには、産みの親が全身の愛を捧げて、我子の養育に任ずることは必要であるが、子が親に對する愛情は種族保存上さほどの必要はないのである。川柳に「親故に迷うては出ぬ物狂ひ」とあるは、子故に氣を狂はせて迷ひ歩く親はあるが、親を失つて迷ひ出る子はないことを道破したのである。之を實踐道德の方から見ても、その關係は極めて明らかである。親に對して愛をもたなければならぬといふ教へは澤山ある。殊に東洋に於ては

孝といふ徳目の下に頻りに獎勵せられ、孝の道を守らぬものは人非人としてある。これは即ち孝が本能として人間に與へられて居ない、否寧ろその勢力が極めて弱いといふことを語るものである。之に對して、親はその子を受せざるべからずといふ教へはどの國にもない。その愛情は極めて有力なる本能として豊かに與へられてゐるから、特に道德として獎勵する必要がないからであらう。寧ろ現在我が子を手にかけても、涙一つこほさぬのを道德としてゐる位である。

親の方から見ると、自分はいかゞまでして、子の養護のために心身を勞してゐるのに、子はそれに報いるだけの愛情を表して來ない。そこで孝といふやうな徳目の下に、親に對する子の奉仕を様々の形に於て要求することになつたのであらうと思ふ。併し子を思ふ親の心といふものは、修身訓話で幾度孝行の話の聞いても、所詮體驗することは出來ない。結局自ら親になつて見た時に初めて子を思ふ心持ちがわかる。「子をもつて知る親の恩」といふ言葉は、こゝの關係をよくいひ表してゐる。

さりながら、子に對する養護本能は種々の原因によつて或は減退し或は一時消失することがある。それは本書の初めに、古代の人々が兒童を大切にしなかつた例を述べたのに徴しても明らかである。養護本能は如何に強くとも、一方に自己保存の本能が更に強く働けば、養護本能が負け

てしまふこともある譯である。「子を棄つる藪はあれども、身を棄つる藪なし。」といふ諺の如く、自己の生命に關する場合には、時として自己の子孫をも犠牲にすることがあるのである。又養護本能は強大であつても、元來が盲目的のものであるから、理智の光に照されない限りは、その行動の様式が却つて子供の將來のために不利益なことが少くない。例へば溺愛の如き、養護本能の最も強烈なる表出であるが、教育上から見ると、甚だ當を得ぬ教育法である。ドイツでは之を猿の愛と稱して、盲目的・無計畫的の愛の不利益なることを痛罵してゐる。この點からいふと、親孝行に對して、新しい意味の子孝行を新道徳として奨励する必要がある。今日の如く周囲の境遇が變化して來た時代に於ては、到底遺傳的の養護本能だけに任せておいては、完全なる教育は出來ない。必ずや之に適當なる指導を與へて、合理的のものにしなければならぬ。

第十二章 社會的本能

自己保存と種族保存との二種の本能を認めれば、すべての本能をこの二つのいづれかに編入せしめることが出来る筈である。或はすべての本能を二分して個人的と社會的との二つに分けることも出来る筈である。こゝに社會的本能として述べんとするものは、種族保存の本能として説明しても差支ないのであるが、直接種族保存を目的とする本能が基礎となつて發達したもので、主として生物が社會生活を營む必要に應ずる本能であるから、暫く之を社會的本能と名づけるのである。

第一節 獨居本能(羞恥)と群居本能(社交性)

自己保存の本能の中で、排斥・逃走は事物より遠ざからうとする消極的の傾向であり、争闘は事

物に向つて挑戦せんとする積極的の傾向である。之と同じ意味に於て個人が他の個人又は社會に對する態度にも消極的と積極的との二つを區別することが出来る。

一、獨居本能(羞恥) 人間が他の個人又は社會に對したときに、對手の個人又は社會が如何なる態度をとるに拘らず、之を避けて獨居せんとする傾向の存することは、争はれぬ事實である。この反應に相當する情緒を求めたならば、恐らく羞恥であらう。幼兒が見慣れぬ人を見てそれを避けようとするいはゆる「人見知り」はその性質がよほど恐怖に近いけれども、恐怖と稱するほどに著しいものではない。又人見知りもさう長く續くものではない。二三歳になると新に「きまりわるがる」傾向を現し、來客などの前には決して出ようとせず、それを避けつゝ尙覗いて見ようとする興味を失はない時代がある。近づきたいけれども、それを敢へてするだけに我を忘れることが出来ないのである。十歳前後に一時羞恥の情が減退して割に平靜な生活に入る時代があるが、青年期にはひると共に、羞恥の情はまた急に高まつて來る。これは男女共にさうであるが、女子に於て特に著しく現れる。生物學的にいへば、女性が羞恥の情に驅られて、男性より遠からうとすることが却つて男性の性的本能を興奮せしめることになるのである。併しさういふ意味を離れても、人間の一生を通じてこの本能は多少とも働くもので、吾人が多數の聴衆の前に立つたとき

一、多少の不安を禁じ得ないのはこの本能に基づくのであらう。

二、群居本能(社交性) 羞恥は他の個人又は社會に對する消極的の態度であるが、それにも増して強大なる傾向を現すのは、他の個人の存在に對しては積極的に満足怡樂の感を起し、他人の不在のためには不安不快の念を生ずることである。之を人間の社交性といひ、それに相當する反應を群居本能と名づける。動物に見るところの群居本能はよく人の知るところであるが、人類にも群居本能の存することは明らかである。「獨りほつち」といふことは人間の恐怖的の一つであり、大勢の仲間にはひるといふことは、それだけで一つの快樂である。かくの如く他の人と一緒にゐたいといふ慾は幼い時から子供に現れてゐる。子供を一人きりにしておく、よく泣き出す、大人が傍にゐるといふことが非常に嬉しけである。嬰兒期が過ぎると、今度は同年輩のもの仲間にならうとする欲望を生じて來る。大人でも獨居は愉快でない、子供でも傍にゐると、それによつて社交性を満足させるのである。人によつては浮世の風塵を避けて山中に獨居することを希望するものもあるけれども、それは人間の通性ではなくして、寧ろ變態に屬するのであらう。

未開時代に於ては食物を求め、相互に保護し合ふ必要上、是非共群居することが必要であつた。つまりこの本能の力によつて團體生活を營み、その結果、文明の進歩を來したのである。今日吾

人が團體をなしてゐるのは、相互の間に利害の共通する點があるからである。即ち利害が共通してゐるからこそ、一市の中、一國の中に團體をなして生活するやうになつたのである。この傾向が基礎となり、それに食を求め狩獵をなし、争闘を行ふ本能が加はれば、協同生活の發達するこゝとは易々たるものである。併しながら群居本能のために個人が相集り、群居を以て樂みとし、索居を以て不快となす心がなければ、いはゆる社會的の利害はよほど發達が遅れたであらうと思はれる。

マクヂウガルもいつてゐるやうに、勞働者達は僅かの休みを利用して、町からも村からも、人の集まつてゐるさうなところに出かけて来る。又同じ芝居を見るにしても、満員の時と空席半に上るときとは、見るものゝ興味が多大の違ひが存するであらう。併し氏の考へによると、今日の文明状態に於ては、この本能の發達が度に過ぎたやうである。人口が都會に集中する弊害や、海水浴場の不良なる風儀や、ストライキの蔓延など、皆その原因をこの本能の過度なる發達に歸することが出来る。

三、兒群 この本能は兒童の共同生活の發達と密接の關係を有するものである。この本能あるがために、兒童は切りに同年輩の仲間を要求するのである。この本能が學校又は家庭に於て適當

に満足されない場合には、色々の形に於てその満足を求めるやうになる。例へば兒群と稱するものゝ如きはその一例である。これは十歳乃至十五歳の兒童が團體を作つて市街を横行し種々の惡戯をなすものに名づけたのである。シールドンが質問紙法によつて集めた答案の数は一〇二二で、その中に列擧された會台の数は八六二に上つた。その中、一以上の團體に屬してゐる男兒が、六十四名もあつた。年齢は十歳から十七歳までゝあつた。八六二の中、報告の完全なものは、六二九であつたが、その中で、

	數	割合%
祕密をもつてゐるもの	二二三	三、五〇
社交クラブ(娛樂目的のもの)	二二八	四、二五
實業的のもの	五六	八、五〇
慈善的のもの	一〇	一、五〇
文學・藝術・音樂のクラブ	二八	四、二五
奪取を目的とする團體(移住・建築・狩獵・争闘・掠奪等を含む)	一〇五	一七、〇〇
體育競技のクラブ	三七九	六一、〇〇

次に團體を作るのは、幾歳の子供に多いかといふと、八歳の時に作られた團體の数が二八、九歳の時が四四、十歳の時が一八、十一歳の時が一五五、十二歳の時が一六四、十三歳の時が一八八、この後は次第に下つて十四歳は九〇、十五歳は八〇、十六歳は三四、十七歳は一になつてゐる。故に最も多く團體を作る年は十一、二、三歳の時であることがわかる。以上の統計を總括して見ると、

(一) 集會の最も盛な時期は十歳と十五歳との間で、全體の八七%まではこの時期に屬してゐる。十歳以前に屬するものは七%、十七歳以後に屬するものは僅に一%に過ぎない。これは青年期になると社會的の傾向が増すためであつて、今一つは元からの團體が存續してゐると、大人の作つてやつた集會が殖えて來るためである。

(二) 各年齢を通じて身體運動を主とするものが大部分を占めてゐる。

(三) 文學藝術及び慈善を主とする團體は極めて少い。

(四) 體育に關する興味は、八歳から十三歳にかけて大に増加するが、その後は急に減退する。之に反して文學に關する興味は大人に近づくと共に次第に増して行く。奪取團は十一歳で頂上に達し、その以後は段々に減少する。

(五) 女兒と男子とが共に團體を組織するやうなことは少い。團體上の興味は、男女によつて大抵異なつてゐる。

次にパッファ―は調査の結果、男兒四人の中、三人は兒群に屬するといつて差支ない。會てこの種の兒群に屬したことがないと答へたものは、十三歳兒に於て二十一%、十二歳兒に於て二十六%に過ぎなかつたといふことである。これが他の不良なる傾向と相協同するに至れば、則ち不良少年團となるのである。要するに教育者としては、兒童の生來傾向として群居的社會的の要求の存することを認めて之を善導するやうに考へなければならぬ。この傾向を無視し若しくは抑壓しようとする、種々の弊害が起つて來る。殊に學校における兒童の仕事はこの本能を働かすやうに組立てられてゐないことが多いからして、兒童は學校に於ける生活に不満を感じ、學校を去つて街頭における自由なる放縱の生活を欲するに至るのである。學校運動場問題・兒童の自治制度・校舎の開放・教授法の改善にして着々實行されるやうになれば、この本能にも満足を與へることが出来るやうになるであらう。

第二節 自卑本能(卑下)と誇示本能(得意)

一、自卑本能(卑下) 自卑と誇示との二本能は、羞恥と社交性との二本能と同じく、互に對をなした本能であつて、一は消極的、一は積極的である。リボーは前者を消極的自我感情と名づけ、後者を積極的自我感情と名づけたが、この二つの本能は他の本能の如くあまり學者の注意を惹かなかつた。マクヂウガルは之に自卑及び誇示といふ名を附して可なり重要な位置を與へた。

動物に於て最も明瞭に自卑本能の現れる例としては、小犬が犬に會つた場合を擧げることが出来る。脚を曲げ腹を地にすりつけ、背を丸くし、頭を下げ、尾は兩脚の間に垂れ、身體を少しく一方に傾け、すべて服従卑下の形をとつて犬の方に近づいて行く。

兒童がこの情緒を現す場合には、往々恐怖と混同されることがある。併し子供が母親の膝の上にいるながら、眼だけを他人の方に向けて見やつてゐる形(挿繪参照)は、決して恐怖の表現ではない。又精神病者の中にもこの本能が著しく現れるところを見ると、この傾向が生來の原始的のものであるといふことがわかる。

二、誇示本能(得意) 誇示は自卑の反對であつて、群居動物の高等なるものに見る本能である。殊に交尾期に於ては、その傾向が著しいやうである。哺乳類の中で、最も明らかに誇示の傾向を現すものは馬であらう。中間の前を通るときなどには、全身の筋肉を緊張させ、直立して首を曲げ

尾を上げ、動作が活潑になり、殊更に蹄を高く上げる。又動物の中には、かういふ場合に用ふるために、特に誇示の器官を具へてゐるものがある。鳥の如きはその著しきもので、孔雀の尾や鳩の胸などは皆誇示の器官である。元來この本能は他の同類に對して現す社會的の本能であるからして、獨居の際には現れない。一般の人は、かくの如き誇示本能は自慢から出るものと考へ



圖 一 十 二 第

子と母 筆ハバルウカ トスアツツリフ

「孔雀の自慢」とさへいはれてゐるけれども、本當の意味の自慢には自我意識の存在を必要とするから、孔雀などの場合に、自慢といふ言葉は用ひられない。併し自慢はこの本能が元となつて發達して來ることは明らかである。

子供にも誇示本能は著しく現れる。すべて他人の前で、自己の力量を現して、それを見せびらかし、他人をしてそれを嘉納せしめようとする傾向は本能的のものである。子供が歩き始め、話

し始めに、その成功を誇つて、同一の所作を繰返すのも、青年が肩を聳やかして横行闊歩するの
も、年頃の娘が着飾つて人中に出るのも、大人が職業に全力を盡すのも、軍人が帶劍をガチャツ
かせ、役人が位階勲等をふりまはすのも、つまり誇示によつて、社會の承認を得んとするのであ
る。併しこの誇示本能も年齢と共に次第に變遷して行く。誇示する事柄も、誇示の對手も次第に
變化し、それに經驗が加はると共に、當初粗笨であつた反應も次第に變つて行く。初めは、何か
新しいことや新語や新動作を覺えると、それを誇示する。兒童期においては、物質的の熟練とか
力などが主として誇示される。この期の終りになると、諸藝に關して誇示することが盛に行はれ、
それに伴なうて競争が盛に行はれる。青年期になると、知的道德的のことも誇示されるやうにな
る。それから誇示することによつて承認を受けたいと思ふ相手の人もいろ／＼に變つて行く。初
めは、家族中で一番縁の近い人即ち母の承認を得ようとする。學校にはひると先生の意見が最も
尊重される結果、誇示の相手は先生になつて来る。先生！先生！といつて手を舉げる兒童の誇ら
しけな有様はよく人の知るところであらう。兒童期から青年期へかけては、兒群的の傾向が著し
くなるために、仲間の意見が有力となり、従つて仲間に対する誇示が多くなつて来る。若し英雄崇
拜熱があれば、他の人の意見に反對しても、只管その崇拜的たる英雄の嘉納を得ようとする。

更に大人になると、友人・知己及び社會全體の承認を得ようとする。

男でも女でも、すべて社會の在來の慣習傳説に従つて生活し、別に飛びはなれたことをせず
ゐるのは、偏に社會の承認を得たいため、社會の非認を恐れるためである。着流しが一番樂であ
るにも拘らず、態々窮屈なる羽織袴をつけるのは何のためであるか、これも社會の非難を恐れる
からである。ソルンダイクもいつてゐるやうに、祝儀又は茶代を出す習慣は恐らく初めは深切の
心からと、自己の利益のためとから始まつたものであらうと思ふけれども、今日では、更にその
必要がない場合に於ても、それをやらない譯には行かないやうになつてゐる。「祝儀も呉れなかつ
た」と思はれるその一瞬間がいやさに、必要のないものをも出すのである。故に社會の思はくを
顧慮する傾向は案外に強いもので、單に正面の理由のみからは推して行けぬことが多い。若し社
會の輿論を顧みるといふ心がなかつたならば、人間は單に法律に觸れない程度に行動するに止ま
つて、大なる道德上の進歩は望まれなくなるであらう。學校は須らくこの根本的本能を適當に培
養して、社會的の輿論を尊重する精神を發達せしめなければならぬ。

第三節 同情及び獻身

一、同情 同情は本能として特殊の性質をもつてゐない、その反應の形式からいつても極めて一般のものである。マクヂウガルの如きは、之を本能の中に加へないで、一般の生得傾向と稱してゐる位である。同情とは文字の示す通り、他人と同一の感情をもつことで、一般の用法では他人の困難なる境遇に對して同感することをいふやうになつてゐるが、他人の愉快なる状態に對して同感するのもやはり同情である。その最も簡單なる場合は、動物の一つが何物にか驚いて叫聲を發すると、他の動物もそれに和して騒ぎ出すことである。一犬虚に吠ゆれば萬犬之に和する。子供でも他の子供が泣き出せば貰ひ泣きをする。大人が笑顔をすれば子供も笑みを含む。即ち嬰兒にあつては、他人の精神状態が直に影響して、その感情が變つて行くのである。かくの如き同情は之を反射的同情と名づけ、少しも道德的の性質を有しない、全く機械的のものであるが、これが將來發達すべき本當の意識的同情の基礎となるものである。

この外一歳乃至四歳の間に偽同情とも稱すべきものが發達する。人形や機關車が壊れたり、花が破れたりすると、俄に泣き出す場合がそれである。これは恐らく二つの理由に基づくのであらう。第一、この時分の子供は未だ自我の意識が十分に發達してゐない、自己の身體の諸部分と自我との區別が十分につかない。着物でも玩具でも、何でも自分の好きなものは、自己の一部に

してしまふから、それが壊れると、恰かも自己の身體が怪我をしたときの如くに感するのである。尤もこれもその初めは意識的に擬人してゐるのではない、まだ自己と自己以外の分化が行はれてゐないのである。第二は、両親や乳母が子供の玩具を生物扱ひにして、お人形さんが落ちて怪我をしましたとか、玩具が壊れて痛いでせうといふ風ないひ方をするために、子供もさういふいひ方を覚えてこの種の同情となるのである。これは無生物を心あるものと見ての同情であるから、アニミズム的同情とも稱することが出来る。花や種子や風や雨などの自然現象に對して、子供と同じやうな感情をもつのは、やはりこの種の同情に屬するのである。

眞の同情が發達するためには、他人の境地に對して敏感で、それを理解し、自分をその人の地位におき、それを助けるに必要な事を行ふだけの能力がなくてはならぬ。然るに他人の境地を感じてそれを理解するためには、自分もそれと同じやうな經驗をしてゐることが必要である。又自分を他人の位置において、他人と共に喜び、他人と共に憂ふるためには、想像の働きも必要である。子供が動物を残酷に取扱ふのは、主として好奇などの他の本能が強いためでもあるし、又動物の身になつて考へて見るだけの想像の力に缺けてゐるためである。又子供が大人の喜び、大人の悲みに同情し得ないのは、經驗の不足に原因してゐる。又他人に同情するためには、經驗と

想像との外、他人に興味をもつことも必要である。大人に同情の缺けてゐるのは、その人の興味
が他人に及ばず、偏狭にして利己的なるがためである。

この本能は恐らく子に對する養護本能が元で、それが變形して次第に他人にまで及んで來たも
のであらう。本能の大部分は利己的であるのに、養護本能のみは利他的であるから、今日人類の
行ふ愛他的の行動はすべて子に對する母の愛から發達して來たものと考へない譯にはいかぬ。併
し養護本能のみでは却つて偏狭で利己的になり易い、この本能の存在する一方には、人間に對し
て注意する傾向と、他人の幸福な満足の様子を見て安心する傾向とがある。これ等の傾向が相集
つて同情といふ本能の發達を見るに至つたのであらう。この點が又人間と動物との異なるところ
であらう。動物の中には自己の子孫のために、死を辭せずして保護の任に當るものはある。併し
一般社會のために、同情する態度は、人間に於て始めて見るところの現象である。これ献身的行
動が動物界になくして人間界のみある所以である。

二、献身 群居動物の中には、その群居團が攻撃を受けたとき、それに對して献身的行動に出
づるものがある。例へば雄鹿は雌や子供を中にして輪を作り、自己の生命を犠牲にして敵と争ふ
といふことである。併しながらこれ等は種族保存の本能のやゝ擴張されたもので、眞の献身的行

動とはいへない。人間に於ては、種族保存の本能が家族より近親へ、近親より一族へ、一族より
村へ、村より國へといふ風に次第に擴張されて行き、今ではかなり大なる團體のためにも、自己
を犠牲にするやうになつて來た。一方宗教又は學術上の團體、職業上の團體も次第に廣くなつて
來て、それ々の仲間に對して同情が働くやうになつて來た。すべて共通の理想とするところが
あつて、一方にそれに反對するものがあれば、前者は一つの團體を作り、團體内のもは互に同
情し合ふことになる。故に立場が違へば互に敵ともなり味方ともなる。政黨の上からは互に政敵
であるが、血縁の上では一族であり、盆栽の趣味の上からは、同好であるといふやうな交叉した
關係は到る處に見られる。かくの如く種々の團體を作り、それに伴ふ感情をもつことによつて
社會の組織が全うされて行くのである。この團體が一番廣くなると、國際聯盟のやうに世界の人
類全部を覆ふやうになり、大なる文明の進歩が見られるのである。その一定團體内の人に對して
或行動を營むとき、始めて本能であることがわかる。而してその團體の廣狭内容如何などは、全
く教育と傳説とによつて定まるのである。相互に相知り、利益の共通する範圍が廣くなればなる
ほど、團體の中に含まれる個人の數も次第に殖えて、一國の範圍以上に擴張されて行く。然るに
一九一六年のやうな大規模の戦争があると、急にこの團體關係を一變せしめ、今迄は同情の紐に

よつて一緒に結びつけられてゐたものが、その埒外にほゞり出されることになる。例へばイギリスやフランスは學術の研究上ドイツの學者と事を共にして來たけれども、戦後はその學術研究の組合の中にはドイツを入れないといふことをいひ出して來た。文明の進歩と共に學術などには次第に國境がなくなつて來つゝあつたのに、人間の最も野蠻なる一面をさらけ出した戦争のために、文明は一大退歩をなさんとしつゝあるのである。又戦前は各國の社會主義者間に強大なる團結が出来てゐたけれども、戦争と共に、その團結は破られてしまつた。即ち團體の中の人に對して如何なる行動をとるか本能的の傾向であるが、その團體の範圍如何は教育と經驗とによつて定まることである。

第四節 模 倣

模倣といふ語は廣狹様々に用ひられる。之を最も廣い意味に用ひたのは、フランスのタードで、普通眞似といふ意味の外に、同情と暗示とをこめて之を模倣と稱した。蓋し暗示するといへば暗示を與へる側にしか用ひられない、暗示を受ける方をいひ表す動詞がほしいといふところから模倣といふ語を廣い意味に解し、模倣するといふのは、暗示を受ける作用全部の意味であると解し

たのである。併しながらもつと狭い意味の模倣は甲が乙の行動を眞似する場合だけを指してゐる。この意味の模倣は通常本能として取扱はれる。ジュームスも「この種の模倣性は人類並に他の群居動物に共通して存在するもので、最も充實した意味に於ての本能である」といつてゐる。之に反してマクデウガルは模倣を以て本能と見なさい。何故かといふと、模倣には特有の動作がない、又模倣行動に伴なふ主觀的狀態も千差萬別で、模倣する事柄に隨つて變ずるといふのである。氏は之と同じやうな理由によつて、同情と遊戲とこの模倣との三つは、本能と見なさず、特殊ならぬ一般的の生得傾向として取扱つた。ソルンダイクもいつてゐるやうに模倣的の傾向は、光線の射入に對して瞳孔を收縮する作用のやうに、純機械的に働くものとはいへない。恐らく他人の行動によつて、特殊の本能的反應が觀念及び衝動を生じ、それが經驗を重ねる中にその行動と相結合するに至つた結果であるとするべきものである。之を本能として取扱ふにしても、發達本能の中に數へるものもあり、社會的本能の中に加へるものもあるが、本書に於ては、便宜上後説に従ふことにした。

一、二種の模倣 一般に模倣といつてゐるものの中に、二種の區別がある。一は反射的の模倣と稱するもので、他人が泣いたり、笑つたり、走つたり、顔をとかめたり、あくびをしたりする

のを見て、知らず識らずそれを真似するのは、反射的機械的の模倣である。その一部は前に述べた反射的同情と全く同じものである。反射的同情は反射的模倣の中で、特に感情的側面の共鳴に名づけたものと解しても差支ない。即ちこの種の模倣はその性質がよほど特殊であつて、本能的のものであることが明らかである。他の一つは自發的又は隨意的と稱するもので、これは反射的模倣を基礎として發達するものではあるが、經驗の分子を含むことが多くなり、本能といふよりも意志的行動と稱した方がよくなつて来る。例へば外國語の發音を模倣するとか、書き方の手本を見て真似るとかいふ如きは既に本能ではなくして、意志行動である。その根基は本能的のものであらうと思ふけれども、よほど意志的の要素が多くなつて來てゐる。

二、模倣と學習 人類の生活に於て、模倣が極めて重大なる役目をもつてゐることは、明らかである。併しながら純本能的のものと思ふべきものは極めて少く、多くは學習作用と混交して來る。例へば子供が言語を覺えるのは、模倣によると一口にいつてしまふ。けれども本能的の模倣だけでは、言語の學習は出來ない。一定の目的を達して社會から承認されたときに、本能的に快感を覺え、更にそれを繰返さうとするので、言語は發達して行くのである。要するに、他人の發する音について本能的の快感を感じてそれを模倣しようとして試み、その結果稀に成功することが

あると、自分もそれに氣づくのみならず、社會がそれを嘉納し賞贊するので、子供は益々それを反復しようとするに至るのである。

かくの如く模倣には學習が行はれるもので、主として習慣的のものであるとすれば、經驗的要素が多いだけに、教育的勢力の及ぶことも亦大なる譯である。子供が仲間の行動を模倣するのは、つまり模倣することによつて一種の満足を得るからであつて、敢へて模倣せずにはゐられないからする譯ではない。子供が大人を真似、一國が他國を模するのと同じ理由である。隨つて集團的の生活を營む場合には、是非共模倣活動がなければ、社會を成立することが出來ない。いはゆる慣習とか傳説とかいふものは、つまりこの模倣によつて出來たものである。一般に世間並の通りに模倣して居れば、その事の善惡如何に拘らず、一般から承認されるけれども、世の中の慣習に背いたことをすると、その理由如何に拘らず、世間から笑はれ批難される。それ故大多數のものは、その社會の人のしたり考へたりする通りに、したり考へたりして世の中と迎合して行く。即ち郷に入つては郷に従ふのである。日本婦人は右衽するが西洋婦人は左衽する、これは社會の慣習に従つてゐるのである。この傾向は、衣服の如き些末な事柄ばかりでなく、政治上にも教育上にも、宗教上にも見ることが出來る。父が某に投票したから、自分もそれをまねる、家庭が佛教

だから自分も佛教といふことになり易い。この傾向が機械的になつて行くと、進歩はなくなつて、停滞を生じ、獨立創始去りて依頼と盲従と來る。かくの如き社會は舊慣を墨守する點に於て病膏盲に入つたのである。そこに一二の新しき思想家が現れば、舊慣に囚はれることの非を指摘し改造維新を要求するに至るのである。

三、人類の模倣的傾向と革新的傾向 (一)新しきを求むる心 人はすべて新しきを求める心をもつてゐる。これを他の言葉でいへば、動かんとする心である。元のまゝ靜かにしてゐたくない、動きたいといふ心である。然るに動くといふことは、動物の特質である。大體の點からいつて、動物と植物とは、運動の點に於て異なつてゐる。植物は靜止的で、その餓と生殖慾とを満足するためには、土中にあるもの、風雨によつて與へられるものに俟つの外はない。然るに動物は動く力をもつてゐるから、その食慾をみたすために、廣い區域をあさつて歩くことが出来る。

今鼠を或程度まで餓ゑしめて、之を食物箱の前におけば、箱の中の食物を得るまではあらゆる活躍を試みるであらう。又二十回に一度位しか成功せぬ迷路を作つて、その中に食物を入れておけば、鼠は幾多の試みの後にその食物を手に入れるであらう。又之を野に放てば、同じく大なる活動を起して逃げるであらう。

かくの如く動物の特色は運動にありといつてもよいのであるから、精神上の興味も亦運動によりて目的とする食又は色を追求するにある。昔の掠奪結婚は最も露骨にこの傾向を示してゐるものである。學問の研究の如きもやはりその本質はこの追求運動に外ならぬ。パスツールが初めて學問上の成功をしたのは結晶の研究であつたが、引きつゞきラセミ酸に興味を覺えるに至つた。

この酸は一八二〇年ケストネルが酒石酸を製造する際に偶然發生したものであるが、五十二年に不圖なくなつてしまつた。これは原料の酒石が違ふからだと思へ、各種の酒石を集めて研究したがわからない。この上は各國を遍歴して調査するの外はないと思ひ、政府に建言したが、顧みられなかつた。氏はとうとうがまんが出来ないでドイツにゆき、キーンにゆき、ブラーゲにゆき、遂にはトリエストにもいかう、金があらばイタリーにもいかうと決心して、遂にラセミ酸の製出に成功した。この場合の精神活動の雛形は鼠の迷路における活動と全く同じものである。要するに吾人の科學的研究も、一種の追求心であり新しき經驗を求めめる心である。この傾向は男性的で、突撃的で、之を人間の本能についていへば、憤怒とその性質を同うしてゐる。例へば猫が鼠をとる時の態度、力を以て異性を手に入れんとする時の態度の如きは、よほど憤怒に近いやうである。

(二)安きを求むる心 然るに元來人間は社會の一員として生活してゐるのであるから、追求的・

突撃的・探索的の傾向も之を無制限に發揮せしめることは出来ない。新しきを求める心は、憤怒の副産物といつてもよい位であるから、それが遠慮なく實現されると、社會の安寧を害ふ恐れがあるから、それを道徳上悪いこととして禁ずるやうになる。併し同じ性質の行爲でも、場合によつて善ともなり惡ともなる。例へば食物を得んがため、人を殺すことは極惡視せられるが、國家が食糧不足のため領土の擴張を必要とし、敵國民と戦つて血を流すことは、愛國的行動として賞讃される。かくの如く社會の安寧のために、人間の生來傾向に制限を加へたのが即ち道徳であり、この道徳に従つて事なかれと希ふ心は即ち安きを求める心である。

併しながら、かくの如くして出来上つた規則を道徳と名づければ、甚だ立派なものゝやうに思はれるけれども、それはその社會の各個人にさう考へられるだけで、その規則には實に變なことが多い。例へばインドに於ては、夫が死ぬと妻を焚き殺す、フィジー島では絞め殺す、それが規則になつてゐた。日本の切腹にも今日から考へて見ると、随分不合理なものがあつたが、當時はそれが武士間の道徳で、美事に切腹を遂行することが美德とされて居つた。社會全體が個人の行動を制限する力の如何に強大であるかは、これ等の例によつても知られる。

人間には常に新しきを求める革新的の傾向があるが、一方社會の規則に従つて安きを求めよう

とする模倣的傾向があるために、新しきを求める心はいつも壓迫されがちである。即ち兩者は常に相衝突してゐる。その結果として社會の中には色々の人物が輩出して来る。

(三)三種の人物　社會組織が常に吾人の追求心發展心を壓迫してゐることは以上の通りであるが、この壓迫に對して各個人が如何なる態度をとるか、その態度如何によつて人物を三つに分ける。

第一は凡人である。昔からの仕來りや、舊慣や、ならばしに絶対に服従し、偏に安きを求めて新しい經驗を求めることもせず、個性を發揮することもしない。俗物といつてもよし、沈香も笑かず屁もひらざる人物といつてもよい。

第二は變りもので、舊慣などを考へず、思つた通りを實行しようとする。よくいへば豪放、悪くいへばやりつばなしで、その結果は犯罪人を産み出すことになる。俗物にも困るが、この方は積極的に更に悪い方である。社會が無暗に個人を制限し壓迫して、その生來の欲求を無視すると、弱いものは壓迫されたまゝ、絶対服従の態度をとつて俗物になり、強いものはそれに反抗して社會の規則を無視して我儘を振舞はうとするに至る。いづれも社會にとつては厄介物である。政治上では愚民といひ、宗教上では愚夫愚婦といふのが俗物に當り、過激派や革命家は變りものゝ方に

屬する。

以上二種の外に、創造的人物といふのがあつて、絶対模倣と根本改革との中間にたち、舊慣を改めつゝ新しい規範を作つて行かうとする。舊慣を捨てる點からいふと、創造者と變り者とはその趣きを異にするけれども、單に舊いものを無視し打破するばかりでなく、更に社會的價値の高い新規範を創造する點にこの種の人物の特色が存してゐる。故に俗物以外のものは、皆舊慣を打破する點に於て個性化を行ふものであるが、創造的人物の個人主義は甲の價値系統から乙の價値系統に移る過渡である。故に眞の進歩はこの創造的人によつて行はれるのである。併しながらその仕事は一新的革命的であつても、必ずしもその人が叛逆的氣質の人であるとは限らない。例へばダルキンの業蹟は實に革命的であつたが、ダルキン自身は極めておとなしい人で、單なる一學究であつた。ダルキンの發表によつて舊約聖書は根柢から覆されて、文字通りには信ぜられなくなつてしまつた程であるが、ダルキンその人はそんなに激烈な人ではなかつた。ところがその個性化があまりに根本的に行はれると、一般世界との連絡がなくなつて、狂人となり、又狂人披ひにされる。いはゆる狂人なるものは、極端に個性化したもので、他社會との連絡の絶えたものである。エネルギー保存の法則を發見したマイエルの如きは狂人ならぬ狂人であつた。マイエル

の考へたことは一般世人の解するところとならなかつたから、ハイムプロンに引籠つたまゝ、市民からは馬鹿披ひにされ、誇大妄想狂と見なされ無理やりに精神病院に入れられてしまつた。晩年になつて、チンダルヤやヘルムホルツから認められるやうになつてからも、市民からは、やはり狂人披ひをうけた。デュリングがマイエルに會見を申込んだとき、ハイムプロンで逢ふことを拒み、態々キルバトにいつて逢つた。それほどハイムプロンの市民は彼を馬鹿披ひにしてゐたのである。

(四)文化の發展と因習 支那は非常に高い文化に到達したけれども、多年、民はよらしむべし、知らしむべからずの主義でやつて來たために、安きを求むる心のみ發達して、新しきを求むる心はすつかり抑壓されてしまつた。従つてそれ以來は少しも進歩しない。之に反して歐洲の各國に燦然たる文化が發達したのは、舊い規範を破らうとする心の傾向が生きて働いた爲である。この傾向はまづ物理學者の手によつて物質界の上に現れ、進化論によつて生物界に及び、今日では人間界に觸れようとしてゐる。今日あらゆる科學が非常なる發達を遂げたのは、全くこの新しきを求むる追求精神の發露である。然るに社會生活上の規範は、學問的研究の結果とは違つて、支配者が命令禁止したり、又は常識できめたものが多いために、随分不合理で且いゝ加減なものが多

く、しかもそれが著しく情緒性を帯びてゐるために、絶對的に正しい究竟的のものと考えられ、更に考究の餘地のないものと考へられてゐるのが常である。例へば切腹の如きは、實に馬鹿々々しいことであるが、當人は非常な意氣込で、それ以外にとるべき道がないとまで、思ひ込んで實行する。もしそれに少しでも批難を加へると、反對に社會から非常なる迫害を蒙るといふ位である。それは規範であるから、その規範に隨はなかつたり、又はそれを批難したりすると、異常人として待遇されるのである。この批難を恐れて、舊い規範から一步も外に出得ない人は即ち平凡人であつて、これ等の人ばかりでは、世の中は少しも進歩しない。學問界と違つて、人間の行動界には、不合理極まるることが、單に昔からの習はしであるといふ理由だけによつて、吾人を支配してゐるものが少くない。例へば前に述べた茶代の如きは即ちそれである。「世間」は實に非科學的な規範を作り、且之を支持する厄介物である。幸、今日はすべてのものが改造の途上にあるのであるから、この機會にあらゆる因習、あらゆる常識規範を打破し、丁度化學が物理學によつて進歩した如く、人間行動の心理的研究によつて新に規範を作り、それによつて新なる進路を開拓したいものである。これは敢へて教育のみではなく、宗教・政治・道德・藝術等皆然りである。

四、模倣の價值 けれども亦一方から考へると、模倣は人類にとつて極めて意義のあるもので、

本能としての模倣性があればこそ、各時代の文化なり發明なり理想なりが保存されて次の時代へと傳へられて行くのである。この作用がなかつたならば、祖先の學習したことを一々やり直して覚えなければならぬが、たゞその結果だけを短時間に習得すれば事済むのは、全くこの模倣作用のお蔭である。かくの如く、模倣によつて社會の慣習等が次代に傳へられて行くことを、生物學的遺傳に倣つて社會的遺傳といつてゐる。

五、社會的遺傳 生物學的又は有機的の遺傳と社會的の遺傳とはよく混同するが、兩者は明らかに區別しておかなければならぬ。子供は生物學的の遺傳を持つて、社會的遺傳の中に生れて來るのである。生物學的遺傳は生殖細胞を介して両親から子へ傳へられるものであるが、社會的遺傳は各個人が新に獲得すべきものである。故に生物學的遺傳は基礎的のものであるが、社會的遺傳は外から來るもので、多少人爲的のものである。生物學的遺傳によつて與へられたものゝ上に、社會的遺傳が附け加へられて行くのである。もし習得は遺傳しないといふ説が是なりとすれば、人類改良の手段としては、優生學が主張してゐるやうに、社會的に結婚を調整して行くより外に方法はないことになる。然るに社會的遺傳といふものがあつて、生物學的遺傳の缺陷を或程度まで補ふことが出来る、これも人間の有機體に可塑性のあるお蔭である。